

三 遊

第 49 号

2025

特別
寄稿

『人生のポケット』

時代小説家 高瀬 乃一



三
潮

第四十九号

目次

人生のポケット

高瀬 乃一 2

テーマ投稿 文

俳句

菊池 信子・藤田 則昭・建部 正昭・土田 紫翠・宮内 香宝

9

短歌

田邊 亨・長利 冬道・畑山 房光・小屋畑謙一・関 柳人
田中 智子・三上 瑛子・浅利 正人

9

川柳

佐々木秀治・稲見 則彦・嵯峨 寛之・辻口風来坊・對馬 洋子
佐藤 光則

11

随想 (エッセイ)

お米の値段を考える

佐々木秀治

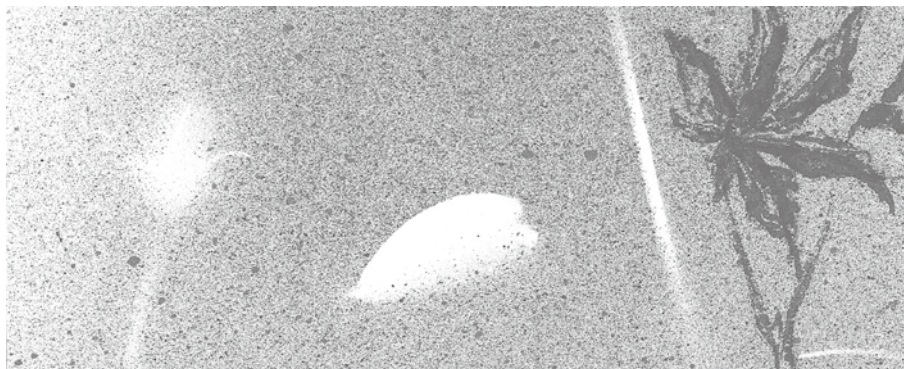
12

カルチャーショック

盛 知香子

13

各部門、受付順に掲載しています。



林檎栽培終焉の記

望むことは

回想(故)佐藤清逸校長の教育

あすを切り開く

旬の北京そして天津を訪ねて〜初の海外旅行〜

手古奈と千空(後編)

父は何を考えていたのか

選択しないという選択

文芸評論・書評

光厳院御集全釈

日露戦争後の二人の文豪

マキヤベリ『君主論』②

児童文学

泣き虫ごんちゃん

三浦順一郎

中道 淑子

工藤 修

久慈 聰子

伊藤 昭雄

建部 正昭

石岡 英夫

山本 隆悦

渡辺 幸子

佐々木唯雄

浅利 正人

神 光子

14

16

18

19

21

23

25

27

30

34

41

48



紀行・ルポルタージュ

碑を訪ねて番外編くワイリピン・コレヒドール島の碑群

西谷ともえ 56

赤倉岳

佐藤 元界 63

詩

リヤカーを引くアイス売り

長利 冬道 71

巫女伝説

郷よしゆき 73

春の香り・長い休日・紫陽花

對馬 洋子 74

記憶の片隅から(16)

江渡浩三郎 76

短歌

田邊 亨・向山 敦子・畑山 房光・小屋畑謙一・関 柳人

78

田中 智子・五戸とし子・三上 瑛子

俳句

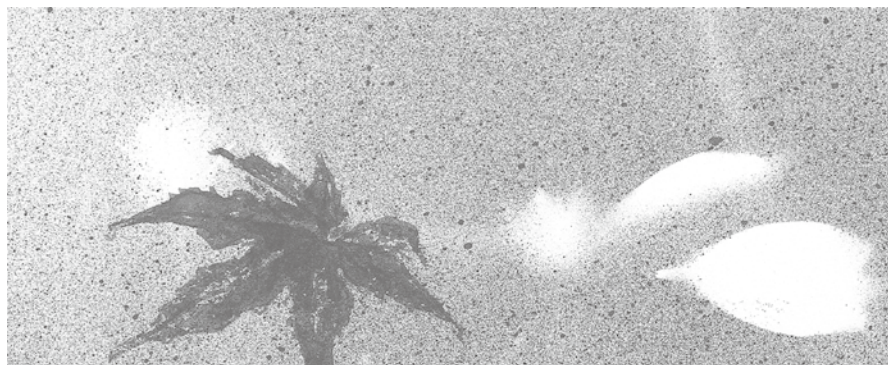
菊池 信子・藤田 則昭・川上 洋雲・土田 紫翠・宮内 香宝

82

川柳

稻見 則彦・嵯峨 寛之・辻口風来坊・佐藤 光則

84



小説（フィクション）

逝きたくないの呟き（後編）

小山田良三 86

荒れ地の中から

長内 勝 95

奇妙な決闘

竹浪 和夫 110

春の珈琲タイム

梶浦 公平 119

続・白魔の顛末

船橋 敏昭 138

青森県高等学校文化連盟文芸部 令和七年度入賞作品

157

〔詩部門〕

〔短歌部門〕

〔俳句部門〕

〔散文部門〕

〔読書体験記部門〕

カット／荒谷ひとみ・寺田肇



グラビアについて

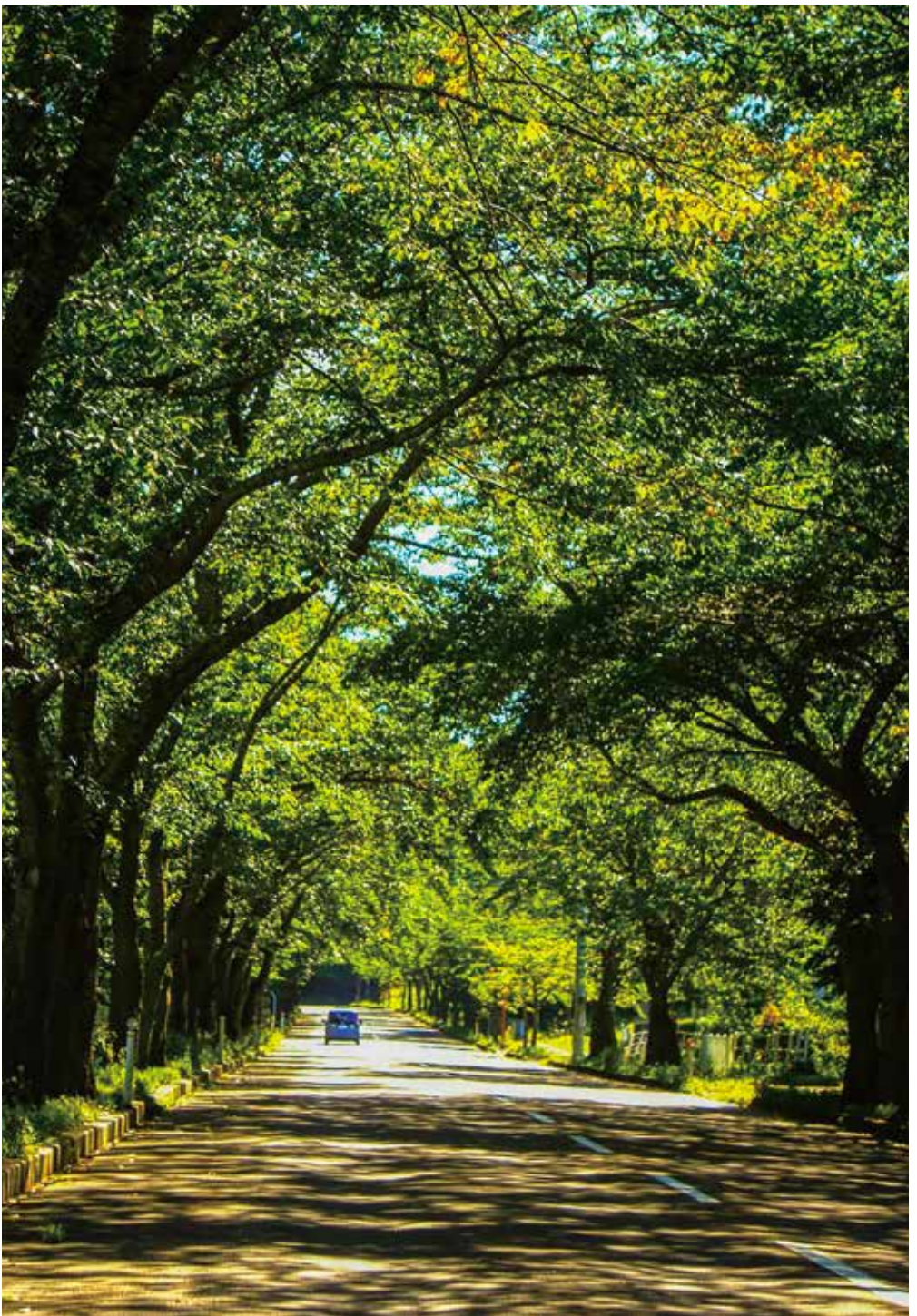
自己満足の効用

内山 祐三

夏に向かい始めた頃、思いがけず本誌のグラビアページ掲載の依頼があった。なぜ、私に？と、当然の疑問が浮かんだが、どこも人材不足の昨今、大変なんだろうと了諾した。

もともと写真を撮るのは好きだったが、決して素人の域を超えることは無く、退職後も先輩に声をかけられて互助部のカメラクラブに入り、年に一度の写真展にクラブ員として出品している。その関連で、教美展にも1品出していたので、おそらくその辺の縁なのであろう。

好きこそものの上手なれとはいうが、私は上手を極めるより自己満足で十分楽しんでいる。お客さんが時々私の作品の前で立ち止まると、それだけで有難くご機嫌となる。自分も楽しく、周りも明るくする、自己満足はいいもんだ。



葉桜トンネル（大畑町国道279号）



縫道石山 春（佐井村福浦地区）



縫道石山 夏（佐井村福浦地区）



縫道石山 秋（佐井村福浦地区）



縫道石山 冬（佐井村福浦地区）



菜のあと（横浜町菜の花畑）



早春の野平高原（佐井村）



古代岩（佐井村福浦海岸）



さざなみ（佐井村福浦海岸）



所庭（佐井村保育所）



願掛岩の夕暮（佐井村矢越地区）



夕暮れの風車（東通村桑畑山より）



茜色の早掛沼（むつ市）



初冬の夕焼け（むつ市）



空っ風（むつ市大平岸壁）



ジム Thompson の赤い家

平成12年度文部省教員海外派遣の一員としてタイを訪れました。飛行機の窓から街並みが見えた時は、初めて異国を見たという感激で胸が一杯になりました。

この絵はその際に見学したジム Thompson の家ですが、赤色のタイ独特の建築様式に目を見張りました。建物の中は人気がなくガラーンとしていましたが、静けさの中に置かれている美術品の奥深さが心に響きました。

一步外に出ると、見た事がない花や沢山の植物が所狭しとばかりに咲き誇り、オアシスそのものでした。そこにいと不思議なことに時間がゆったりと流れているように思われました。

これからも創作活動を続け、自分の世界を持ち、人々の心に残る絵を描き続けたいと思います。

※ジム Thompson アメリカの実業家でタイのシルクを世界に広めた。

島 田 之 恵

人生のポケット

高瀬 乃一

ちかごろ、本を読む時に躊躇する瞬間がある。

老眼が進行したためである。

わたしは時代小説作家の世界ではひよっこだが、デビューが四十代半ば。気付けば更年期と老眼と五十肩のただ中であつた。

いつか「こいつら」は襲つてくるとわかつていたのに、見ぬふりをしてきた。できればわたしなぞ気にせずスルーしてほしかったが、避けられないのが老いなるものらしい。

仕事から参考文献を多く読む。これが急激に億劫になつてきた。そこを怠けたら小説を書くことができないので、なるべく文字の大きな資料を選びたい。だけどそんな都合のよい本はなく、眼鏡をずらして目を細めて焦点を合わせることから、わたしの本読みが始まるのだ。

こうなると、なんの躊躇いもなく本を読む行為が、どれだ

け得難いことだったのかと気付くことになる。

思い返すと、わたしが意識して「本を読んだ」のは、絵本をのぞけば、小学校二年生の時である。

宇野和子（作・絵）『ポケットの中の赤ちゃん』だった。なつ子ちゃんという小さな女の子が、ママのエプロンの中から出てきたムーちゃんという小さな小さな赤ちゃんと出会う物語だ。

主人公のなつ子ちゃんは、お母さんのように一生懸命お世話をしようとする。だがムーちゃんは食いしん坊で、散らかつていないと落ち着かない手のかかる子だった。なかなかのやんちゃぶりを発揮するムーちゃんに、わたしははらはらした。なつ子ちゃんと一緒に、「だめでしょ、ムーちゃん」と心の中でつぶやき、憤つていた。

なにより初めての体験だったのが、本を読み終わった時、

「わたしは本を読んでいたんだ」と我に返ったことだった。これまで絵本や童話は読んでいたはずだが、時間を忘れて本の世界に没入したのは初めてのことだった。しかも、物語の中の時間は、たった三日間だったことも衝撃で、読後は本を手にしてぼんやりしたことを覚えている。

それがきっかけで、わたしが読書家になったかというところでもなかった。学校の図書室へ行くのは先生に命じられて仕方なくだったし、家にあるのは圧倒的に漫画が多かった。学級文庫では、絵や写真の多い図鑑の方が好きで、国語は苦手だったのだ。

小学校低学年の時は、親が買ってくれた百科事典や、漫画日本の歴史などを眺めているような子だった。

初めて夢中になったシリーズは、山川惣治の絵物語「少年ケニヤ」だ。文庫サイズで一ページに書かれている文字よりも挿絵が大きく、漫画好きのわたしにも読みやすかった。その頃から、文庫サイズの本の手軽さに魅了され、やがてティーンズ御用達のコバルト文庫を読むようになっていた。当時クラスメイトに読書家がいて、彼女から貸してもらいうちに自分でも小遣いで買い集めるようになったのだ。

十代の多感な頃は、田中雅美や、氷室冴子を愛読していた。全著作を集めて読むような多読の気質ではなく、気に入ったものをひたすら繰り返し読んで読むタイプだった。

赤川次郎の吸血鬼シリーズは特にお気に入り、『吸血鬼

はおとしごろ』は中学校が休みの日にわくわくして本を開いた記憶がある。半吸血鬼のエリカと父親のクロロクの掛け合いが面白かった。本を読むというより、頭の中に映像が浮かび上がるようなライトな文章が、本読みの苦手なわたしに向いていたと思う。

その頃、世の中では外国の推理小説が流行っていた。シドニー・シェルダンの翻訳本が自宅にあったので、それを読んで外国に行った気になっていた。友達の影響でハリウッド映画にはまっていたので、ノベライズ本も好きで、この頃はレンタルビデオで洋画を借り、映画雑誌の『スクリーン』や『ロードショー』を毎号欠かさず購入していた。

恰好をつけて、近代小説や純文学も読んでみたが、感受性の薄い娘だったのでぴんとこなかった。

高校生くらいになると、読書の傾向が決まってくる。内田康夫の浅見光彦シリーズは、親の影響で読み漁った。綾辻行人の館シリーズ、パトリシア・コーンウェルの検視官シリーズに触れたのもこの頃だろう。わたしは確実に推理小説が好きだった。

同時にこの頃、田中芳樹のスペースオペラ『銀河英雄伝説』やファンタジーにどっぷりとはまり、これが小説家になりたいと考えるきっかけとなったのだ。だから私は物語を書き始めた当初は、推理小説が好きなくせに、ファンタジーやSF小説でデビューしようとたくらんでいたのである。

短大に通いながら、ひたすら紙の原稿用紙に手書きで小説を書いていた。ファンタジーの世界の設定を作り、通貨や度量衡も自作して悦に入っていた。学校をさぼって、ファストフード店や図書館で小説を書きながら、いつか本を出したいと願っていたのだ。

だがたやすく商業用に繋がる小説など書けず、何作か公募に応募したあとは、夢を追うことをやめてしまった。ちょうど私が短大に入学した直後にバブルが崩壊し、就職氷河期というとても寒々しい世の中になっていた。

現実の世界が充実していない人間に、空想の世界が書けるわけがないと、言い訳をこじつけただけだったかもしれない。書けない理由を世の中のせいにしたのだ。

それからわたしが読書を全くしなかったかというところではない。社会人になると、推理物に加えて時代小説も好むようになっていた。『ハリー・ポッター』シリーズを読みながら、子育てにまい進していた。相変わらず読書傾向が迷走しているが、本屋や図書館で手に取った本をとりあえず読む、という子どもの頃からの癖が、この頃のわたしにとっては、母親業の傍らで唯一できる、仮想冒険のようなものだったのである。我が子がひとりて本を読めるようになった頃、わたしの脳裏に浮かんだのが『ポケットの中の赤ちゃん』だった。料理をしていた時、ふとエプロンのポケットに手を入れると、く

しゃくしゃのレシートやゴミが指に触れたのだ。

ムーちゃんという名前は忘れていたが、小さなちゃんな赤ちゃんがいたことが、なぜか指先に感覚として残っていた本を読んだだけなのに、触覚としてイメージがよみがえったことに、わたしはとても驚いたのである。

「ムーちゃんにもう一度会いたい」

わたしはすぐに当時暮らしていた町の図書館へ本を探しに行った。わが子にも読んでもらいたいという気持ちだったが、なによりわたしが読みたかったのだ。これまで読んできた本は数々あれど、現実を忘れて物語に没入きつたのは、あの本以外になかったのである。

三十年越しに手にした『ポケットの中の赤ちゃん』を読んだあと、わたしは別の衝撃を受けていた。目で文字を追いつつかりと読んでいた。物語を理解しようとし、ページをめくり、挿絵を見て、読書をしていた。最後まで読んで、面白さを再認識したと同時に、大事なものを無くした気にさせられていた。

本を閉じた時、「もうあの感覚はもどってこない」と気が付いたのだ。

小学校二年生のわたしは、頭ではなく五感で本を読んでいたのである。年齢を重ねるほどに、言葉の裏側を読んでみたり、こちらから作者に想いを投げかけたりしてしまうものだ。幼い頃、そんなひねくれた頭で物語を読んでいたらどうか。

楽しい、うれしい、悲しい。登場人物の中に憑依するように物語を読み進めていたのではないだろうか。

その感覚は、年を重ねると限りなく薄くなり、頭でつかちな「知っている大人」の目線で読んでしまいがちだ。『ポケットの中の赤ちゃん』で感じたのは、時は戻らないという当たり前の事実と、感性もまたその時限りの尊いものであるということだった。

近頃、また似たような感覚を味わった。

二十代の頃に読んでいた村上春樹の『海辺のカフカ』を再読しようと手に取った時だ。村上作品の中では特に気に入る、独身時代に何度か読み返していたが、そのあと二十年以上開いていなかった。カフカ少年が四国の図書館に身を寄せて過ごす、あの静謐な空間をまた体験したくなったのである。

もしかしたらカフカ少年には憑依できないかもしれないと思いつき始めると、やはりそこに今のわたしが入る隙間はなかった。カフカはなぜこんなにヒリヒリして生きているんだろう、もつとのんびり親のすねをかじればいいのに、などといらぬおせっかいを吹きながら読んでしまう。あの頃わたしはカフカの中にいたのに、今は逃避していく少年を外側から眺めている傍観者になっていた。

だが、図書館の空気を感じることができた。物語が作りあげた空間に溶け込むことができたということだ。図書館という静かで書籍の匂いがあふれる空間に身を置いたことがある

からだろう。

たとえば、水泳の経験がある人とならない人では、水泳をテーマにした物語では受け取り方が変わるだろう。学校のプールで触れた水しぶきの冷たさ、水滴が青空に吸い込まれていく光景、プールサイドの足の裏の熱さ、異性の目を気にする恥じらい。そんなものが言葉の奥から吹きあがり、読書の幅をさらに広げてくれる。この点では、重ねてきた体験というものがとても重要になるのだ。

たとえば、なにもできない引きこもりの時期があるとすると、その感覚は頭で理解するよりも体験した人の方が強く感じるができるだろう。引きこもりを題材にした本を手にとった時、もしかしたら人によっては一人で悩み苦しんだ時を思い出してその本を手放すかもしれない。だが、同時にそこには言葉にできなかった体験が、作家の手によって記されている。体験していなかった人に比べて、引きこもりを体験した人は感情やその時の部屋の空気感とともに物語を読み進めることができるに違いない。

この気付きは、小説を書くうえで大きな転機となった。

人は、物語を作る時は自分の中に何も無いことは書けないのだ。それは物質的な話ではなく精神的な話だ。もし実際に経験したことしか書けなければ、推理作家は軒並み殺人者になってしまおうし、SFでは宇宙の旅をしていなければならな

い。

小説はレポートや教科書ではなく、人の物語だ。だから作家はたくさんの体験はもとより、当たり前前の感情を持ち合わせねばならない。

わたしが一時小説から離れていたことは前述した。なにを書いたらいいかわからなかったのだ。自分の感情をうまく言葉にできず、現実の暮らしに追われて迷走していた。小説家になりたいではいけなかった。なにを書きたいか、どんなことを感じて生きているかが重要だとようやく気付いた時、少しずつだが小説を書くことが楽しくなっていた。

もつと早く気付けばよかったが、わたしはかなり頭でっかちなので、人から言われるだけでは理解できなかっただろう。この気付きに至るまで、二十年近くを要してしまつた。なんとという長い遠回り。どれだけ道に迷つたことだろうか。

だが、この迷い道の時間が無意味だつたかというところそれは間違いで、どんな道も前に進んでいく通路になつていたことには変わりない。就職に迷い、夢に破れ、結婚して子育てに苦悩した。日常の些細な出来事を前にして、喜んだり泣いたりやけになつたりして、少しずつ大人になつていった。

本屋に行けば、かつてのわたしが手放した夢の形が並んでいて胸が苦しくなつたが、家に帰つて子どもの顔を見ればこれでよかつたのだと自分に言い聞かせた。それでもあきらめられず小説を書き、何度も公募では落選。そのたびに不機嫌

になり家族に当たり散らして、すぐに謝つた。

そんなばかりしいけれども当たり前前の暮らしは、わたしに未知の感情を与えてくれた。それらは、やがて物語の中で動き回る登場人物の血となり肉となつていったのだ。

だけど人の感じ方や想像力とは千差万別である。どんな物語を書こうが、それがどのように受け取られるかもまた未知である。わたしがこれまで書いてきた本を喜んでくれる人もいれば、いやそれは違うと首を振る人もいる。それは他人だから仕方ないのだ。

だが、わたしは作家として金銭を得るといふ、出版物を刊行するうえで一定の責任を負っているので、手に取つてくれた人にはあまり失望はしてほしくない。経験量や感情の違いは、文章力で補う必要がある。おそらく、これがアマチュアとプロの違いだろう。

もしもこの先、職業作家としてやつていこうと考えている方がいたら、とにかく感情の体験と、より多くの文章を書くことをお勧めする。

まず、上手な文章を書く手段は、とにかく繰り返してたくさん作品を書き続けることだ。わたしが短編小説でデビューした直後に、多くの担当者から言われたのは、とにかく書き続ければ文章はおのずとよくなつていくということだった。もちろん担当者や校閲の方の助言や手直しはあるが、リズムのようなものができてきたと、この頃強く感じている。

どこを描き足し、どこを削除するか。文章を作る癖も人それぞれで、わたしは文章を書きすぎる癖があるのがわかっているので、改稿する時はどこを削除していくかを見極める必要がある。そんな癖も、書き続ければわかっていく。毎日一日でもいいから書いていく。たまに自分を甘やかすことはあるが、労働というのはそういうものなのだ。

だが、それ以上に大事なのが、やはり感情の体験だ。

近頃体験格差などという言葉が横行している。たくさんの体験をさせた方が子どもの教育、将来に有益だという世論のひとつである。だが、この体験は家庭の事情、性格、住環境などが左右する。実際に、わたしは自分の子どもたちに、十分な習い事や旅行などをさせてやることができなかった。

体験格差が大きく主張されるにつれ、不安に駆られた大人は多いだろう。とくにこれから未来を担う子を持つ親、もしくは今まさに未来を見据える子どもたちの中に、今の自分たちは恵まれないなどとしよげている人は多いのではないだろうか。わたしも、自分の子どもたちを見ると、もっとあの頃たくさんの経験をさせてあげればよかったと後悔するところがある。

だがそれはわたしの勘定で、子どもたちにとってはどうかだろうか。なにもなかったのか。理想を押し付けていたのではないか。他人の感情などというのは、人それぞれ全く理解できないものである。子どもでも親でも、血がつながっていて

も分かるものではない。実際、わたしの後悔の念をよそに、わが子らは適度に好き勝手楽しんでやっている。

寂しいとか後悔という後ろ向きな感情だって、貴重な感情の体験だ。夏休み、どこにも連れて行ってもらえなかったよ、とぼやくことだって体験だ。その中でなにをしてきたのか思い返せば、きつと心が震えた瞬間があるはずだ。ゲームをし続けて気付いたら夏休みが終わっていた、なんて人も多いだろうが、それだって「あの頃」の体験だ。毎日勉強ばかりで青春がなかったと思うことも、親と喧嘩ばかりの毎日でイライラしたことだって、体験なのだ。

だからといって、なにもしなくていいわけではない。太陽の下に体を出して手を広げて、暑さ寒さを感じてほしい。人と多く接して話をして、人が自分とは違うことを知ってほしい。その中で気の合う人や体験があつたら、それは奇跡に近いほど素晴らしいことだと知ってほしい。

体を使うことがなによりも理想だが、わたしたちは「心を動かす」という最も強い体験をすることができる生物である。

もしも自分の体をどこかへ運ぶことが困難ならば、一冊でもいいから本を読んでほしい。そこには思いもよらない未知の世界があり、もしくは自分と同じ考えの人が登場する奇跡に出会えるかもしれない。見たことのない感情、風景、時代が繰り広げられるのは、きつと書物の中にしかないと思う。

もちろん漫画だってネットだっていい。中には本を読むのが

困難な人がいるだろう。であれば耳や指先で知ってほしい。感情の体験は、どこでもできる。片田舎でも宇宙の片隅でも暗い部屋の中でも。

わたしは『ポケットの赤ちゃん』というありえない世界を、いまでも指先で覚えている。痲癩をおこしたムーちゃんに引っかけられた痛みを、いまでも思い出すことができる。実際にはいなかったのに、感情と触覚が覚えている。

ポケットには、「落っこちる」という意味もあるそうだ。

小学校二年生のわたしは、まさに物語の世界に落っこちていた。思い返す時は物語の言葉ではなく、触感や胸の奥のざわざわする感じである。



写真撮影・島袋智子氏

五歳の時、十歳の時、十五歳の時、二十歳の時に読んだ本は、その時の体験として強く残されている。もちろん、五十歳の更年期真っただ中にあっても、不安の中で読んだという体験は、またほかとは違った感情を残してくれるだろう。

人は育ち、違う感覚を身に着けていく。

それができる読書は、最高の娯楽であり、感情のポケットにいろんな体験を詰め込むことのできる現代の「魔法」にちがいない。

プロフィール

高瀬 乃一（たかせ・のいち）

愛知県出身三沢市在住。2020年「をりをりよみ耽り」で第100回オール讀物新人賞受賞。2022年のデビュー作『貸本屋おせん』で第13回本屋が選ぶ時代小説対象候補、第12回日本歴史時代作家協会賞新人賞受賞。他の著書に『梅の実るまで―茅野淳之介幕末日乗―』『往来絵巻』など。近著は『天馬の子』（KADOKAWA）。

文

俳句

菊池 信子

恋文の多き歌留多を取りあえり

藤田 則昭

梅雨明ける癖字の文の懐かしく

建部 正昭

モネの絵とパリからの文風薫る

土田 紫翠

戦場の父よりの文終戦八十年

宮内 香宝

山猫の団栗の文いつ届く

短歌

田邊 亨

君に書く文の切手は桜花すこし濡らして
まっすぐに貼る

長利 冬道

六法は口語になれど短歌では文語の響き
分かって欲しい

畑山 房光

納骨に般若心経の手ぬぐいの袋に
最後の恋文を入れる

小屋畑 謙一

山実り栗落つる音聞きし時縄文人びとの
影通り過ぐ

関 柳人

文体に気を使いつつ書きあげて
自己満足のビールは旨し

田中 智子

亡き兄ともの親友と勤める巡り合わせ夕べを長く
老母ははに文書く

三上 瑛子

“小説を書けば”という人いますけど
長文となるし今ではおっくう

浅利 正人

すてきな文おだてられ出す年賀状
今年も出せば四十九年

川柳

佐藤 光則

文句なしすべて受け入れ独り立ち

佐々木 秀治

地図記号 文に丸して 学校だ

稲見 則彦

作文はA I任せ高いびき

嵯峨 寛之

君からの文をふみ読んだら我元気

辻口 風来坊

母子手帳きずな溢れる手書き文字

對馬 洋子

スマホ悪 文明詐欺に ながら族

お米の値段を 考える

佐々木 秀 治

昨年来の米の価格上昇に、高くて食えなくなつたとの消費者の声をよく聞きます。私自身も同感で、麺やパンの購入も以前より増えたようにも思っています。

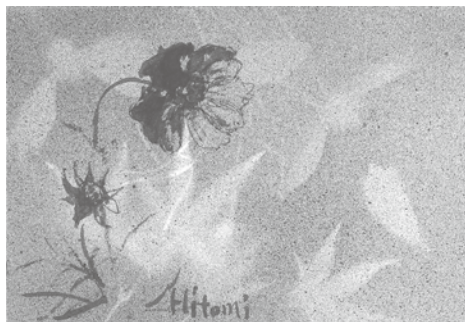
そこで、お米の値段を私なりに考えてみました。現在スーパー等での販売価格は、5キロで3,600円前後と一昨年の2倍超です。1キロあたり7

00円くらいです。お米1キロは約7合ですから、1合では100円です。1合を炊飯するとお茶碗3杯くらいになりますから、これをふまえて、麺(ラーメン、そば、うどん)や、各種パンの価格と比較してみると、正直言つてさほどお米が高額だとは思えません。みなさんはどう思われますか。

さて、報道等によると、昨年県内の農協が農業者に支払つた米の買い入れ金(精算後)は前年より高騰し、60キロあたり22,000円前後とのこととです。5キロ価格に単純に換算すると約1,800円です。スーパーの販売価格は3,600円ですから、なぜ2倍?と思つてしまいます。政府の備蓄米の扱いも気になりますが、生産者や流通販売業者、そして消費者と、みんなが納得する価格で販売され、おい

しい青森県産米の消費が増えることを願つてやみません。

(注 価格等は、いずれも投稿時)



カルチャー シヨック

盛
知香子

シフトで仕事をしている息子、娘と月一回位、休みが重なった日に御飯を食べに行く事している。できるなら新しい店、食べた事のない店にお試しで行って、「次、有り？無し？」と判定するのも楽しく、もちろん情報を仕入れるのは子供達だが、支払いはい私！それでもしなければコロナで引きこもりになった腰はあがらない。コロナ前は自称ランチの女王として食べ歩いてきたのである。つい先日、未だ行っていないイタリアンに行くたびつくり、

注文はスマホでテーブルに置いてあるQRコードを写しメニューをタップするとの事、私は紙のメニューを見て、息子にこれとこれと指示、厨房の方を見ると配膳用のロボットがいた。テレビでは見た事があったが現物を見たのは初めてだ。最近スーパリーの支払いが機械化されて、タッチパネル様式なので少しずつ慣れてはきたものの、回転寿司の注文もタブレット操作だし、ジジ、ババは独りで外食もできない。何とかガラケーから簡単スマホにしたものの電話とメールで用が足りるし、その他の機能を知る由もない。世の中が急激な変化をとげ、「ボツンと一軒家」状態になったようである。それでも九歳離れた姉夫婦が必要にせまられてスマホに取り入れた「キップ」で東京に飛行機で往復した話を聞き、頑張ればできるのだろうという漠然とした希望を抱いている。中国では生活保護の人にもスマホを持たせ、デジタル生活をさせているというし、もう少しの残り

の人生を甘えず、必死にバットを振り続けなければならないのだろう。AIに負けるな！

人生百年時代とマスコミは煽るが「ブラン75」という映画は75歳になったら御褒美のおこづかいをもらい安楽死の選択をさせる社会を表現していて、老人はお荷物扱い！決して有り得ない事でない分、どう仕様もない気分させられる。昭和のバブルを生きた自分は未だあきらめもつくが子世代は将来の年金で生活できるとも思えず、ますます子供をつくらない、つくれない世の中になる気がする。海外を見てもステキな福祉国家はごく少ないし、あちこちで戦争はしてるし、地球自体可成ヤバイ状態なのかもしれない。後期高齢者にもうすぐ手が届く今、シヨックをシヨックと感じられる内に行動を起こしたい！

林檎栽培 終焉の記

三浦 順一郎

林檎「つがる」がスーパーに並ぶのは、9月上旬頃である。小玉なのに値段が高い。買う気にならない。林檎農家生まれの自尊心が許さぬ。30年もそれを守り続けてきた。二、三日待てば、兄が極上の「つがる」を2箱も送つてよこす。それを丸ごとかじる。それにして去年の林檎の高値に辟易した。ふじ1箱が店頭価格で1万8千円に高騰した。

林檎畑に行く途中の水田の中に、一本の松が生えていた。唐糸塚である。

今の塚は赤い柵で囲まれ、その内側に板碑いこひが建ち、付近から出土した五輪塔が置かれている。ハリギリが木になった。ここから見る岩木山は昔と変わらない。山裾やますそと山壁やまひたがくつきりしている。端正な美しさを形容する言葉が出てこない。

鎌倉幕府第5代執権の北条時頼に寵愛された唐糸御前は、他の愛妾の嫉妬に遭い、鎌倉から藤崎に逃れて来た。時頼が廻国して来るといふ話を聞き、衰えた容色を見せたくないと思き、柳の池に身を投じた(唐糸御前伝説)。

町は池を埋めて「唐糸御前史跡公園」に整備し、唐糸御前像を建てた。弘前の長勝寺にある国重要文化財指定の「嘉元鐘かげんのかね」は、格式の高い護国寺、後の満藏寺(万藏寺)の鐘だという。唐糸塚から西へ400m行つた林檎園内に、護国寺跡がある。藤崎町は中世の面影を多く残す。それを郷土自慢にする気はない。時頼と唐糸御前が藤崎に来た、来ないを問わない。数百年以

上も語り継いできた人々の思いを大事にしたい。

65年以上前に、白い林檎の花が咲き誇る農道を通つて、昼食の弁当を届けた。夏には蝉の鳴き声が畑に充滿していた。畑内の通路に無数の小さな穴があり、その中にスズメノカタビラの茎を差し込む。すると穴の中の虫が茎に噛みつく。穴の周りを掘り広げると、アブラゼミの幼虫が怒つて現れた。また羽化したばかりの成虫が、早朝の林檎の幹や枝にしがみついていた。透き通つた白い羽根がすがすがしかった。今は農葉散布のため幼虫がいなし、畑に入ると怒られる。当然である。

これまで私が食べた林檎の特色を紹介する。出始めの林檎が甘味の少ない大中だ。昭和30年代の主役が国光こくこう(雪の下)と紅玉べんぎゆ(千成)である。紅玉は真つ赤で酸味がある。今はアップルパイに使用される。光沢と酸味がある旭あすと、皮をむくと赤筋が出るレッドゴールドはさっぱりした味だ。砂糖味がす

る印度も忘れ難い。新品種のスターキングデリシヤスは上品な味で、高値で売れた。農家の暮らし向きを変えた。その後大きな林檎の世界一が栽培された。落下防止のためにネットですつした。蜜が多くて甘みのある北斗、酸味と薄紫の上品な表皮のある陸奥、酸味が強いジヨナゴールドもうまかった。芳香で人を引き付ける黄色の王林が登場した。ふじは長持ちし、甘味がある。無袋は味がいい。光沢が無いため、有袋より値段が下がる。ふじ発祥の地が藤崎町である。さらに知らない品種のぐんま名月・星の金貨・シナノゴールド等が登場した。味の区別ができないでいる。

退職後は秋に林檎収穫を四、五日間手伝った。帰りの乗用車に、3段詰め林檎箱を12箱も積んだ。兄からの贈り物である。

暮れには贈答用の林檎を買いに行く。親戚や世話になった人に、最高級の林檎を贈る。傷ついた林檎は除く。兄が

くれた贈答用のふじ・王林等をまた12箱も積んで帰る。知人に林檎を12個ずつあげる。皆喜んでもらった。

冬は雪に足をとられて枝の雪落としと剪定を始める。春が来たら枝集め、焼却、幹の皮剥ぎ、肥料散布、人工授粉がある。夏は炎天下での草刈り、摘果、薬剤散布、袋掛け、袋取りが行われる。秋になると反射シート敷き、つる回し、収穫、集荷、選果・箱詰め、運搬等がある。兄一人の作業によつてうまい林檎ができ、思う存分に食べられた。

後継者がいない農家は、畑を処分しなければならぬ。二つの処理方法がある。一つは畑を売却する。宅地と比較すれば畑地は驚異の低価格である。

二つは買い手が無い場合に、林檎の木を伐採する。もつたいない、惜しいといつてもどうにもできない。伐採は暗黙の決まりなのだ。林檎の木を放置すると病害虫が発生する。近隣の畑に伝染して迷惑をかける。補償問題も生じる。年寄りが一人で100本以上を伐

採し、運搬処理をするのは重労働である。手伝い賃も相当払わなければならない。高齢化と後継者不足は農家が直面する問題である。切株のない更地の畑が周辺に点在する。

父の死後、兄は一人で畑仕事をこなした。米作りもした。80歳を超えてから体力の衰えが目立った。遂に畑を開放す決心をした。5代110年にわたる僅か3アール(3反)の林檎栽培が終焉した。畑の買い手がつき、77本の林檎の木は、伐採の憂き目を免れた。



望むことは

中道 淑子

吸引を頼みに病院の廊下を走った。父の最後の歌に

『仙人は霞を食めど我は今

点滴受けて命つなげり』

食べ物も水も、のどにつまる父は、霞を食める仙人が、どんなに羨ましかつただろう。

母は、ベッドで両手を上げ、まるで縫い物をしているように、よく指を動かしていた。家計のたしに和裁を頑張っていた頃の記憶のせいなのだろう。

「あそこに三人いる」

と部屋の棚の方を指して穏やかに逝つた。

肺癌で息が苦しい夫は

「早くよくなり早く退院したい。よくなったら、車で思い出の土地を巡ってみたい」

と日記に書いていた。携帯用の酸素ボンベの見本帳を見ては、外をドライブするのを夢見ていた。転院の際、娘の車で外に出た時

「新鮮だ。新鮮だ」

と大喜び。その表情が忘れられない。

父、母、夫、と六年の間に大事な家族を次々と見送つた私は、「死とはこういうものだ。誰でも避けられないのだ」と、改めて死を認め、死を理解したような気がした。

今年、私は九十一才になった。ちょうど父と母がそれぞれ亡くなった年である。いつの間にかこんな年に。年を取ることが誰でも当たり前のことなのだ。が、なかなか自分では認めにくい。でも、耳が遠くなり、何回も聞き返しては怒られたり、目が疲れやすく、また、見えにくくなってきたり、咳が出やすく、そのたびに飴をしゃぶり、水を飲み、夜中に何度もトイレに起き、そのつどラジオの深夜便を聞いたり、腰や背中が痛み、便秘に悩まされ、物忘れが多くなった。一步一步確実に老いは進んでいる。

以前、津軽の海岸沿いを夫が車を走らせていた。深浦を過ぎ大戸瀬のあたりだっただろうか。大きな夕日が刻々

死の間際にいったい私は何を望むだろう。父や母や夫が、あの世から迎えるに来てくれて、そして、子供や孫たちには「ありがとう」と言いながら、この世を去っていったら。希望としては、そんなスマートに旅立つことができたら、とても有難いのだが。でも、こればかりは、神様、仏様、自然にお任せするしかないのだろう。痛みや苦しみの中でこの世を去るのは、やはり恐ろしいが仕方がない。それが運命なら。父は痰に苦しんだ。私は何度も痰の

と水平線に近づいていた。

「お父さん。太陽が沈む前に、鯉ヶ沢の家に着けるだろうか」

私たちは、太陽と競争していた。赤々と燃える夕日、空、海、キラキラ、この世の物とは思えないほど美しかった。神々しかった。少しづつ少しづつ、太陽が隠れていった。辺りを神秘の色に染めながら。朱、えんじ、だいたい、桃、すみれ……。そして暗くなった。家に着く前に。

私はその時、命を感じていた。大自然の中の自分の小さな命。やがて沈むであろう命を。この自然の中で、自分の存在はとてとても小さい。でも愛おしい。そして沈む。沈む前にやっておかなければならないのは何だろう。悔いを残さぬためにも。

鮎や鮭は、故郷の川に戻り卵を産もうとする。私も年を取るにつれ、昔のことが無性に懐かしくなってきた。そんな私に子供たちがいろいろな旅のプレゼントをしてくれ、また、応援して

くれた。

小学校時代に過ごした中野では、住んでいた家の空き地にも立ってみたい。通っていた小学校の校庭にも立ってみたい。また、学童疎開で行った長野の光久寺や、すぐそばの神社にも行くことができた。そこには、子供時代の私があった。そして、若かった父や母もいた。夫と訪れた思い出の地にも行った。広島、山口、日光など。見覚えのある物を見つけると、ここには夫と来たんだと納得し、それにつれて、忘れていた思い出の数々が呼び起こされた。

時々、私の中に、父や母や夫がいるのを感じることもある。美しい海を見ていると

「きれいな海だなあ」

と感嘆している父を。鮮やかな紅葉の下では

「みごとだね」

と母が楽しげに踊っている姿を。そして、鮎屋に入って鮎を食べていると

「おいしいなあ」

と満面に笑みを浮かべている夫を。

かわいい孫たちを見ると、あのあどけなかつた頃の子供たちを思い出す。どの子もかわいかった。また、どの孫たちもかわいい。

時の経つのは何て早いのだろう。九十才になってしまった。私なりにけんめいに生きてきた。まあまあ幸せな人生だった。子供たちや孫たち曾孫も、人生の終わりにには、幸せだったと言える様に頑張って生きてほしい。



H. T.

回想(故)佐藤清逸 校長の教育

工藤 修

昭和四十二年(1967)、青森県教育委員会指導課主任指導主事から黒石市立黒石小学校校長として赴任。小生は、四年間(昭44〜昭47)扱あつかわれた若造(教員)の一人であった。今でも五十年前の佐藤校長の学校経営は忘れられない。

何といつても特筆すべきは、健康教育と情操教育であろう。

その一つ、全国健康教育優良学校(朝日新聞社主催)の受賞(昭46・11)である。弘前大学の教授を中心と

した審査員団が来て、教科の授業は勿論、児童会活動や子どもの自主的な活動の各場面を実際に視察したこと。また、教師、父母代表に対しての子ども達からの健康教育に関する鋭い質問に黒石小学校の当時の仲間(教員)も驚いたのを思い出す。結果として、大規模・小規模校、各一校県一位に準ずる各学校特選校に選ばれたのも思い出す。情操教育では、彼の得意とするとこ

ろで、校長みずから、その考えを皆(教員)に言うのである。「情操教育」というのは——美しいもの善なる行為聖なる境地や真理であることなど、価値ある世界を求めようとする持続的な価値的な感情である——と哲学的なこ

とばで言い、更に感情を培う教育には——
○美を味わう教育
○善なる行動に感動する教育
○未知なるものを学ぶことに喜びを感じさせる教育——と言っていたこと
もつと言い換えると、感じとらせるこ

と、感情に訴えること、しみじみと感動の余韻をかみしめさせること、生命をおののかせ生きる喜びを与え、生きがいを感じさせることだと言うのである。

小生が佐藤校長に扱かれた心に残る実践の場面は、彼のイメージに沿ったものだったのだろうか。

●小生の学級(六年二組)の授業を前ぶれもなく来てみる。感想をメモして渡す。

●全校写生大会での児童に対する指導。みずからの指導を小生にみせる姿。

●全校朝会での詩の指導(一年〜六年の児童全員へのO・H・Pオ・エイチ・ピーを使っての朗読)

●秋の運動会——大太鼓の登場と打つ場面、その音に驚く感動の場面をつくらせること。

●一日一回以上、子ども達を笑わせる工夫。

●小動物や植物の世界を見つめさせる。雪上でのスグリ回し大会の実施。

——昔の子ども達の遊びの再現——
彼のイメージに翻弄ホウリョウされた四年間、心身ともに疲れたのを思い出す。小生、ただけではなく、他の教員にも実践要求したことを聞く。担当教員の反対意見を押し切つての頑固さ、強引さは、今では考えられない当時であつた。

彼のこのような言動の源はどこからくるのか不思議でならなかつた。今

(令和七年四月)、彼の自費出版書籍「情操シヨウソウ遼白リョウハク」——いよいよよしよし——

をみて、なるほどと。人に何と言われようと自分の考えていることを納得のいくまでやってみる熱血漢の教師であつたなと思う。みずから、油絵にも挑戦し、第34回自由美術展に応募した作品「鳥を呼ぶ人」が入選しその絵が、彼の出版書籍の最初のページ写真入りを見て、あの当時の校長の姿、すごさを感じるのである。

——(故)佐藤清逸校長の思い——

『白はすべての色を含み、すべてを越えている。私はその白の不思議にし

ばらく迷つた。この迷いの姿を文に収める。いよいよ白き心を得んと……。白は清徹な感興を与えてくれるのである。』と。

小生に五十年前に話してくれたことば——竹林の緑、シヤクナゲの芽出しの緑は生命イノチの勢いと清々スラスラしさを与えてくれる。庭石はそれをじつとみている。——

カンバスの絵を思わせるような言葉が耳に残る。

いつのまにか、小生も老人の身となつている今、彼とは生きかたが違つているが、影響は受けている。美しく老いる目標を願つている小生の毎日、きびしいけれど、健康と生命イノチあるモノに心を動かし、感動のある豊かな生きかたをしたいものだ。五十年前に扱かれた大先輩に感謝の気持ちになつている今の自分を不思議に思う。

合掌！

あすを切り開く

久慈聰子

母校、元弘前市立第一大成小学校の跡地は交流広場になると私は今年知つた。

脳裏にある学校での学習は和井内貞行のことで、くわしく知らず、ただ苦勞の連続と貧しさがせつなかつた。彼は、釣りをしながら、水草が茂りイモリや小虫がいるので魚は住めると確信を持つていたが、村人らにずっと反対され続けた。湖の沿岸住民の反対の考えの中にトワダ信仰のせいや迷信があつたのだらうと、村中健太氏は思つ

ている。

彼が水神様のたたりを恐れず、魚を放流したのは、1884年、27才の時、鯉を6百尾、1886年には金魚、1892年に鮒を千尾、1900年には河鱒を5千尾放流した。すると孵化したのは3万5千尾だった。1902年に、カバチエツポ鱒を北海道から持って来て孵化させた。それは支笏湖のヒメマスで小型だった。1903年に孵化させたヒメマス5万尾を十和田湖に放流した。1905年、28才の時、ヒメマスが群れをなして戻って来た。とうとう湖に最適な魚を見つけたのだ。皆に魚を食べさせたいという一心が通じたのだ。私は、児童に難解な事柄でも真実を教えるべきで、大人になり深く知り得る事もあるのだと身をもって分かった。

現職の頃、教職員研修旅行でニシン御殿を目にし永遠に魚が捕れるわけではないと知った。

現在、海水温の上昇や海流の変化が

あり、いろんな地区で育てる漁業や養殖のニーズが高まってきた。函館では令和4年度からキングサーモンの種苗の作出に成功し、海面養殖試験のための生け簀を製作中である。岩手県の山田湾ではヨーロッパヒラガキの養殖をしている。25年4月6日、2万個の種苗を湾に沈めた。若い人らの挑戦もある。宮古市の県立宮古水産高校では、キタムラサキウニの陸上養殖をしている。彼らに市と田老町漁協が力を貸し、閉鎖循環式を取り入れている。気仙沼市では、26年の春を目前に陸上養殖施設が完成し、ギンザケ、トラウトサーモンを育てる予定である。宮城県では石巻市に陸上の養殖研究施設を整備、ギンザケ、イワナの養殖研究に乗り出した。全国一を誇るホヤが落込み、宮城が南限なので危機感を強めており、トリガイ、アコヤガイ、チョウザメ養殖を新たに導入しようとしている。三陸、福島沖では冷水性黒潮が北上し、親潮が北方に止まる傾向にある。宮城

県で暖水性のタチウオ、福島県では伊勢エビ、マイワシが増えている。それにひきかえ、三重県では近年、伊勢エビが不漁でシラスが半減している。福島県浪江町では、24年6月にサバの養殖を開始した。人工海水を利用、完全閉鎖式で水を浄化し再利用している。新潟ではワカメの養殖に水深を工夫している。静岡県、水産研究教育機構の実験棟では24年11月にウナギの採卵作業が始まり毎週約200万粒の受精卵を作ることができた。孵化後の餌に鶏卵を与えているので私は、良い物ができると思った。長崎ではサーモンを養殖中である。久米島では、人にあたらないカキの量産化を目指して海洋深層水を使用しており、餌のプランクトンの培養にも成功した。北海道鹿追町がチョウザメをバイオガス発電を活用して養殖をしている。それから採れるキャビアを新たな特産物として販売している。

青森県では、八戸でカキの養殖の事

業化をめざしている。六ヶ所の泊漁協が25年3月マツカワの養殖試験を始め、龍飛沖でもマツカワガレイを養殖中である。八戸では県内最大規模の閉鎖循環式の陸上養殖施設内の水槽にマツカワの稚魚3千匹を初めて投入した。26年春の初出荷に希望がわく。外ヶ浜町では18年からサーモンの養殖で幼魚を海水での馴致を開始した。深浦港や北金ヶ浜漁港でもサーモンを養殖している。ここでは、ワカメやアカモクを養殖の餌に、サーモンの食べ残しが分解されてできる栄養塩を活用する実証実験をしている。また増養殖のナマコを放流し食べ残しを与えている。青森県では20年資源管理型漁業と、つくり育てる漁業が行われ、海面養殖業の生産量は8万t、内水面漁業養殖業の生産量は5万tである。特にクロマガゴ、スルメイカの資源管理型漁業の推進に取り組み、海に再放流している。23年の青森県漁業養殖業生産統計によれば、数量はサメ150t、ババガレイ4t、

マコガレイ3t、ひらめ20t、にじます167万9671t、あんこう1938t、ほたてがい5630万2596t、あわび1t、たこ34t、なまこ10t、ほや336t、こんぶ200t、わかめ1万1715tであり、頼もしい限りである。

児童の給食に水産物を多くしたい。他県の学校給食でカキが出て、いいなあと思った。

〈参考資料〉十和田湖のトワダ信仰の迷信化、東奥日報、朝日新聞、岩手日報、あおもり県議会、たより、青森県海面漁業に関する結果書、青森県統計年鑑令和7年



旬の北京そして 天津を訪ねて 初海外旅行

伊藤 昭雄

一月に古稀を迎えるのに一度も日本を出たことがない。そこに好機到来。四〇歳の二男が天津で駐在員、家族四人で暮らし来夏帰国予定。孫息子二人は天津日本人学校に通う。その前に夫婦で訪ねようと話が進み、二男一家も快諾、五月三〇日、六月六日に決まった。

一月下旬、一〇年用旅券を五所川原分室窓口で申請、翌月五日に入手した、二人で三万二千円と安くはない。高速バス・航空券の予約、海外旅行保険加

入やグローバルワイファイ申込みは全てネットで行った。航空会社はJAL出資の格安航空「スプリング・ジャパン」にした。

往路まさかの欠航、広島発成田着の搭乗予定機が途中で被雷した。窓越しにそれとみられる機体の右後部と尾部に損傷を確認できた。欠航と決まるや皆搭乗口の係員に詰め寄る。旅行中止が頭を過ったが、動揺している私らを見ていた年配の女性が家内に声をかけてくれた。品のある方で横浜市在住の中国人、羽田発天津行きの深夜便があると。家内が二男に電話をかけると運よく空席があり、即決した。また、家内の隣に座っていた若い中国人女性は中国語でのアナウンスを日本語に訳して伝えてくれ、状況を把握できた。一日(日) 零時五分発の天津航空機は中国機、乗客は約二五〇人とほぼ満席で機内の表示言語は全て中国語。汚れ気味の機体に比し、長身の客室乗務員は女優と見紛うほどであった。家内は隣

の若い中国人女性に教えられ入国カードに記入。三時間半後の現地時間午前二時半に到着し、入国審査のゲートは難なくパスした。私らに救いの手を差し伸べてくれた三人の中国人女性には心から感謝したい。二男とタクシーで市内の天津サマセットへ直行した。タクシー料金は日本よりかなり安いという。

七階へ上がり、三つの寝室を備えたスイートルームに。驚くほど高いのはと不安になったが、そこは二男に甘えよう。ベッドで睡眠後の昼過ぎ、五階に住む二男家族と新幹線で北京へ。横は二席と三席、揺れが極めて少ない。下車後天安門へ。正面に毛沢東の巨大な肖像画。公安・警察の車や職員、数多の監視カメラには、中国が世界一の監視社会であることを実感した。若い皆強面の表情の職員にパスポートの呈示を何度も求められた。治安のよさは間違いない。

天安門を過ぎ、清朝最後の皇帝溥儀

が幼い頃住んでいた紫禁城(故宮博物院)へ。広大な城内を時間が許す限り皆よく歩いた。夕食は、ホテル近くのレストランで名物の北京ダックを食した。中国人の家族連れが多い。アヒル一羽を丸ごと焼いて円卓前でスライス、皮と肉を皿に盛ってくれた。味は今一日から二晩は北京のヒルトンホテル二階に二男一家と泊まった。家内に懐いている下の孫は小三、二晩とも私の部屋に来て仕合せそうに眠っていた。

二日(月)は終日タクシーをチャーター、世界遺産「万里の長城」へ。城壁も観光客も延々と続いている。津軽山地の稜線に築かれているに等しい城壁、圧巻だ。孫二人ともかなりの急斜面もあったがよく歩いた。午後は、精華大、北京大の正門を見学、意外と質素であった。

三日(火)は中国地質博物館へ。地質系では中国最大、七階建てのビルで展示は一階から四階まで。方解石、燐灰石等様々な鉱物を見たが、岩石・鉱

物の簡易識別流れ図は目を引いた。

四日（水）孫たちは登校。二男と三人で天津自然史博物館へ行く。その外観は巨大な貝のよう。日差しは強いが湿度は低い。三階建てでロビーには巨大な恐竜の骨格標本がある。河北産の石炭紀鱗木化石、その鱗は幾何学的模様そのものだ。二男は一角にてパソコンで仕事をする。昼食後は租界時代の洋式建物が立ち並ぶ五大道を歩き、静かな路地にある静園へ。紫禁城を追われた溥儀が満州事变直前まで正室・側室と住んでいた。帰りの地下鉄、老人に席を譲る若い中国人女性に驚く。夕方、校長先生が青森県出身という孫の学校へ。校名表示は一切なかった。

違って緊急脱出の説明があり、備付けのリーフレットは日本語、快適そのものであった。初めに隠岐諸島の島前三島を確認、海岸沿いに飛行し、やがて黒部ダムのアーチや富士山がはつきりと見えた。

中国で感じたのは大雑把なこと、広い新道を走る車の多さ。車は世界中のメーカー、三輪自動車も走っている。軽自動車は見かけず、二輪車に乗る人たちはノーヘルである。飲める水はペットボトル限定。水洗トイレで大方はトイレで拭き取ってボックスへ入れる。買物は、老若男女、皆スマホ決済。文化の違いを肌で感じる旬の旅であった。二〇二五年八月一八日

手古奈と千空

（後編）

建部正昭

私事で恐縮ですが、一言私と俳句の関わりに触れてみます。私が俳句を始めたのは、平成10年、退職を機にNHK弘前文化センターの俳句教室に入会してからです。そこで偶然指導者千空に出会ったのです。以来8年間、千空が病気で教室を去るまでお世話になりました。それ以前の私は、俳句の雰囲気浸っていました。母方の祖父（板垣里庵）は、戦前から病死するまで手古奈の弟子でした。母かほる（里庵の娘）も、父の死後、昭和37年から師

（手古奈）の死去まで「十和田」の同人でした。その間、弘前に私の家を新築してから3回、俳句会の会場になりました。母の弟（板垣尚志）も、戦地から復員後に北海道で就職し、「十和田」終刊まで投句し続けました。

さて、手古奈と千空は俳号を決めるにも個性がうかがわれます。

増田義男は、大正12年10月、誘われて初めての俳句吟行で葛飾の眞間の手児奈神社に詣でました。帰りにそば屋で義男の俳号を仲間で考えることになりました。池内たけしの「初めて俳句を作った所だから手児奈を手古奈にとりあえずしておくよ、そのうちに落ち着くでしょう」との考えに決まりました。

ところが、「十和田」昭和13年1月号に「手古奈改名のこと」を載せ、義人に改名すると宣言しました。そのわけは、女のような名前をやめて男らしい元気のある名前にし、アクティブに俳句を作りたいからでした。昭和14年

5月、師・高浜虚子を大鰐町に迎えた際に改名のことを話題にしました。「手古奈」は15年間使つてなじんでいるし、簡単にひびきも良いとのこと、1年4ヵ月で初めの俳号「手古奈」にもどしています。

一方成田力ちかたは、自分で考えて「力」をもじつて、「ち〱千」「から〱空」で千空としました。その後、リルケの詩集に「千空」を見つけました。「ばらの花」の一節です。「花びらは大空のひかりを透さねばならぬ／千の空からこぼれおちる翳の一滴一滴をしずかに濾過しながら／すると空の火焰のなかに花粉をつけたおしべの束がゆらゆらともえあがるだろう」千空は、わが俳号に詩の願望が宿つたようだと思つたそうです。

2人の足跡を簡単にまとめました。手古奈は俳誌「十和田」で俳句を広めました（62年間で734号）。陸奥新報に「一日一句」を連載（10年9ヵ月で約3700句）句碑34基。「俳句

の小径」に句碑60基。青森県文化賞、東奥賞、勲五等瑞宝章、大鰐町名誉町民。句集に「合歡の花」「手古奈雑記帳」「定本増田手古奈句集」「十和田雑詠鑑賞」「山荷集」「つらつら椿」など。千空は、第一回萬緑賞。句集に「地霊」「人日」（俳人協会賞）「天門」「白光」（蛇笏賞）「忘年」（詩歌文学館賞）「十方吟」昭和63年「萬緑」選者、平成13年「萬緑」代表、平成17年読売俳壇選者。青森県文化賞、東奥賞、勲五等瑞宝章、五所川原市名誉市民。

それぞれを偲ぶ遺産と言える所があります。

手古奈の場合は、昭和51年大鰐温泉の茶臼山公園にできた「俳句の小径」です。大鰐俳句会の門人が中心になって造つた虚子、手古奈、門人達の句碑60基を散策できる径です。毎年5月に大鰐温泉つつじまつりで訪れた人々は、約1万本のつつじに彩られた句碑巡りを楽しめます。同時に増田手古奈記念大鰐温泉俳句大会も行われています。

手古奈が人々に親しまれているのは、彼の人生観によると思われる。

「春風の心を以って心とし」の句がその証です。「壮大な景色、大きな活動を描くにしても、悠揚として迫らない巧みな叙法といってもければ少しも無い。どこことなくゆつたりしていて、大人の風格がある」とは、虚子の手古奈句評です。自然の中に美を求める手古奈の自然との共生は、修験者だった先祖の血を引いているのかも知れません。

千空の場合は、ふかうら文学館です。太宰治が小説「津軽」の取材に深浦を訪れ、宿泊した秋田屋旅館を平成16年に文学館にしたものです。ここには太宰治の間と共に、成田千空の間があります。五所川原の成田書店を再現し、凶書に囲まれて俳句の選をしている千空の姿が思い浮かびます。「独自の鋭敏な感応力を以て、自己の周囲の風物と生活との間に、わが魂に通ふ純潔と壮健との実相——時代の生活の肯定に

値する基盤の相——を感得しては」作

品に結実させたと、草田男は千空を評しています。俳句のために魂を燃やし尽くした一生でした。妻市子に口述筆記させた最後の句は鮮烈です。

「寒夕焼カキユキヤケに焼ホトき亡ホトぼさん癌ガンの身は」千空は、新田開発のために時には自然と闘わなければならなかった農民の血を引いているように思われます。

岩木山をはさみ北の千空と南の手古奈は、津軽魂を貫いた俳壇の重鎮と言えます。



父は何を考えていたのか

石岡英夫

私の父は寡黙と言えるほど他人と話すことを好まない。しかし話しかけられるとそれには軽く応じる。頭は丸刈りで衣服にも全く無頓着で、子供の私には他の大人とは全く違う変な父であった。

父は親からりんご園と田んぼを受け継ぎ一生それに従事してきた。私は幼い頃は両親の働くりんご園の中を走り回っていた。小学校5、6年生になると作業を抜ける父が母にあれこれ苦情を言われるのが分かってきた。父には

余り働く意欲が見えず無心に働く母がかわいそうに思えた。しかし母をいじめて泣かず祖父は嫌いだつたが父を嫌になることは一度もなかった。

父は尋常高等小学校を終えただけだが種々の本を渉猟していた。朝起きると決まつて新聞を読んでいる。仕事に出かけるのが遅くて母が畑から迎えに来る時がけっこうあつた。また夜遅く迄本のページを捲つて騒々しく、母はよく寝不足を訴えていた。知識が豊富なうえに文書にも長けて村人に尊敬されているのが私の誇りであつた。私には新聞紙を利用し書道を指導してくれたり、水彩画を描いてみせたりする。本当に静かな父で私が何をしても忠告したり叱責することはなく常に見てくれるだけだつた。

彼は口は重いけれども耳は周囲の会話を敏感に捉えていた。私が座机は腰が痛いとぶつぶつ言っていると大きな座卓に脚を付け、りんご箱を半分に切つて椅子を造り立派な洋机を用意し

てくれた。また練炭だけの暖房では寒いと眩くと早々に電気炬燵を買つてくれた。さらに高校3年の時クラスで梵珠山へ登山をすることになった。私がリーダーであることを慮つてか予め自分でルートを歩いて時間を計り地図まで描いてくれた。お金がないので父なりに工夫して精一杯私の便宜を図つてくれた。感謝しかない。

彼は戦争の体験者なので戦友会に時々参加していた。後年になるとひたすら戦友の分厚い名簿を紐解いていた。私には自分が中国に渡つたことや三沢市で終戦を迎えたことしか話してくれなかつた。あの戦争をどのように評価していたのかは知る由もなかつた。ただ心臓を悪くして事務職に回されたことをボツリと述べたことがあつた。父が無口なのはひよつとすると戦争と関係があるのかもしれない。

りんご栽培は好景気に沸いたときもあつたが年々借金が嵩んでいた。特に台風に襲われた年は惨めであつた。両

親の悲痛な表情を見るうちに私のりんご農家への憧れが失せていた。中学生になると貧しいことを恥じるようになる。自分の不遇を親の所為にすることもあつた。中学校の友人から又聞きした話だが、私の当時の担任が「あの子は少し変わつていた。父とそっくり。」と言つていたそうである。貧困は人を卑屈にさせるが社会へ眼を開かせてくれる。私が成長するにつれ世の中の不条理が見えてき、広島市の原爆資料館を訪ねて生きる意味を理解した。偏見や差別を横行させてはいけないし権力に諂うことにはない。社会的に弱い立場の人たちや貧しい人たちを援助するのが私たち国民の責務であらう。父はりんご栽培をしながら一生貧しい生活を強いられてきたがどのような思いであつたのであろうか。彼の不平を聞いたことがないので見当がつかない。

父は後年介護施設で世話を受け新聞を読みながら100歳でこの世を去つた。私はある日誰も住んでいない郷里

の崩れかけた家を訪ねた。驚いたことに居間の壁に種田山頭火の俳句が数首書かれていた。父と山頭火の關係がどうしても繋がらないが実はそれが父の生き様であったのかもしれない。そのような彼を理解する人は誰もいないことに頷ける。本当に捉えどころのない父であった。

彼はまた感情を顔に出すこともなかった。涙することもなく、声を出して笑ったりすることもない。いや一度新聞紙上の『段違い』というタイトル漫画で二人の棋士が段違いの碁盤に对座している絵を見てフツと笑った。私や妹達の就職が決まっても結婚しても喜びの声を発することはなかった。しかし私たち兄妹はいつの間にか彼が何も言わなくても愛情を持って存分に対処してくれたことが分かるようになった。

私が大学生の時、下宿代が6千円であった。ある日汚れた千円札5枚と5百円札2枚が書留で届いた。ありがた

かった。彼等の生活の苦しさが分かった。申し訳ないと思った。父は子供の要望には一切文句を言わなかったがお金を工面するため人知れず東奔西走したであろう。自分は何も欲することなく、儘に日常を過ごし静かに此岸を去り、私達に人の生き方を教えてくれた。農作業から開放された今は泉下で母に小言を言われながら山頭火の俳句に耽っているかもしれない。

父よ、初めて苦情を一つ言います。負債は泣きたくなるほどありました。それでも私たち兄妹は感謝しています。——「ありがとう！」



選択しないという 選択

山本隆悦

昨秋から親族や親しい知人の見送りが続き、改めて我が身に置き換えてみる。「何のために生まれ、何のために生きるのか」などと自問する気はないが、残された日々を納得して過ごしたい。

煙草と酒が大好きだった三つ上の兄は、肺の異変を指摘されながらも嗜好を変えようとせず、肝臓への転移後も病院へ収容されるまで酒を止めず、「悔いのない人生であった」と妻に伝えて、平均寿命より10年以上も早く旅立った。

四つ上の敬愛する方は数日後に続く宴席を心待ちに受診を控え、家族に促されて病院を訪れた時には「肺が曇っている。来るのが遅い。これまでの喫煙歴から回復が危うい」と言われ、入院はしたものの、20日後には黄泉に召されてしまった。彼は生前から「俺はいつ逝つてもいい」とはおっしゃってはいいたが、急変の想定はしていなかったと思う。

心臓に持病を持つ私は、医師4人から「酒は止めた方がいい。立场上、そうとしか言えない」と言われ、医師3人からは「過度は禁忌」・「三日に一度」「飲み過ぎないよう」と注意を受けている。同病同嗜好者各位からは、「飲酒の件を尋ねるのが余計、我が道を行け」と助言されている。止めようとは思わないが、兄のように潔く貫く覚悟もない。家族の反応、「困つたものだ」を受け入れるしかない。

病理については、遺伝、生活習慣、ストレスなど、医学的な説明は可能で

あろうが、そればかりではないと感じている。著名な女流作家が90歳を超えてから「いい人から順に逝く」と自虐的に言っていた。知人友人の逝去を思い起こすとかんがりの説得力を感じる。長生きしている人が悪い人ばかりとは思わないが、年齢相応より早く亡くなつていく人にもいい人が多いように思う。

善人・悪人の区別も定かではないが、少なくとも世のため人のために日々の時間を費やし、心を傾けている人は善人であろう。不適切な言動の多い人悪人と呼ぶなら、自分はその部類に入り、きつと長生きするであろうなどと勝手に判断している。医学的な根拠などなく、全くの個人的感覚だが、長寿・短命の一つの要素だと思つていい人そのまま早めに死んでいくのか、悪人として長生きするのか。太く短く生きるのか、細く長く生きるのか。お前はと言うと言われても解答は出ない。選ばないという選択もあるのだと

開き直っている。

生死に關することはかりではなく、選べない選択肢は溢れている。宗教と思想の自由は認められているが、他人を傷つけても殺害しても認められる教えもあり自らを犠牲にして敵とみなす人々を殺戮して英雄となる教えもある。人々の安寧を願う多くの教祖が存在する筈なのに、国内外のあちこちで人々の命や生活を脅かす現実がある。

「意見があるなら言え」・「思いがあるなら行動しろ」という声もある。どの分野でも先達たちの言葉は重い。「今日できることは今日やれ」・「明日できることは明日に回せ」・「人には親切に」・「自分が大事」・「清濁併せ吞む」・「水清ければ魚住まず」・「先んずれば人を制する」・「急いては事を仕損じる」

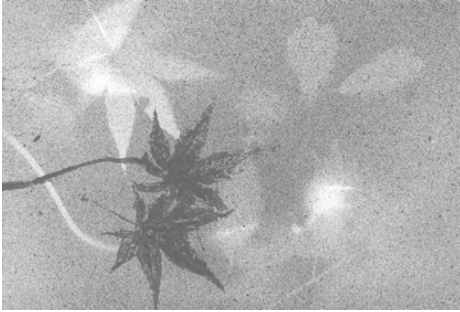
明日がどうなっているかわからない我が身と世の中と思えば、今日を確かに生きることだけが真実などと分かつたようなことを吐く自分がある。「そ

れでいいのか」と問う自分もいる。人生を達観したり自棄的になっているわけではないが、確実に余命の時間が減少している者であるにもかかわらず、目の前の選択肢への反応は節操がない。

無神論者に近い無宗教者と自負しているながら、縁があり檀家寺の法会等の手伝いをしている。信仰とつながる功德も罰も関わった覚えはなく、「困った時の云々」もいつも否定してきた。それなのに、本堂の掃除や輪袈裟を掛けて法会への参加を数年続けている。ふと「これでいいのか」と思ったりする。かと言って、今更神仏を頼みにしても「信者」の風上にも置かれないだろう。

医学にも宗教にも政治にも懐疑的な自分は、今後どうなっていくのである。予想できることは、影響されやすく冷めやすく流されやすい性質なので、この先もころころと変わるだろうということである。定まった論に束縛されず、自由に柔軟にいい加減に、気楽に

世の中の動きと合わせていくであろう。そして、行き詰まったら、「まあいいか」で本質を避けて通るに違いない。



光厳院御集全釈

渡辺 幸子

ともし火に我もむかはず

燈ともしびもわれにむかはずおのがまにまに

光厳院こうげんいん

乱世に翻弄されながらも誠実に生きた帝王の歌を、人間の「心」そのものを詠んだ歌としてこれ以上のものを私は知らない。

この歌は、二〇〇一年（平成十三年）二月九日付読売新聞記事「読売文学賞の人」冒頭で紹介されていたものだった。

『光厳院御集全釈』で研究・翻訳賞を受賞した、国文学者であり宮中勤めの経験もある岩佐美代子氏（74）は記者との対談の中で次のように語った。

この「ともし火」の歌の世界に一瞬のうちに引き込まれた、あの日あの時の感動を今でも覚えている。

その歌が院によってどのようにして生み出されたのか是非知りたかった。だが当時は時間的にも気持的にも余裕がなく、ゆっくり味わって読める時までと大切にしまっておいた記事だった。

光厳院は北朝第一代の天皇であり『風雅集』を親撰した京極派の代表的歌人でもあります。

どうしてこういう新しい感じのする歌ができたのか、不思議でならなかったんです。

念願の本『光厳院御集全釈・私家全釈叢書27』（岩佐美代子著）を手にしたのは、あれから二十年以上もたっていた。ともし火の歌は「燈」の六連作だった。

さ夜ふくる窓の燈つくづくくと
かげもしづけし我もしづけし

〈通釈〉

夜が次第に更けて来る、窓辺の燈よ。つくづく眺める、その光も静かである。じつと見つめている、私も静かである。

〈補説〉

本連作はその哲学的な深さにおいて、最もすぐれたものである。その序章としてあくまでも静閑な燈と作者との対座を提示する。「かげもしづけし我もしづけし」の繰返しが、連作結びの一四六番歌「ともし火に我もむかはず燈もわれにむかはず」の繰返しと呼応して、緊密な構成を作りあげている。

心とてよもにうつるよ何ぞこれ
たゞ此のむかふともし火のかげ

〈通釈〉

「心」といつても、際限なくあれこれと移り変わるものよ。一体これは何なのだろう。心に映っているものはただ、このように向かいあっている、燈火の光だけではないか。

〈補説〉

「心」とは何物か、というのは京極派よろらんき揺籃期以来の重要命題であった。その初心を五十年後にもなお保つて、作

者は一人燈に向い、その静けき光と対比して揺れ動く想念をあやしむ。

むかひなす心に物やあはれなる
あはれにもあらし燈のかげ

〈通釈〉

相對して思う、その心の働きによつてしみじみとした物の哀れの感情が生まれるのであろうか。物としては哀れでもあるまいものを、燈の光よ。

〈補説〉

自分が燈火か燈火が自分か——。自他が一如となつた冥想の一時からふと醒めて、改めて他者としての燈火の光を見る感懐は、次の詠に続く。

ふくる夜の燈のかげをおのづから
物のあはれにむかひなしぬる

〈通釈〉

更けて行く夜の燈火の光を、なぜということもなくひとりでに物あわれであるかのように、これと相對する心の働きゆえに思いなしたことよ。

〈補説〉

今一度、その自他一如の至境しきようを反芻はんすうし、そのような得難い心境に一時なりとも到達し得た自己を肯定し、満足し

ている。

145
過ぎにし世いまゆくさきと思ひ
うつる心よいづらともし火の本

〔通釈〕

過ぎ去つた世、現在、そして将来と、思いが移り行く、その心よ、一体どこにあるのか。ただこの一つの燈火のもとにあるのではないか。

〔補訳〕

その心を催す原因となる「ともし火」の不可解な力に感嘆する。「心よいづら」は本詠独自、「ともし火のもと」もほとんど京極派独自の句である。

146

ともし火に我もむかはず

燈もわれにむかはずおのがまにまに

〔通釈〕

燈火に、私も意識して対座していない。燈火もまた、私を意識して向いあっているわけではない。ただ自分自身のあり方として、それぞれに存在しているだけだ。

〔補説〕

以上、「ともしび」の連作六首は、前半三首と後半三首が二枚屏風のように相對している。「燈火」と「我」、「心」と「影」。それ以外、何等の景物も用いず孤燈の

もとに、ひとり深沈と思いに沈む自己——ただ一箇の、裸の人間であるところの、位を失つた帝王——その心の軌跡を、低声に、理性的にたどる。「かげもしづけし我もしづけし」に呼応する。「ともし火に我もむかはず燈もわれにむかはず。」見事な構成であり、作者の肉声をさながら聞く思いがある。

長らく懂れてきた光嚴院の「ともし火」の歌を岩佐氏の解釈により心おきなく味わうことができた。波乱うずまく時の皇室の長（治天）として、また京極派和歌の重鎮としてその責に誠実にむき合おうとした院、「燈」の連作は院ならではのその研ぎ澄まされた心中から生まれるべくして生まれた歌だったととらえた。

更にこの「御集」を読んで新しい気づきがあった。それは「冬詠」の歌の多いことだった。一六五首中四九首、三〇％近くを冬部が占めていることについて岩佐氏は言う。

伝統的詠歌の枠を事もなげに踏み越えた自在な冬詠を選入している所には、本集成立当時の作者の心が、徹しい気象の中にも「雪」への期待のほほみを持つ「冬」の季節に、春夏秋冬にもまさる親しみを覚えていたであろう事を推測させる。

とりわけ私が感動した院の冬詠歌は次の二首だった。

84

軒の松にかよふ嵐の音だにも
たえていくかの雪のふるさと

〈渡辺返歌〉

せめてもの慰めだった

松に吹く風の音

それすらもとだえた

雪にとざされた庵に住む人よ

深夜無心の燈に対する魂に

目覚めたあなたは

すでに気づいている

淋しさを遥かに通り越して

冬の自然と

そこにそうして

共にいる無限の喜びを

88

起きいでぬねやながらきく犬のこゑの
ゆきにおぼゆる雪のあさあけ

〈岩佐氏補説〉

一読、微笑を誘われる。何とも楽しい歌であろうか。よ

き天皇たるべく厳正な教育を受けて育ち、踐祚せんその後苛烈な運命うんめいに弄もよほばれ、最後には山寺の一老僧として終ったこの作者にこの詠がある事に、私はひそかな喜びと安堵を覚える。暖かい寢床から起きたくない冬の朝、時代と身分とを問わず、誰もが体験する生活のこまを、かくも的確に、しかも動物への愛情をこめて表現しえた歌——しかも帝王の——を私は知らない。

最後に院の人生を略年譜によりしのび感謝と畏敬の念を捧げたい。

・ 一三三三 後伏見天皇第一皇子として出生

・ 三一 後醍醐天皇失脚を受けて北朝初代天皇として皇位を継ぐ (十九才)

・ 三三 鎌倉幕府滅亡により復権した後醍醐天皇が自身の廃位と光厳天皇の即位を否定したため光厳廃位 (二十一才)

・ 但し実際には弟の光明天皇が北朝最初の天皇であり、次の崇光天皇(光厳の皇子)を合わせた二代十五年間光厳上皇は治天(皇室の長)の座にあつて院政を行う

五二 光厳出家 (四十才)

六四 京都常照皇寺にて崩御 (五十二才)

日露戦争後の二人の文豪

佐々木 唯雄

日露戦争終結の翌年、一九〇六年（明治39）一月に森鷗外は出征先の満洲から帰還する。同年、夏目漱石は東京帝大と第一高校で英語英文学を講じながら『吾輩は猫である』全三巻を刊行し、『坊っちゃん』『草枕』などの小説を発表する。

その翌年（明治40）四月、四十歳の夏目漱石は教職を辞して『東京朝日新聞』の小説記者となり、六月から『虞美人草』を連載する。同年十一月、四十五歳の森鷗外は陸軍軍医総監に昇進し、同時に陸軍省医務局長に就任する。奇しくも明治40年は二人にとって転機の年となったわけだが、それから九年ほど後に、森鷗外より五歳年下の夏目漱石が先に他界するとは、お互いに知る由もなかった。その間、森鷗外は駒込千駄木町に居住し、夏目漱石は早稲田南町に居住したが、親しく交流することもなく、それぞれの立場で文学活動を行う。

（一）自然主義への対応

日清戦争従軍と小倉勤務、そして日露戦争従軍の期間（一八九四〜一九〇六）は小説執筆から遠ざかっていた森鷗外であるが、一九〇九年（明治42）に文芸誌「スバル」創刊に参

画するや『半日』『魔睡』『モタ・セクスアリス』などの小説を矢継ぎ早に発表する。

『半日』は、姑と反りの合わない妻への対応に苦慮する大文学教授の話で、『魔睡』は、妻が知人の医者に催眠術を掛けられたのではないかとの猜疑に駆られる法学者の話である。

『舞姫』など初期作品と異なり、口語体で書かれていること、また家庭の内情や夫婦関係を暴露するような自然主義的作風であることが文学関係者を驚かせた。森鷗外は早くからエミール・ゾラの『実験小説論』に批判的で、「予が立場」（明治42）などの随筆や評論で、「懐疑と虚無の姿勢だけで、建設的な主張がない」と自然派の作家たちを酷評してきたからである。しかし『半日』に先立って同年五月に別の雑誌に寄稿した『追儺』という小品で、「小説といふものは何をどんな風に書いても好いものだ」と述べているように、この頃すでに鷗外は口語体の文体への転換を図り、自然主義を含めた幅広い小説観を獲得していたのであろう。ただ「自然派にあらずんば小説家にあらず」という、文壇の排他的風潮への反

発は根強く残ったようだ。

このような小説観は夏目漱石にも共通していて、「創作家の態度」（明治41）などの評論で、「西洋文学の主流が自然主義リアリズムだからといって、それだけを文学と見做すのは誤りである。一人の作家が時には浪漫主義的であつたり、時には自然主義的であつたりするのが普通である」と述べている。

『エタ・セクスアリス』（ラテン語で性欲的生活）は、金井湛しづかという哲学者の性欲にまつわる体験を自叙伝風にまとめた小説である。冒頭で金井は、このような体験録を書くにいたった理由を述べている。それによると、自然派の小説家何につけても性欲をもとに行動する人物を描き、それをもつて批評家が人生を写し得たと評価するのを、日頃から不審に思っていた。金井には、性欲がそれほどまでに人生を左右するものとは思えなかつたのだ。ところが、西洋から取り寄せた哲学書や教育関係の文献を読んでいると、このところ性欲が大いに注目されていることが分かった。そこで金井は、性欲が人の生涯にどんな順序で発現し、人の生涯にどれだけ関係しているかを知る手掛かりとして、まずは自分の性欲の履歴を書いてみることにしたというのだ。つまり、金井湛という作中人物の性欲の履歴であつて、自然派の小説家のように筆者の実体験を書いているわけではないことを断っているのである。

ところが『エタ・セクスアリス』を掲載した「スバル」第七号は七月末に発禁処分を受け、森鷗外自身も陸軍省から戒かへ筋を受ける。私たちから見れば発禁に処するほどの内容ではないのだが、陸軍省医務局長の任にある者の文として適当でないとの判断が、どこからか下されたのであろう。陸軍省の戒かへ筋には、新聞等に署名入りの文を掲載しないようにとの注文も含まれていたようだが、官憲による芸術活動への介入に批判的だつた鷗外は、その後も雑誌や新聞への寄稿を続け、一九一〇年（明治43）には『杯』、『木精』、『フラスチエス』、『青年』、『普請中』、『沈黙の塔』、『食堂』などの問題作を次々に発表する。

（二）大逆事件への対応

『杯』（中央公論）に発表、『木精』（東京朝日新聞）に別署名で発表）の二篇は、いずれも寓話的な小品で多様な解釈が可能だが、戒筋を受けた当時の鷗外が置かれていた孤高の精神状況を窺わせる。『フラスチエス』は、判事、記者、文士が発禁問題について議論する短篇で、文芸に無理解な官吏かんが検閲を行うことの不合理的に抗議する内容となっている。

『沈黙の塔』は、思想表現の自由を侵害する因襲への反発をアレゴリカルに表現した短篇で、寓話の様式でカモフラージュしているが、文芸思潮である自然主義と社会思想である無政府主義とを混同し、あらゆる翻訳書を秩序と風俗を紊ぶらん乱する「危険な書物」と見做す風潮に抗議する内容となっている。

る。

『食堂』は、役所の食堂でテーブルを囲む三人の男が「大逆事件」らしき出来事について語り合う短篇で、木村という博学な男が西洋における虚無主義や無政府主義の変遷について解説する内容となっている。だが、森鷗外がクロボトキンの思想に共鳴し、木村の口を借りて無政府主義を唱導しているわけではない。あくまでも啓蒙的な姿勢で西洋の文芸思潮や社会思想を解説し、控えめながら言論統制を批判する内容となっている。

『沈黙の塔』の末部の次の一節が、鷗外の本旨であろう。

《芸術も学問も、パアシイ族の因襲の目からは、危険に見えるはずである。なぜというに、どこの国、いつの世でも、新しい道を歩いて行く人の背後には、必ず反動者の群がいて隙を窺っている。そしてある機会に起つて迫害を加える。たゞ口実だけが国により時代によつて変わる。》

パアシイ族とは、「危険な書物」を読む者を捕えて処刑し、その遺体を沈黙の塔で鳥葬ちようさうに帰すという、奇妙な風習を持つ架空の民族であることが冒頭に書かれている。「危険な書物」は自然主義の小説から社会主義や無政府主義の思想書へと広がり、近頃では脚本、叙情詩、学術論文にまで及んでいると述べ、《パアシイ族の目で見られると、今日の世界中の文芸は、一つとして危険でないものはない。(中略) 芸術の認める価値は、因襲を破る処にある。因襲の目で芸術を見れば、あら

ゆる芸術が危険に見える》と毅然と語る。

この「危険な書物」という語句は、一九一〇年(明治43)九月に「東京朝日新聞」に連載された「危険なる洋書」という特集記事に呼応したものである。その連載では、モーパッサン、イブセン、フローベール、ニーチェ、クロボトキンなどの小説や思想書が軒並み「危険なる洋書」として取り上げられ、紹介者の一人として森鷗外が名指して批判されていた。のちに大逆事件と呼ばれることになる大量検挙に関連する記事だが、夏目漱石が主幹を務めていた「朝日文芸欄」に掲載されたものではない。この時期、夏目漱石は六月に『門』の連載を終えてから内幸町の長与胃腸病院に入院し、退院後の八月に修善寺温泉で大吐血して危篤状態に陥り、引き続き同地で療養を強いられていたのである。

国家中枢の職にあつた森鷗外であるが、それにも増して医学者にして文学者であるとの矜持きんぢがあり、国民の啓蒙を第一の責務と考えていたのである。「学問の自由研究と芸術の自由発展とを妨げる国は栄える筈がない」(「文芸の主義」)との信念が、このような、ある意味で「危険な小説」を書かせたのである。『沈黙の塔』と『食堂』は、この年に鷗外自身がかかわつて創刊した「三田文学」の11月号と12月号にそれぞれ発表されたものだが、『エタ・セクスアリス』より危険な内容であるはずの、これらの小説がなぜ官憲の目を免れたのか謎である。西欧思想について詳述する鷗外の、あまり

の博識に官憲は幻惑されたのかも知れない。「フラスチエス」と『沈黙の塔』は『鶏』『金毘羅』などの短篇とともに『烟塵』という作品集に収録され、翌年（明治44）二月に刊行される。

大逆事件の発端となった長野県明科（現安曇野市）での爆裂弾実験が発覚し、宮下太吉ら四人が天皇暗殺計画の容疑で逮捕されたのは一九一〇年（明治43）五月下旬で、幸徳秋水と菅野須賀子が逮捕されたのは六月一日である。その後、広範な地域で摘発検査が行われ、十一月に二十六人を対象に予審公判が始まる。十二月十日から大審院公判が非公開で行われ、わずか十九日間十六回の審理で十二月二十九日に結審。検察は二十六人全員に刑法七十三条の適用による死刑を求め、翌年（明治44）一月十八日、二十四人に死刑（そのうち十二人は翌日、特赦により無期に減刑）、二人に有期刑が言い渡され、それから一週間もない一月二十四日に幸徳秋水、宮下太吉ら十一人、二十五日に菅野須賀子の絞首刑が執行された。大逆罪に上告審はなく、原則として死刑が無罪のいずれかだった。

この裁判の弁護人の一人である平出修は文芸誌『明星』同人の青年歌人だったが、『明星』終刊後は、石川啄木らとともに『スバル』創刊に参加して森鷗外の知己を得、公判に備えて鷗外から西欧思想について講釈を受けたことが知られている。鷗外はまた元老山県有朋とも親交があり、山県の求め

に応じて西欧思想について講釈したことがあるとのこと。つまり鷗外は、これほどの大事件になるとは想定していなかったであろうが、事件の告発を行った政府側の重鎮と、一人の弁護人の双方とかかわりがあったのである。前掲の『食堂』に、一人の男が「あんな連中（注・爆裂弾実験の容疑者）がこれから殖えるだろうか」と問うと、木村が「お国柄だから、当局が巧みに舵を取って行けば、殖えずに済むだろう」と答える場面がある。大逆事件は、まさしく木村が言うように、当局が巧みに舵を取った事件だったのである。

一方、夏目漱石は一九〇九年（明治42）六月から十月まで連載した『それから』で、幸徳秋水について触れている。第十三章に、長井代助の友人である平岡が「幸徳秋水という社会主義者を政府がひどく恐れており、巡查が四六時中、秋水を見張っている」と述べ、その状況を面白おかしく語る場面がある。だが平岡の妻三千代に心を領されていた代助は平岡の話にそれ以上の興味を示さず、平岡と三千代との暮らし向きへと話題を転じる。

明治の新聞記事を抜粋した『明治日本発掘』（河出書房新社）を参照すると、明治42年六月七日付け「東京朝日新聞」に、杉村楚人冠という記者が監視下の幸徳宅を訪問して書いた「幸徳秋水を襲ふ」という記事が掲載されており、平岡の語っている内容はその記事とほぼ一致している。『それから』連載の時点では、大逆事件関連の出来事はまだ何も発覚して

いなかっただので、漱石はこの新聞記事に依拠し、軽い気持ちで挿入したのであろう。ただ幸徳秋水が「平民新聞」紙上で対露戦争批判や増税反対の論陣を張り、政府から度重なる弾圧を受けていることはよく知られていたもので、言論統制に批判的だった漱石は義憤に駆られて挿入したのかも知れない。

それでは、一九一〇年（明治43）三月一日から連載した『門』あるいはそれ以降の作品で、漱石は大逆事件について触れているだろうか。答えは否である。『門』は、友人の妻を奪って不義の結婚をした宗助と、その妻御米との日常を淡々と描いた小説だが、背景時間は一九〇九年（明治42）十月に始まり、翌年（明治43）の春先で終わる。漱石の胃病が悪化して六月二日に連載を終了するので、幸徳秋水が逮捕された六月一日には脱稿していたはずである。その後は、前述したように八月に修善寺で危篤状態に陥るが、一命を取りとめて十月に長与胃腸病院に転院し、一九一一年（明治44）二月末に退院する。この間の状況については「思い出すことなど」に詳述されているが、大逆事件については一言も触れていない。

「逆徒24人に死刑判決」という見出しの躍る記事は、一九一一年（明治44）一月十九日に全国紙で報じられたので漱石も病床で読んだはずだが、死の淵から生還したばかりの病人にとっては、あまりに酷な問題だったのであろう。が、これ以降、事件については、漱石のみならず、国民の誰もが口を

噤んだのである。新聞は検察の発表に基づいて「逆徒」個々の罪状や処刑の成り行きを詳報し、世間には事件について口外することを禁忌とする風潮が生まれた。昭和になつて戦後（一九四七年）の刑法改正で大逆罪は廃止されたが、事件から百年以上も経過した今日でもなお、禁忌的風潮は社会の底を流れているように感じることがある。明治は決して遠くはない。

（二）『青年』と『三四郎』

『青年』は、一九一〇年（明治43）三月から翌年の八月にかけて「スバル」に連載された長篇小説である。『中々・セクスアリス』に、《そのうち夏目金之助君が小説を書き出した。金井君は非情な興味を以つて読んだ。そして技癢を感じた》という一節がある。「技癢を感じる」とは「腕がムズムズする」という意味である。明治42年以降における森鷗外の旺盛な創作活動は、漱石作品の刺激によるところが大きかったのであろう。

とりわけ『青年』は『三四郎』（明治41年）に触発されたことが歴然とした作品である。両作品ともに地方から上京した青年を主人公に据え、ビルドゥングスロマン（成長小説）の様式をとっている点で共通しているが、『青年』の小泉純一と『三四郎』の小川三四郎とでは「人と為り」がまるで異なる。三四郎はうぶで何事にも受動的だが、純一は行動的で大人びている。利発で都会生活に臆することのない純一の青

年像は、凡庸で鈍感な三四郎の青年像へのアンチテーゼとして鷗外が造型したものであろう。しかし大都會を自在に歩き回り、大村莊之助という医学生と西洋哲学や文学について対話し、大石路花という作家宅を訪れて文学談議をし、瀬戸という画学生と平田拊石（夏目漱石がモデルらしい）の講演を聴きに出かけ、坂井れい子という年上の未亡人と肉体関係まで持つ作家志望の純一は、青年というよりもむしろ四十八歳の森鷗外に似て見える。

このような主人公の「人と為り」の違いは、『三四郎』という作品に対する森鷗外の批判点、つまり『三四郎』に対して物足らなさを覚えた点を明示してもいる。それは一言でいえば、『三四郎』が性欲の問題を欠落させていることである。つまり、青年の性の煩悶を扱っていないことへの不満である。『エタ・セクスアリス』の金井湛は、二十歳で吉原を初体験し、「恋愛の成就是あんな事に到達するに過ぎないのか。馬鹿々々しい」と豪語するが、『青年』の小泉純一は坂井未亡人宅を訪れて「知る人になった」直後、夫人への「恋愛感情のない肉欲」に煩悶する。やがて大村莊之助との対話で、ワインゲルという厭世哲学者の「恋愛の対象というものは、凡て男子の構成した幻影だ」という説を知り、恋愛への憧れは減退する。その数日後、純一は夢遊病者のように坂井夫人宅を訪れ、再び関係を持つにいたる。だが無我夢中だった前回と違い、坂井夫人の能面のような顔に「凱歌を奏するよう

な」笑みを読み取り、純一は大いなる恥辱に見舞われるのである。

その渦中で大村との談話で純一は、男子が貞操を守ることは「利己的であるか、利他的であるか」という哲学的問いを発し、大村の「動機によつては利己的で、また利他的にもなり、両方である場合もある」という答えに納得する。性欲の抑制と発露を利己的なものと見做していた純一は、生理的な観点からは利他的な側面があることを大村の説明から知る。この利己と利他的の問題を発展させて、純一は大村に「新人」という言葉の意味を問う。新人（新しい人）とは、先日の講演で平田拊石が、イブセンの戯曲『ブランド』に描かれている人物像を称した言葉で、その意味を純一は捉えあぐねていた。大村は「積極的新人」という考え方を提起し、個人の道徳を利他的に公共のために発露する「利他的個人主義」が新人の生き方だと答える。このように性欲の煩悶を道徳問題に発展させ、新しい時代の個人の生き方を模索することが『青年』の一つの主題だったのであろう。

一方、『三四郎』はビルドゥングスロマンの様式をとつているとはいえず、三四郎という青年の精神形成よりも、里見美禰子の女性像を三四郎の視点で描くことに重点を置いた小説である。美禰子という女性像を際立たせるために、三四郎はことさらに凡庸で、受動的な青年である必要があつたのだ。三四郎が純一のように行動的で、美禰子と肉体関係を持つほど

発展的な青年であれば、『三四郎』は別種の小説になったであろう。

美禰子の女性像は、次のような広田先生の言葉に要約される。

「昔の青年は他人本位で利他的だった。それは別の意味でいえば偽善家だったということ。その偽善が張り通せないものだから、西欧から自己本位の思想を輸入し、今度は我意識を発展させ過ぎて露悪家ばかりになった。」

広田先生は、このような文明比評をもとに美禰子を「無意識の偽善者」と呼び、その人間性について次のように語る。

「この頃、利他本位の内容を利己本位で充たすという難しいことをする者がいる。偽善を行うに露悪をもってする者だ。他人の感触を害するために、わざわざ偽善をやる人間だ。」

この論を私なりに解釈して言い換えると、次のようになる。「明治以前の青年は利他的だった。つまり、自分よりも他人（家族、縁者、友人、主君など）の利益を優先して生きてきた。だがそれは、自己の利益を優先しないのだから一種の偽善ということになる。近頃は西洋から個人主義が入ってきて、自我を主張することが当たり前になった。その結果、利他と見せかけて自己を主張し、それによって利己心を満足させる露悪家が増えた。」

広田先生の言う「無意識の偽善者」とは、無意識のうちに偽善的行為（利他と見せかける行為）を行い、それによって

利己心を満足させるタイプの人間ということになる。広田先生は里見美禰子を、そのような女性と見ているのである。つまり、美禰子の三四郎に対する「思わせぶりな」言動は、美禰子が無意識裡に行っている偽善的行為ということになる。そのような明治以前には存在しなかった新しい女性像を造型することが、『三四郎』における漱石の一つの試みだったのである。

美禰子のモデルは、明治41年三月に、漱石の門弟の一人である森田草平と心中未遂事件を起こした平塚明子（のちの平塚らいてう）であることは、よく知られている。漱石は、森田が語った平塚明子の言動から「無意識の偽善」という概念をくみとり、それを明治以前の社会に存在しなかった女性像として作品に定着させようとしたのである。しかし、よく考えてみれば、「無意識の偽善者」とは女性に限ったものではない。『三四郎』の次の作品である『それから』以降の作品の男性主人公たちはみな、種々に変形した「無意識の偽善者」であると言える。

森鷗外の『青年』は、このような広田先生の間観を下敷きにして、大逆事件の渦中に書かれたものであることを忘れてはならない。

マキヤベリ 『君主論』

②

浅利 正人

マキヤベリは、1469年にイタリアのフィレンツェに生まれ、1527年に58歳で死んだ。だから、成人したのは15世紀後半で、活躍したのは15世紀後半から16世紀前半になると思う。つまり、今年の2025年からみれば、今から約500年前の人である。

マキヤベリは、一般的な辞典では、「フィレンツェの政治思想家。フィレンツェ共和国書記官として軍事・外交に携わる。1512年メディチ家が共和制を倒すと職を追われ、隠棲の後メディチ家に登用されたが、1527年の同家追放で失意のうちに死んだ。『君主論』『ローマ史論』などで、政治と歴史を宗教・道徳の価値観から離して論じ、近代政治学・歴史学の祖とされる。彼の思想の背景には、イタリアの統一と外国勢力の排除への実践的関心があった」（『角川世界史辞典』）と書かれている。

ここでは、マキヤベリが近代政治学・歴史学の祖とされるのは、政治と歴史を宗教・道徳の価値観から離して論じているからだと言われているが、『倫理用語集』（山川出版社）によ

れば、それは、「政治を宗教や道徳から切り離し、現実に立脚して考察した政治論」であり、より具体的には、「政治は道徳や宗教とは無関係に、利己的な欲求をもつ人間相互のあいだに人為的な秩序をつくる営みである」と考えるということである。

代々木ゼミナール蔭山克英『人物で読み解く政治・経済』（Gakken）によれば、それは、「君主は、常に国と国民を守ることを第一義に考えないといけない。そのためなら、宗教的な正しさや道徳的な美しさなどをかなぐり捨て、人を欺く計略ですら、用いなければならない」ものであり、蔭山は、「このマキヤベリという人物、王たる者の政治から宗教と道徳を削ぎ落とし、「リアル」だけを突き詰めた人物なのだ」と評している。

『君主論』とは、西洋政治思想史が専攻の鹿子生浩輝（かこ ひろき）によれば、次のような本だと言っている。

「マキアヴェッリは、前政権との結びつきが強かったため、自らの職を失った。しかし彼は、『君主論』を執筆し、メディ

チ家に有益な統治術を提供することで同家から何らかの政治職を獲得しようとした。

マキアヴェッリは、『君主論』で君主一般を論じているわけではない。彼はまず、血統に基づいて君主の地位を受け継いだ「世襲君主」と対比させる形で、「新君主」という特殊な類型の君主へと議論の対象を絞り込んでいる。新君主とは、外国を征服した場合のように、従前の支配者から政治権力を力で奪い取った人物である。したがって、マキアヴェッリによれば、その人物は、君主としての正当な資格や権利をもたない。新君主の支配には正統性が欠如しているため、臣民は君主への忠誠心をもたず、彼に自発的に服従することはない。それどころか、臣民は新君主に積極的に抵抗し、その地位を奪おうとするだろう。

この状況を念頭に置きながら提供される主要な助言は、第一に、君主が軍事力を確保すること、第二に、悪徳を行使する覚悟をもつことである。後者についていえば、君主は、気前良くあるよりもけちでなければならぬ、愛されるよりも恐れられなければならない。慈悲深いよりも残酷でなければならぬ。約束を常に守る必要はない。マキアヴェッリがこのような特異な助言を提供したのは、新君主国という例外的な政治状況を想定したことで深く関係している。

マキアヴェッリが『君主論』で新君主に焦点を合わせた実践的理由は、メデイチ家のメンバーがまさにそうした君主に

なるうとしていた点にある。すなわち、教皇レオ10世は、名目的には教皇領であるローマニア地方の諸国を事実上支配していた従前の君主たちを追い払い、それらを弟のジュリアーノや甥のロレンツォに与えようとしていた。同著は、基本的にはイタリア北中部のローマニア地方の諸国を征服した場合を想定しているのである。『よくわかる政治思想』（ミネルヴァ書房）

昨年の拙文の繰り返しになるが、メデイチ家の役に立つ目的で新君主国に焦点をしばった『君主論』の内容は次のようになっていいる。「目次を眺めると、献辞と二六の章があることが分かる。二六の章は、三つの部分に大別できる。第一は、国家分類論（第一一一章）、第二は、君主への助言（第一二二―二三章）、第三は、イタリア論（第二四―二六章）である。これら三つのうちで第二の部分は、君主がいかに行動すべきかという問題の考察に充てられている。

この範囲は、さらに二つの種類の議論からなっている。一つは、軍事論であり、『君主論』第二章から第四章までで展開されている。もう一つは、君主の振る舞い方に関する議論であり、第一五章から第二三章までで考察されている」

（鹿子生浩輝『マキアヴェッリ』（岩波新書）

『君主論』は、最初、教皇レオ10世の弟ジュリアーノに献呈される予定だった。しかし、ジュリアーノが早く亡くなったため、教皇レオ10世の甥のロレンツォに献呈された。まず

は、この、献呈者の変更と内容との関連について考えてみた。
い。

この献呈者の変更と内容との関連についてを含む本稿の自分の考察は、全面的に前記の鹿子生浩輝『マキアヴェッリ』（岩波新書）に負っている。したがって、直接の引用である、
かっこ（二）のあとのページ数は同書のページ数である。

ジュリアーノは、1512年9月1日、一市民としてフィレンツェに帰国した。11月7日、マキヤベリは15年間務めた書記官を解雇された。1513年2月、反メディチ陰謀が発覚し、マキヤベリは無実だったが投獄され拷問も受けた。3月、ジョヴァンニ・デ・メディチ枢機卿が教皇に選出され、レオ10世を名乗った。マキヤベリは恩赦により釈放された。

1513年の釈放後、マキヤベリは山荘で、メディチ家への就職論文である、したがって、君主の悪徳が不可避である新君主国に焦点を絞った『君主論』の執筆を始めた。完成は1515年2月以降、1516年8月以前とみられている。

ジュリアーノは、すでに1513年8月までには、フィレンツェから離れていた。ジュリアーノは、フィレンツェ市民との面談や議論にすぐに飽きてしまったのだ。そこでメディチ教皇レオ10世は8月、ジュリアーノの代わりにロレンツォをフィレンツェに送り込んだ。ジュリアーノは、1514年6月後半に祝祭への参加のため一時帰国したようだが、その後フィレンツェに定住することはなかった。

マキヤベリの1513年12月の有名な書簡からは、マキヤベリが『君主論』をジュリアーノに献呈しようと考えていたことが分かるが、ジュリアーノがローマに向かい、すでに半年近く経ったこのころ、ジュリアーノにフィレンツェ統治に関する助言を与えようとしていたとは考えにくい。ジュリアーノはローマ到着後、フィレンツェの統治そのものに関与した形跡はない。彼は甥のロレンツォと対立関係にあり、共和国の統治はロレンツォに委ねられていた。

先に述べた1513年12月の書簡の他に、もうひとつの重要な書簡がある。1515年1月31日の書簡である。この書簡からは、マキヤベリがなおジュリアーノに取り入ろうとしていることが確認できる。だとすれば、この時点の『君主論』は、まだロレンツォへの献辞がない作品ということになる。マキヤベリは、この書簡で、ジュリアーノがローマニア地方に属する次の4つの国を支配することになると論じている。パルマ、ピアチェンツァ、モデナ、レッジョの4国である。ここで重要なのは、先の書簡と同様に、ジュリアーノが新君主となるという理解である。

事実、教皇レオ10世は1515年2月末に、ジュリアーノにこれらの諸国を与えた。その前の1月、ジュリアーノは、教会軍総司令官となり、ロレンツォがフィレンツェ軍の隊長となった。しかし、ジュリアーノは病気になる、同年の夏頃には重篤となった。そこで、教皇は、1515年8月初頭に

ロレンツォを教会軍総司令官に就かせた。この時点で、フィレンツェ軍と教会軍は形式的に同一人物の指揮下に置かれたことになる。そして、ジュリアーノは1516年3月に死去した。

そこで、マキヤベリは、献辞の名宛人をジュリアーノからロレンツォへ変更した。「その際に、本文はそのままロレンツォへの献辞を加えたか、あるいは、『君主論』を大幅に修正したかは不明である」（同上p78）。「変更の時期は、一五一六年三月のジュリアーノ死後と考えるのが自然かもしれない。しかし、マキアヴェッリは、すでにジュリアーノの病状が重篤となった一五一五年の夏頃かそれ以降には、彼を見限っていた可能性も捨てきれない。（中略）マキアヴェッリは、献呈相手をロレンツォに変えた際、この新しい読者がジュリアーノとはやや異なる政治状況に直面しているため、議論の内容を変更しなければならなかったかもしれない。（中略）ここで指摘しておくべきは、献呈相手がロレンツォに変わった後も、ジュリアーノのための議論を少なからず転用できたことである。すなわち、ロレンツォはジュリアーノと同様に、ローマニアの都市の新君主となる可能性が見込まれていたのである」（同上p78〜79）。

実際にロレンツォは、1516年6月にはウルビーノをペーザロとともに獲得し、8月にウルビーノ公となる。彼は、マキヤベリがまだジュリアーノへの『君主論』献呈を考えて

いた頃、すでにフィレンツェの統治を任されていた。ところが、ロレンツォの関心はフィレンツェの統治よりも、新しい国家の獲得に向けられていた。その成果がウルビーノの獲得だった。

「ロレンツォ宛献辞を含む『君主論』は、すでに示唆したように、一五一五年二月以降一五一六年八月以前に完成したと考えられる。これ以前からロレンツォは、新しい諸国を獲得しようとして画策してきたが、ジュリアーノの場合とは異なり、フィレンツェの統治にも関知していた。マキアヴェッリは、完成した『君主論』を献呈しようとした時点では、ロレンツォの立場を意識し、この若き読者に祖国の統治に関する助言を与えようとしたと考えるのが自然であろう」（同上p120〜121）。

だから、マキヤベリは、ジュリアーノ版に第八章〜第一章の四章を加筆して、ロレンツォに献呈した可能性があるとして鹿生子浩輝は考えている。その理由は、この著作の次の2つの難点から考えられるという。

「第一に、マキアヴェッリは『君主論』第一章で、第二章以降の国家分類論の見取り図を予告しているが、彼は、この縮図ではその後の国家分類論のすべてを提示しているわけではない。すなわち、その見取り図には、支配権の獲得が幸運に依存した場合の議論、つまり第七章までの範囲しか含まれていない。マキアヴェッリが第一章の執筆時点で第八章から第

一章までの議論を構想していたとすれば、なぜ彼は、第八章から第一章までの諸章の内容を第一章の見取り図で示さなかつたのだろうか。彼は、ジュリアーノ宛に君主に関する著作を執筆していた際、第七章までの分類で十分だと考えていたのではなからうか。

第二に、国家分類論の前半と後半の議論展開がいくつかの点で屈折していることである。第一章から第七章までの範囲は、第一章での見取り図に即した形でスムーズに展開していると言えるが、その後の範囲の議論は、すでにヴィルトゥ概念を検討してきたことからうかがえるように、けつして明瞭というわけではない（同上 p.132～133）。

つまり、ロレンツォはフィレンツェも統治しているから、メディチ家が統治している国は、新君主国とフィレンツェの二種類があり、マキャベリは、あくまでも主は新君主国だが、フィレンツェも論じなければならぬと考えたということになる。自分（浅利）は、『君主論』は新君主国しか扱っていないという思い込みがあるから、ここの理解が不十分である。

それでは、第八章～第一章の四章を加筆して、マキャベリは、ロレンツォにどういうフィレンツェ論を説いているのだろうか。フィレンツェは、ロレンツォが統治している国だが、マキャベリにとっては祖国である。当時の通常の用法では、祖国とは、イタリアではなく、「都市国家」を指すという。

結論を言えば、新君主国とは全く逆に、悪徳を行使してはいけない、徳をもって治めなければいけない、と説いていると思う。

自分などは、繰り返しになるが、加筆の可能性などを読めていないから、『君主論』は最初から最後まで、君主の悪徳が不可避であることを書いていただけと想っていた。

第八章で、シチリアのアガトクレスが出てくる。シチリアは共和国である。フィレンツェも共和国である。だから、これは新君主国の話でなく、フィレンツェの話であるということになるだろう。マキャベリは、アガトクレスについて、「とはいえ、同郷の市民を虐殺し、仲間を裏切り、信義や慈悲心や宗教心をもち合わせないものを、君主の徳などと呼ぶことはできない。たとえ、こういう手段で支配権を握ることはできて、栄光を手にすることはできない。（中略）数知れない彼の悪らつな行いに見られる獣のような残虐さと非人間性は、卓越した英雄の列にはいることを許すものでない」（『マキャヴェッリ全集』の『君主論』（池田廉訳）（筑摩書房）第九章は、市民型の君主国を扱っている。これは、「一市民が極悪非道などの、許しがたい暴力で君主になるのではなく、もう一つの状況、つまり他の市民の後押しによって祖国の君位につく場合」（同前 p.33）である。「君主が民衆のうえに土台を置き、しかも指導力があり、果敢な人であつて、逆

境にあつて慌てふためくこともなく、準備万端おこたらずに、その剛毅さと適切な措置によつて衆人の心を惹きつけていけば、けつして民衆にあざむかれることはない」（同前p36）という。徳や指導力などで、民衆を導くということだろう。

第一〇章は、「要するに、強力な城郭都市をもち、しかも民衆の憎しみを受けていない君主は、攻められることはないといえる」（同前p38）とあるから、第九章の関連章と言えらるだろう。

第一章は、教会君主国についてである。これについては次で、述べることになる。

『君主論』は、以上の新君主国、フィレンツェ共和国の2種類だけ論じているのではない。

「マキアヴェッリは『君主論』で、君主国を類型化し、それぞれの類型に即応した助言を個別的に提供している。大局的に言えば、そこには新君主国、フィレンツェ共和国、教会国家という三種の統治に対する考察がある。（中略）彼は、これらを複線的に提示したうえで、さらに最後の数章（第二章から第二六章まで）でそれら全体を包括するようなイタリヤ論を展開している」（鹿子生同上）というのである。

「マキアヴェッリが『君主論』をロレンツォオに献呈しようとしていることは、その献辞から明白であるが、しかし同著は、従来 of いくつかの解釈とは異なり、彼（ないしジュリアーノ）のみを読者と想定しているわけではない。その最終

章には、「ご尊家」という表現があり、彼がそこでメディチ家全体に対するメッセージを発していることが分かる。（中略）『君主論』第一章でも教皇レオ一〇世への提言があり、メディチ教皇もその読者として想定されている。イタリアの大義は、特に教皇が伝統的に用いてきたレトリックである。教皇に求められているヴェルトウとは、軍事力を別とすれば、積極的なリーダーシップの発揮であろう」（鹿子生同上p215）。

『君主論』の教会国家論は、イタリア政策をテーマとしている。外国にいいように侵略されているイタリアをどうするかという問題である。新君主は、教皇によるイタリア政治の一翼を担い、とりわけ教会軍総司令官として戦争を遂行するのがマキヤベリにとつては自明の前提だったみたいだ。

マキヤベリの構想していたイタリア解放の具体的方法とは、全イタリアの統一といったものではなかったらしい。それは、対立・抗争の激しい現段階では難しく、実現可能なのは、メディチ諸国の連合であると考えたらしい。具体的に言えば、それはフィレンツェ共和国、教会国家、新君主国の同盟である。これらの諸国ないし地域は、いずれもメディチ家の支配下にあるために容易に軍事的協調が可能である。もちろん、この同盟は、状況次第で他の諸国と結ぶだろう。

「彼が『君主論』でなすべきことは、従来 of の理念を再表明しながら、メディチ教皇に積極的かつ迅速に政策を推進するよう念を押すことのみであった」（鹿子生同上p216）。

『君主論』は、あくまで新君主国を主としながらも、フィレンツェ共和国、教会国家も論じた作品だった。3種類の国は、いずれもメディチ家と関係していたからである。

自分が今考えていることをまとめるに

①『君主論』が悪名高いのは、新君主国という悪徳が不可避免な特殊な状況を論じたものを、それを恒常状態もそうであると誤解したためである。

②『君主論』（ならばに同時期に執筆された『デイスコルシ』ローマ史論）が、近代政治学・歴史学の祖とされるのは、政治現象や歴史現象を神や全てを運命のせいになかったからである。

③君主政・共和政・民主政について。君主政は、一人支配のことである。共和政は複数者支配のことである。共和政は、さらに、少数者支配の貴族政と多数者支配の民主政に分けられる。ただし、同じ政体を見ている場合でも、分析者によって異なる名称が与えられることもある。

④マキャベリは、同時期に『君主論』と『デイスコルシ』ローマ史論』を執筆した。『君主論』では君主政を論じ、『デイスコルシ』ローマ史論』では共和政を論じた。マキャベリの本音はどちらにあるのか？共和政にあると思う。マキャベリは共和政が望ましいと考えていたと思う。ただ、いろいろ条件によって、どうしても共和政がとれない

国・地域があることも認めていたと思う。例えば、共和政が成り立たない新君主国などだ。真の理想主義者（＝真の現実主義者？）であるマキャベリは、与えられた現実で全力投球するしかないと思いい、新君主国でできることはこれだということ、『君主論』で書いたのではないだろうか。

泣き虫じゅんちゃん

神 光子・作

神 光子・画

「世界中の悲しい涙は

みんなお星様にしてしまいましょね

大きな涙は 大きな悲しみ

小さな涙は 小さな悲しみ

それらを

『さよならー』

と、お空に飛ばし

お星様にしてしまいましょ

お空の皆さん

ごめんなさいね」

という看板をかかっている、可愛いお家があります。そのお

家は、小さな森の中にあつて、優しいおばあちゃんが住んで

います。

この自然の中にあるいろいろは、悲しくなるとここを訪れ、ポロポロと悲しい涙、悔しい涙を流して帰って行きます。おばあちゃんは、その涙のすべてを受け止めてくれます。

この自然の中には、誰にもわかつてもらえず、誰にも気がついてもらえず、悲しい思いをしているいろいろが、いっぱいいるのです。だからおばあちゃんは、何も言わずに、少しでも心が安らぐように、お手伝いをします。

今日はお天気がいいので、おばあちゃんはお出かけのことにしました。いつものように、魔法の小箱をかごに入れて。実はおばあちゃんは、魔法使いだったのです。そして、この魔法の小箱は、とても大事なものです。

小箱には、たくさんの涙がたまっていて、それらは、さまざまな色でキラキラ光ります。とても美しい光を放ちます。

きつと悲しさを伝えたいから光るのでしよう。遠くからでもしつかりと見えるように。

今日もお供は、子犬のごんちゃんです。

ごんちゃんは、人間にけられたり、なぐられたりして、つらくてポロポロ涙を流しながらさまよっていた時、おばあちゃんと出会いました。

おばあちゃんは、

「何ということでしょう。かわいそうにねえ、どれどれ、その涙をもらいましようね」と言いながら、そつとガラスの小箱に入れました。

そして、

「私の家に来るかい？」

と、優しく頭をなでながら聞きました。

ごんちゃんは、涙で声も出ず、何度も、

「うん、うん……」

と、言うようにうなずきました。

おばあちゃんは、

「今日からあなたの名前は、ごんちゃんよ、どう、いい名前でしょう？」



ごんちゃんは、嬉しくて、また涙がごんごんあふれ出てきました。ヒックヒックも出て言葉にならず、

「うん、うん……」

を繰り返していました。

ごんちゃんのように、おばあちゃんに出会うことができるいろいろは、幸運です。おばあちゃんのお家を知らないいろいろや、このお家までやつて来ることができないいろいろがたくさんいます。だから、おばあちゃんはずわい出かけて行って、つらくて泣いているいろいろに、会いに行くのです。

「今日は、誰も泣いていなければいいけれど」

と、独り言を言いながら歩いて行くと、小川のせせらぎが聞こえてきました。サラサラと清らかな水の音でしたが、それは水達のすすり泣きも混じっていました。

おばあちゃんは、

「なぜ悲しいの？」

と聞きました。そして、水達のお話を聞くために、ちよつとの間、魔法を使って水達の流れを止めました。

水達は、

「私達は、これからどこへ行くのでしょうか？ 私達は、自分の力でとどまることはできません。どこへ行って、そしてどうなるのでしょうか？」

キラキラと光りながら、水達はとても不安そうでした。

おばあちゃんは、

「先にあなた方の涙をもらいましようね」

と言って、水達のゆれながらキラキラ光る涙を、上手に両手ですくい上げ、小箱に入れました。それはすぐに銀色に変わり、小箱の中で静かに輝き始めました。それからおばあちゃんに魔法をといて、流れ行く水達に言葉を送りました。

「あなた達の行き先は海ですよ。大丈夫、海にいたら、空に昇り、雲になってここに来て、そして雨になり、またこの小川へもどって来ることが出来ますよ。心配しないで良い旅をね」

と言うと、ずーっと向こうから、

「有難うー。おばあちゃん、行つて来まあーす」

と、今度は、少し元気になった水達のサラサラが聞こえて来ました。おばあちゃんとごんちゃんは、少しの間、遠くへ流れ行く水達をながめていました。

しばらくすると、ごんちゃんが、

「おばあちゃん、どこかで赤ちゃんにやんにやんが泣いている」と言いました。

ミャーミャーミャー……

と泣いている子猫の音が、確かに聞こえて来ます。そう言えば、少し前から冷たい風が吹いていました。子猫はふるえながら、大きな岩の下にうずくまっています。

おばあちゃんは、

「まあ、寒そうなこと。今すぐ、そこを暖めてあげましょうね。お母さんは、もう少ししたらここに来ますから、心配しないで」

と言って、魔法の呪文をとなえ始めました。

やがて暖い風につつまれ、子猫のふるえは止まりました。

でも、その透き通ったきれいな目に、まだいっぱい涙を溜めながら、泣き続けています。

まもなく、お母さん猫がやって来ました。子猫を見つけると、ほっとしたようにかけ寄り、そして子猫を安心させるように、頭をペロンペロンなめながら、大粒の涙を流し始めました。

それを見ていたごんちゃんは、
(お母さんつていいなあ……)

と、少し寂しくなりました。
でもすぐに、

(いいもん、ぼくには優しいおばあちゃんがいるもん)

と、いつもの表情にもどりました。

おばあちゃんは、ごんちゃんの心の中はわかっていました。

(ごんちゃん、少しばかり寂しくなったんだね)

と思いましたが、涙は出ていなかったので、

(強くなつたね、ごんちゃん。あんなに泣き虫だったのに)
と、ちよつとだけほつとしました。

おばあちゃんは、子猫の小さな涙とお母さん猫の大きな涙

を受けとると、そつと小箱に入れました。親子の涙は緑色になり、キラキラ輝き始めました。猫の親子は、おばあちゃんにいつばいお札を言つて、足早に歩いて行きました。

ごんちゃんは、

（良かったね。もうお母さんと離れちゃだめだよ。元気でね）

と、心の中でささやきました。

猫の親子を見送りながら、

（ぼくのお母さんは、どこにいるんだろう。少し前まで、お母さんがいたような気がするんだ。ぼくは、お母さんにびつたりくつついて寝ていたような気がするんだ。だけど、いつの間にか独りぼっち。

お母さんはどこに行つたんだろう。ぼく、お母さんのこと何にも思い出せないや。どうしてだろう？ やつぱりちよつと寂しい）

と思いました。

そして、

（おばあちゃんに聞けば、きつと答えてくれるかもしれない）

と、思つたりもするのだけれども、聞いたらもつと悲しくなるかもしれないという気がして、聞くことができませんでした。ごんちゃんのお母さんのことは、つらいお話ですから。

しばらく歩いて行くと、

「おばあちゃん、どこかからシクシク泣いている声が聞こえて来るよ」

「あら、ほんとだ」

それは、大きなお家のお庭から聞こえて来ました。泣いていたのは、しゃくしゃくのお花でした。

おばあちゃんが、

「どうして泣いているの？」

と聞くと、しゃくしゃくのお花達は、今にも消え入りそうな声で、

「一生懸命頑張つて咲いたのに、夜中の大雨に打たれてしまったのです。」

透き通るような薄い黄色の花びらから、スーッと悔し涙がひとしく流れ落ちました。

おばあちゃんは、

「そうね、それは悔しいこと。一年に一度、今の季節にしか咲くことができないものねえ。でも、大丈夫。花びらはそんなにいたんでいないから、楽しい日々をまだまだ送ることが出来ますよ。この後、しばらくは雨が降らないように、魔法をかけてあげましょう。どうぞ美しく咲き誇ってくださいね」

と言いながら、涙を受け取りました。そして、その涙は、美しい金色に輝きました。

「有難う、おばあちゃん、ほっとしました」

と、お花達はとても喜んで、丁寧にお礼を言いました。

「さあ、そろそろ帰りましようかね、ごんちゃん」

と、おばあちゃんが言うと、またごんちゃんが、

「あつだめ、おばあちゃん聞いて、鳩がホッホウ、ホホ、ホッホウ、ホホって泣いているよ、何だか悲しそうに。何かあつたのかもしれない」

と、耳をそば立てながら急いであたりを見回しました。そして、

「おばあちゃん、あそこの木の下のにいるよ、お母さんと赤ちゃんが、あつ、お父さんも」

「おやおや、大変、ひなが巣から落ちちゃつたのね」

高い木の上にある巣まで、ひなを持ち上げて飛ぶことは、鳩にはとても無理です。お父さんとお母さんは、羽を大きく広げて、ひなをつつみこむことしかできません。お母さんは、大きなまん丸い目から、涙をポトポト落としていました。

おばあちゃんは、

「泣かないで。今、巣にもどしてあげるから」

と言いながら、お母さん鳩の涙を小箱に入れました。涙は青くキラキラと輝きました。

そして、おばあちゃんが呪文をとなえると、三羽の鳩はふんわり浮き上がり、そのままスーッと巣に入りました。

鳩のお父さんとお母さんは、お礼を言った後、何やら少しおばあちゃんと話していました。

「さあさあ、今度こそ帰りましようね」

おばあちゃんがそう言った時は、もう夕方になっていました。その時、ごんちゃんは思い出しました。

「あつ、おばあちゃん大変大変、今日は満月の日だよ」とあわてて言いました。

おばあちゃんは、

「あら、まあ、そうだったわねえ。早く帰らなくっちゃ」

と言いながら、急いでお家に向かいました。

今日は、悲しみを含んだたくさんの涙を、空に旅立たせる日だったのです。ひとつぶひとつぶの涙を、丁寧に整え、ゆつくりと時間をかけて、準備をしました。

長い時間が過ぎ、静まりかえった森の西空に、美しい月が静かにおりて来ました。大きな夜明けの満月です。

おばあちゃんは、

「お月様、今日もよろしくお願ひしますね」

と言って、澄んだ夜空にぼっかり浮かんだお月様に向かい、小箱を高く上げて、少しづつふたを開けました。すると、悲しみを含んだ涙達がふんわりと浮かび上がり、先を急ぐよう



に次々と、お月様に向かって飛んで行きます。それは、大きな光のかたまりとなつて、どんどん明るさを増し、お月様に吸いこまれるように飛んで行きました。

おばあちゃんは、飛び立つ悲しみの涙達に、
「早く心おだやかになるのよ」

と優しく声をかけました。そして、

「お月様、また、この地上の悲しみを受け止めてくれて有難う。よろしくお願ひします」

お月様は、いつものように、

「はいはい、確かに引き受けましたよ。でも悲しい出来事というものは、減らないものですねえ」と、力なくほほえみました。

悲しみの涙達は、夜明けの満月に導かれて、広い空に向かって飛んで行くのです。そして、夜空に散らばって星となり、輝き始めます。やがて、悲しみがうすらいでくると、流れ星となり、消えゆきます。すぐに消えゆく星もあれば、何日も何日も動かない星もあります。

しばらくして、東の空からお日様の光が近づき始めました。反対に西の空では、お月様達が少しずつ消えかかり、とうとう見えなくなつてしまいました。

それを見とどけた後、ごんちゃんが、

「おばあちゃん、少し前に、おばあちゃんに教えてもらったぼくの涙の星を、おばあちゃんと一緒に見たよね。白くてスーッと優しく流れたよね。どうしてぼくの星には、色がついていなかったの？」

「そうね、白くて、優しく流れて行ったわね。それはね、ごんちゃんの心の中にあつた悔しさや、悲しさがうすれていったからなのよ。ごんちゃんが、少し強くなったからかな」

「ぼくの涙が魔法の箱に入った時には、何色だったの？あの時ぼくは、次から次へと涙があふれていたから、何も見え

なかったの」

「ごんちゃんの涙は、宝石のルビーのように赤くて、とても美しく、キラキラと光っていたわよ。きれいだっただけど、本当につらかったんだろうなあ……と、思ったわねえ、あの時は」

ごんちゃんは、しばらくだまっていました。そして、

「もうぼくは泣かないよ。きつと泣かないよ」

と、どんなことがあっても強く生きていくんだという、いじらしい覚悟を言葉にしていました。まるで自分に言いかけせるかのように。

おばあちゃんは、ごんちゃんの頭を優しくなでながら、
「いつの間にか、少しずつ強くなってきたのね。えらい、えらい、よく頑張ったわねえ。ごほうびに、ごんちゃんにいいお知らせがあるのよ」

と言うと、ごんちゃんは、

「ぼくに、いいお知らせなんて……あるの?」

と、寂しそうな顔をして言いました。

おばあちゃんは、おだやかに言いました。

「よく聞いて。もう少ししたら、ごんちゃんのお兄ちゃんが来るのよ、ここに」

「えっ……… お兄ちゃん?………お兄ちゃん?」

「………お兄ちゃんって、ぼくのお兄ちゃん? ぼくにお兄ちゃんがいるの?」

「そうよ、ズーツとごんちゃんを探している誰かがいるのは、わかっていたんだけれど、誰なんだろうと思っていたら、何とさつきお父さん鳩が、ごんちゃんを見て思い出したらしいの。ごんちゃんとそっくりのわんわんが弟を探しているって。それで、ごんちゃんはここにいるよって、お父さん鳩から伝えてほしいとお願いをしたの。だからごんちゃんは、もうすぐお兄ちゃんに会えるのよ」

と、おばあちゃんが話し終わると、

アーン、アンアン、アーン、アンアンアン、アーン、アンアン、アーン、アンアン……

ごんちゃんは、激しく泣き出し、止まりませんでした。今までがまんしてきた何かが、一度にドーツとあふれ出したようでした。

(ぼくは、独りぼっちじゃなかったんだ。ぼくは……)

と、心の中でこの思いがグルグル回って、涙が止まりませんでした。

「家族が増えて、これからはぎやかになるわねえ、ごんちゃん?」

と、おばあちゃんが言うと、ごんちゃんはいやくりあげながら、

「ぼく、このまま外で待ってる。お兄ちゃんが迷うといけなもの」

と言いました。涙はまたまた止まりません。

「大丈夫よ、もうすっかり明るくなったからすぐに会えるわよ」
とおばあちゃんが言っても、もうごんちゃん
の耳には届きません。
『世界中の悲しい涙は
みんなお星様にして
しまいましょね
……』



と書かれている看板の前から動こうともせず
に、のび上がってあつちを見たり、こつちを見たり、首を長くして待っていました。
おばあちゃんは、しばらくその様子を見ていましたが、やがてにっこりして、
「朝ごはんの準備をしましょ。いつもよりずっと多めに」と言いながら、お家の中に入りました。

しばらくすると、
アーン、アーン、アーン、アーン、アーン……
が聞こえてきました。

おばあちゃんは、
（良かったわねえ、ごんちゃん。今日は本当に泣き虫ごんちゃんねえ）
と、にこにこしながら、
「さあさあ、ごはんですよー。二人共。早くいらっしやい」と声をかけました。

おわり

碑を訪ねて 番外編

フィリピン・コレヒドール島の碑群

西谷 ともえ

三十度くらいの気温の日を

「今日は涼しいね。」

と言えるようになった二〇二五年三月、一年早く派遣された先輩教員を見送った。一緒にきた同期派遣の先生も四人が帰国の途につき、寂しさに浸るも束の間、自分もいよいよフィリピンで過ごすのは最後の一年なのだ実感することとなった。

仕事は順調。順次送られてくる派遣教員たちはやる気に溢れ、業務は多く、人員も不足しているが、気持ちよく過ごしている。学校では最後の一年をやり切るのみだ。

もしかしたらこの地は、一度離れたらもう生涯来ることがない国かもしれないと思うと、行っておきたいところは無限にあった。約五十年を過ごした日本でさえ、まだまだ行っておかねばと思う地があることを思うと、子どもの頃と同じ呑

気さで過ごしたこの二年が悔やまれる。自宅から車で三十分ほどのマニラ湾岸で世界三大夕日と言われるマニラの夕日を眺めることすらできていない、生来の出不精（デブ症）の私……。

行きたいところがあってもなかなか行けない事情もあった。北緯四度のミンダナオ島で南十字星を探したいと思っても、その地の危険度から許可は下りない。レイテ島を一周して、大岡昇平の世界を嘯み締めたいという希望もあったが、頼みのガイドが高齢で病に倒れた。コレヒドール島はコロナ禍以降、定期船が運行しておらず、観光手段が閉ざされている。

こんな調子でなかなか計画は進まない。フィリピンは七千余の島々からなる国で、どこへ行くのも飛行機だ。それぞれの島には相通じないそれぞれの言葉があり、宗教があり、習わしがあり、そしてその時々々の社会情勢がある。慣れたつも

りで足を踏み込んで、争いに巻き込まれることは、想定しておかねばならない。ここ半年、日本人をターゲットにした犯罪が多発しており、自宅マンションの窓から見えそうな場所でも、拳銃強盗の被害があつたほどだ。中二の娘も連れて行くことを思うと、慎重にならざるを得ない。学校からは、「どこへ行くにもドアtoドアで自家用車を使用すること」と言われている。旅先もそれに従つて探すことになる。

マニラのあるルソン島はフィリピン最大の島である。マニラ湾の真ん中あたりがマニラ首都圏。東京23区のようなイメージで、マニラ市を中心とした十六市一町からなる。(マニラというと通常首都圏を指す) 外海からマニラを守る北西に伸びる半島は、バターン半島だ。(フィリピンでは三音目にストレスが置かれ、バタ・アンと発音する) 太平洋戦争では、アメリカ支配下にあつたマニラを、真珠湾攻撃からわずか十日で日本軍が占拠するが、五月まで米軍が立て籠つたのがバターン半島と、そこから数キロしか離れていないコレヒドール島だつた。バターン半島では、日本軍が捕虜にした米比の軍人を収容所に送る際、83kmの道のりを三日歩かせ、多数の死者を出したと言われている。この「バターン死の行軍」は行軍中の日本兵による虐待行為もあり、真珠湾攻撃に続いて米国民の怒りを買うこととなり、戦意を高揚させたという。実際には日本兵は20kgの装備だつたのに対し捕虜は手ぶらであつたとか、そのため逃亡は容易にできたとか、日本

兵はこのぐらいはいつも通りの当たり前の行軍で、過酷とは思っていなかったけれど、米兵にとっては、初の体験であつただけなどと言われている。被害状況は定かではないが、象徴的悲劇の一つであることは間違いない。戦後八十年の今年、なんとしても行つておかねば思うに至つた。

バターン半島を巡ろうと調べ始めると、なんとコレヒドール島ツアーの広告がスマホに出てくるようになった。この島はツアーでしか行くことができず、唯一の興行会社がコロナ禍で倒産したので、もう参加は無理だと思つていた。広告の会社は、ほぼ毎週末ツアーを行っており、しかも一回の募集人数は三十人ほどで、価格は想定の五分の一くらい。ちよつと怪しい、と思いつながらも申し込んでみると、二人だけなら興行できないという返事がすぐに来た。しかし、何人なら実施できますか、という問いには返事は来なかつた。

ツアーはバターン側から船で島へ渡るものだった。マニラ湾からだとフェリーで一時間だったが、このツアーでは船移動は二十分ほどとなつていた。ただバターンの棧橋までは地上でも二時間以上かかりそうだ。朝の八時にバターンから出航し、一時半には戻ってくる。島内はバス移動となり、昼食付きだ。

なかなか魅力的なコースなので、職員室で一緒に行つてくれる人を募つたら、あれよあれよ、十人の先生方が手を挙げてくれた。合わせて十二人。三週間後の土曜日に狙いを定め、

早速申し込むと、すぐにOKの返事が来た。

そこからの連携ブレイは学校ならではものだった。ある人は、コレヒドールの歴史についてまとめた資料の一覧を作成し、ある人は会計を、またある人は、配車計画を担当した。そしてツアー後に「死の行軍」ルートを辿って帰路に着くことを企画した。一大研修旅行となった今、三週間はあつという間だった。

六月七日、雨季に入ったばかりのBGC（日本人学校のある地区。マニラ首都圏にある）を、車四台に分乗し、午前三時に出発した。一人のドライバーが、片道三時間半みた方がいいと言ったからだ。四時でもいいかな、と思っていた我々は半分眠りながら車に乗り込んだ。このまま寝てしまおうと思っていたのだが、みんなが乗り込むと、話に花が咲き、眠気もどこかに飛んでいった。毎日顔を合わせているのに、こんなにも話すことがあるなんてと可笑しかった。

読んだ資料の復習もした。フィリピンで手に入る資料のほとんどはアメリカ視点の資料だ。バターンの悲劇、マッカーサー元帥の名言、「I shall return」。つい、アメリカ側の史跡を辿る旅のように感じていたが、当然のことながら、相手の日本側にも多くの思いが残る島であった。特に海の特攻隊である「震洋隊」は、この島に七部隊も駐留し、昭和二十年二月二十日、一千人以上の兵が出撃し、マッカーサーの言葉通り戻ってきたアメリカ軍がルソン島に上陸するのを、幾ば

くかは食い止めたという。

二時間ちよつとの時間をかけて、マニラ湾を北に半周、バターン半島の先端マリベレスにあるツアー会社の事務所に到着した。予定よりも一時間半も早く着いた。ドライバーたちはぼつが悪そうな顔をして「これが一時間遅く出たら、渋滞に巻き込まれて間に合わなかったんだ。」というようなことを懸命に説明していた。その様子がちよつと滑稽で、「大丈夫。怒っていないよ。」と笑いながら伝えた。

事務所から棧橋まではジブニーと呼ばれる小型バスで移動した。米軍がフィリピンを離れる時に払い下げたジブニーを利用した車である。フィリピン全土で乗合バスとして利用されている。マニラでは初乗り20ペソ（50円強）ほどで、庶民の大事な足である。環境問題から近々廃止される計画があり、乗ってみたいと思っていたが、車内で強盗にあうリスクもあり、学校からは利用してはいけないと言われていた。今回は貸切なので堂々と乗れる。初めてのジブニーに興奮した。

車内は電車のような横がけで片側七、八人乗れる。市中には体を半分出して立ち乗りしたり、通路に座つたりしている人もよく見るので、三十人近く乗っていそうだ。今日は我々に、おそらく同じツアー参加者のフィリピン人らしい数人が同乗した。乗り心地はお世辞にも良いとは言えない。道も舗装されていないので、余計お尻が痛かった。窓ガラスはないので風が心地よかったが、これがマニラのような渋滞だった

らと思うと、暑い、狭い、痛い、怖い。四拍子。今日乗れてよかったと思った。

数分で棧橋に到着。小型のクルージングボートが見えた。その向こうには横長の島が見える。コレヒドール島だ。泳いでもいけそうなほど近くに見えた。聞くと4キロくらいしか離れていないのだという。

我々の早く行きたいという気持ちをよそに、スタッフはいつまでも船に乗せようとしめない。これがいわゆるフィリピンタイムだから仕方がない。良くも悪くも時間はゆつくり流れるのだ。結局三十分ほど経った頃に、さつき帰ったジブニーが十人くらいの客を乗せてやってきた。彼らを待っていたのかも知れない。後着の客は明らかに欧米人と思われた。緊張が走った。コロナ前のツアーの口コミで、アメリカ人と一緒にになった日本人が、「居心地が悪かった」「責められた」などと書き込んでいたのを見ていたからである。欧米人グループには、年配の方の姿も見えた。当時の軍人さんなら百歳にはなるだろうから、流石にそうではないだろうけれど、我々はさつきまでの賑々しい口を少し閉じた。

いよいよ乗船となった。八人ずつになれという。おかしいな、と思っていると、我々の乗る船は目の前のクルージングボートではないと言う。するとバリバリというエンジン音が近づいてきた。カニ船だ。ツアー価格の安さの意味がやっとわかった。

カニ船は、小型エンジンを搭載した小さなボートで、両側に竹を広げてバランスをとっている。見た目がカニのようなのでカニ船というのだと聞いたことがある。シュノーケリングに行く時、ちよつと海岸から離れるために乗る、という船だ。実際これもシュノーケリングやダイビングで使われている船と思われ、着用を求められた救命胴衣も、海水で湿っていた。持ち物に「着替え」と書いてあった意味がわかった。ボートは風を切つて、一直線に島へ向かう。水飛沫が風と共に飛んでくる。エンジンはフル回転の音をたて、話し声もなかなか通らない。ほとんど無言のまま、十五分ほどで島に到着した。

石造りの棧橋に着く。岸壁に打ち寄せる水までが見たこともないほど透明で、すぐ目の前に大砲が沈んでいるのが見えた。フィリピンでいくつかの海岸に行ったが、こんなに澄んでいるのは初めてだ。大砲が完全に沈んでいるところを見ると、数メートル下はつきり見える。ムラサキウニがゴロゴロゴロゴロ。養殖場かのようにたくさん見えた。ここは基本的には無人島である。入島者はツアー参加者のみで、島内はバス移動で、海に入る者はいない。一軒あった立派なホテルも閉鎖され、宿泊する人がいない。人間がいないと、こんなにも綺麗な海が保てるのかと、改めて感じた。

島の中央にある棧橋からバスに乗る。かつて走っていたトラムを模したバスで、定員は四十人ほど。今日は三十人くら

いに、ガイド歴二十七年というガイドがついた。午前中は乗り場から島の東側を一周し、戻って昼食。その後、西側を回る予定だ。島はオタマジャクシの形をしているので、頭の付け根から、頭の方を回って、尻尾を八の字に回ると言った方がわかりやすい。

頭の方には、大砲や、兵舎などの建物が多く残されており、受けた砲弾の凹みも至る所に見られた。元々アメリカ軍が整備した軍事施設を、日本軍が奪ってそのまま利用したそうだが、映画館は廃墟となり、崩れてはいるが、おしゃれな洋館だったことを思わせる屋根の装飾がしっかり残っていた。映画はマニラで興行されるよりも一週間は早く上映されていたという。ゴルフコースやテニスコートも完備されていたこととで、駐比米軍が豊かで穏やかな生活を送っていたことがわかる。そこに日本軍がやってきた。米軍を追い出し、施設を奪った時、彼らはこの遊興施設に何を思ったのだろう。或いは開戦当時には楽しむ余裕があったのだろうか。

バスではガイドがわかりやすい聞き取りやすい英語で解説してくれた。なんとなくわかった風で過ごしていたが、年号や兵の数など数字がたくさん出てきたあたりから、だんだん目を閉じがちになり、大砲群を三つ見た後くらいからは、授業中の生徒のように、「全部ちゃんと聞いているからねー」というつもりでうとうととしていた。子どもみたいに朝からはしゃいで、肝心の時に眠くなる、そんな自分が、寝ながら

も情けなかった。

それでも停車のたびに目が覚める。見学箇所はそれぞれ一、二分しか離れておらず、(歩いたほうが絶対早い距離)だから一、二分しか寝ていないのだが、残された大砲や、砲弾を受けたコンクリートの凹みを見ると背筋がピンとなる。砲弾を運んだだろうレールの上を歩きながら、砲弾が飛んでくるかもしれない緊張感を想像しながら歩く。ガイドは欧米人のツアー客と何やら話し込んでいる。私たちには聞かれたくない話かもしれない。緊張が走る。

「集合写真を撮ろうよ。」
誰かが言った。一気に気が緩む。

「中学生、カメラマン探してきて。」

ここは教員十一人、生徒は娘一人。スマホ片手に、話しかけやすそうな観光客を、とあたりを見回しているうちに、娘はすでに声をかけていた。なんと、さつきまでガイドと話していたあの欧米人だ。『あちゃー。せめてフイリピン人に頼んでくれよ』と言いたいのを飲み込んで、様子を窺った。カメラマン氏はとても親切で、気さくで、ユーモラスな人だった。我々に大きな声で指示を出し、戦場とは思えないような楽しそうな写真を撮ってくれた。何か起こるのではと思っていたが杞憂に終わった。彼はやはりアメリカ人らしかった。どんな思いでこの地に来たのかわからないが、戦後八十年の時間が私たちに笑顔を向けてくれることになったの、だろうと思っ

た。

東側の見学が終わり、船着場の近くの東屋で昼食となった。フィリピン料理のお弁当だ。前日の朝に急に連絡が来て、十四時までに返事しろとメニユーが送られてきていた。チキンアドボ、ポークビステイク、フライドチキン、スウィートサワーフィッシュの四つからの選択だ。この日は、突然休日になつて（フィリピンでは年に数日、突然の大統領令で休日になることがある）みんな学校にはいなかったから、取りまとはめは難しかった。結局ポーク以外を四個ずつ頼んでおいたのだ。フィリピン料理は比較的日本人好みのものが多い。肉類は調理法によつては臭みが抜けないことも多いが、チキンにハズレはないというのが我々の共通認識だ。私はチキンアドボを選んだ。アドボは酢を使った煮物で、フィリピンのお袋の味と言われるほどの一般的な家庭料理だ。この弁当も肉料理だが、さっぱりした口当たりで美味かった。朝早かつた上に、おやつしか食べていなかったこともあつて、一層美味しく感じた。

三十分ほどで食事を済ませると、午後の西回りルートの出発となった。こちらは日本人ゆかりのコースになつている。

まずマリントラ・トンネル。これは元々米軍が掘つた司令部兼防空壕で、千人収容できる病院にもなつていた。長さ二五三メートル、幅七・三メートル。高さは五・五メートル、本道があつて、二十余の枝道に分かれている。米軍を追い払つた

日本兵がそのまま利用し、最後に残つた兵はここで玉砕したとのことだ。

バスを降りてトンネルに足を踏み入れると、急にひんやりとした風を感じた。外に比べて極端に涼しい。

「小学生が遠足でこういうところに来ると、絶対に入れないつて泣く子も時々いるんですよ。」

と、大阪から来ている教員が言うと、関東や九州から来ている教員たちも

「子どもには感じるんですよ、きつと。」

などと同意した。さすがに高校生でそんなに怖がる生徒にはあつたことがないな、と思ひながら、この涼しさになんとも言えない恐怖を感じた。

内部では、日米の兵士の人形で当時の様子が再現されており、却つてそれが、生々しさを半減させてくれた。ただ、狭い枝道にベッドを並べ、その上下に怪我人が置かれている、病院の様子を再現した所だけは、当時の様子を強く感じさせていた。白さを感じない、密度の高すぎる病室は今にも虫が這い出て、臭つてきそうな空気感だつた。

暗い気持ちでトンネルを出て、バスに乗ると、小雨が降つてきた。最後の停車場、日本平和庭園へ向かう。ここは、戦後日本が整備した公園だ。遠くからでも見える観音菩薩像が我々を出迎えてくれた。手入れの行き届いたこざつぱりとした庭園だ。「戦没者追悼慰霊之碑」「コレヒドール島戦没者慰

「靈之碑」など、いくつもの碑が点在している。「第八震洋隊慰靈碑 秋山鉄雄」と、亡くなった兵士の個人名が刻まれたものもある。当然のことだが、亡くなった方々にはそもそも一人一人名前があり、血の通った肉体があつたことを改めて思い出させてくれた。

雨が強くなってきたが、誰も傘を差そうとはしない。そんな雨を受けるように、一際、目を引く蓮の形をした碑がある。その周りには、七十枚の葉の形を模した板があり、亡くなった方々の出身地と名前、亡くなった日と年齢が刻まれている。十七歳、二十四歳、三十一歳、三十九歳……。見るのも辛い記録である。

一気に疲れが出て帰りのボートに乗る頃には、皆の口数は相当減っていた。カニ船のうるさいエンジン音とそれが切る波の音も気にならない程に呆然としていた。またジブニーに乗って事務所に戻り、解散となった。時刻は二時少し前。雨もすっかり上がり、日差しと共に暑さも戻ってきていた。陽気なドライバーたちが出迎えてくれ、明るい気持ちを少し取り戻すことができた。

フィリピン人は底抜けに明るく、前向きだ。そして厳格なカトリック教徒が多く、隣人愛の精神が根付いている。こんなフィリピン人の一人一人に助けられ、私のような能天気な現代の日本人はこの地に住ませていただいている。このことに感謝して、残りの日を過ごしたいと思った。

赤倉岳

佐藤 元 界

一

標高一、五四八mの赤倉岳は、北八甲田火山群の一座をなし、八甲田カルデラの中に噴出した中央火口丘である。頂上付近には、井戸岳・八甲田大岳・硫黄岳とともに爆裂火口をもつが、赤倉岳の場合は、その爆裂があまりにも激しかったために、山頂付近の山体が北東向きに吹き飛び、現在は火口が馬蹄形になっている。また、爆裂によって流れ出た火山岩屑流の堆積物は、田代平高原で見ることができる。

私は、昭和五十年代以降、八甲田連峰の魅力にとりつかれて、全部で十八座あるうち、これまでに北八甲田の十座、南八甲田の四座、計十四の諸峰に登り、それぞれの個性ある自然の景観に親しんできた。とりわけ赤倉岳には、爆裂火口と対面するたびに、火山活動の凄まじき威力に圧倒されて、慄おそきにも似た感慨に浸ることもしばしばであった。

特に荒々しい絶壁をなす馬蹄形の爆裂火口は、断面が赤紫色や黄色や黒々とした色など層状を示し、溶岩流と火山砕屑

物とが交互に重なっているなど、見るからに凄みがある。これらは、火口壁を吹き飛ばした爆裂の激しさと共に、火山の成り立ちを如実に物語るものとして、興味深い露頭でもある。しかも、火口壁の縁からひとたび足を踏み外したならば、一卷の終わりを思わせる程の急峻な斜面が谷底に下っている。ただ、それもやがて麓に至って緩やかに変わり、緑の田代平高原に続き、八甲田カルデラの薄青い外輪山へと広がっていく。景観は、まことに雄大で、示現会の画風にも似る。

初夏から秋にかけて、幾度となく八甲田山を喘ぎながら登り、噴き出す汗を拭きながら山頂から眺める実物大の青森県を体感する時ほど爽快なことはない。広大な青空を仰ぎ見て、深呼吸をするのも心地よい。

だが、そうした機会はあくまでも限られた時季に過ぎない。山岳スキーに心得のない私は、積雪時の八甲田山に足を踏み入れることはなく、せいぜい萱野高原や田代平高原から雪の山頂を仰ぎ見るしかなかった。

ところが、かんじきやスノーシューを入手してからは、雪



上を自由に歩行できるようになり、事情は一変した。こうして積雪時ならではの景観をさらに求めて、一月から四月にかけての山歩きや山登りが始まった。

二

年も明けた一月の半ば。冬の八甲田山と間近に直面することを目的として、八甲田ロープウェイ山頂公園駅に着く。天候は晴れ、気温マイナス八度。素手を出せば凍えるようだ。スノーシューを履いて、アオモリトドマツの樹水や堅固な城砦を思わせる程に発達した電波塔の氷雪などを見ながら、標高一、三二四mの田茂泡岳の麓原に向かう。夏場では立木や藪の多い一帯も雪野原と化して遮るものもなく、つぼ足では難儀する歩行も、浮力を得たスノーシューではどこへでも歩ける。行く先々の雪片は、光を反射して宝石を散りばめたように無数にキラキラと輝き、心はすっかり開放的な気分である。

そして何よりも私に敬虔の念を抱かせるのは、眼前の全山真っ白な新雪に覆われた赤倉岳・井戸岳・八甲田大岳の三山である。静寂の中に見える雄大で純白の山容は実に気高く、堂々として威厳に満ち、白衣を纏った大御神のようである。この感覚は、夏山の時には味わったことがなく、初めて対面する冬山ならではの美しい雪景色を、私は歩くのを止めてし

ばらく眺め続ける。

できればあの山々に登ってみたいものだと思う。だが、行く手は深い雪が予想され、荒天続きの一月では登山もためらいがある。

三

三月の半ば。この日は一日中晴れの予報である。朝方に家の近くから穏やかな八甲田山を望むと、何だか私を待っているような気がする。直ちに支度を整え、八甲田山へ出発。目指すは赤倉岳。

八甲田ロープウェイ山麓駅に到着すると、目の前のダイレクトコースの斜面では、一人のスキーヤーが滑降に失敗して、抑えが効かず倒れたままずると滑り落ちていく。ゴンドラに乗った時、「雪面はアイスバーンだ。」との乗務員の案内も領ける。

この時期ともなれば、暖気と寒気が交互に到来し、山頂公園駅付近の雪も固くしまっている。樹氷を目当てとする観光客は姿を消し、ゴンドラを利用するのは主にスノーボーダーかスキーヤーである。

当日の山頂公園駅の気象データでは、天候は曇り、気温マインス一・四度、南東の風、風速毎秒二m。曇りと言っても、視界はよい。

十時四十分、同駅出発。つば足のまま、田茂范岳が眺められるなだらかな丘まで行って、そこでスノーシューを履く。

積雪3m、田茂范湿原はだだっ広い雪野原である。そこで再び赤倉岳・井戸岳・八甲田大岳を仰ぎ見る。一月とは違って、全山の雪景色にも変化が現れており、アオモリトドマツは樹氷が幾分解けて、濃緑色の葉を現わし始めている。しかし、雄大な三山に抱かれた開放的な気持ちには変わりはない。目を凝らすと、スキーヤーであろうか、五人ばかりの小さな黒い人影が、赤倉岳の手前のピークに向かっている。「先客に続け」とばかりに、意気が揚がる。

大岳コースと毛無岱コースとの分岐のあたりまでは、道標の竹竿が幾本も立ち並び、これに従って進む。登山口から赤倉岳の一、五二一mのピークまでは、直線にしてせいぜい六七百m。斜度は約二五度。登坂に息が切れる。何も急ぐ必要はない。一步、一步である。

途中振り返れば、ピークから登山口までのフォールラインがやや北側に移動しているために、前嶽や雲谷峠が眼下にあり、田茂范岳や山頂公園駅が左手に見える。遠くには青森湾や青森市街地が広がっている。西方には岩木山が私を励ましているようだ。しばらく登っては振り返り、振り返ってはまた登る。

哀れにも、アオモリトドマツの中には樹氷の重みに耐えきれずに、ぼつくりと幹が折れてしまっている若木もある。残

された部分は、新鮮な木肌が露出し、立ち尽くしたままだ。「スノーモンスタ―」を求めた観光客の知らない、厳しい八甲田山の一面である。

急坂では風雪の影響であろうか、棚の状態になっていいる所があるが、ここを越えるには軽アイゼンを使う程でもなく、スノーシューの爪を雪に食い込ませ、ストックを使い分けてバランスをとり、着実に登って行く。

ピークが近くなると、分布していたアオモリトドマツが消える。やや盛り上がりを見せているのは雪に覆われたハイマツに違いない。ふと上空を見上げれば、太陽の照る青空の中間を白い機影が、音もなく一直線の飛行機雲を後方に従えて北上して行く。錯覚であろうが、ジェット機がロケットのように上昇しているように見える。機影が通り過ぎた後、上空から低く静かに、エンジン音が聞こえてくる。

樹相が変化した辺りから先へは直登である。雪面には薄氷が張っており、スノーシューで充分足場を確保する。体は火照り、腕まくりをする。ジャンパー二枚は既に脱いでザックの中に入れてある。気温は低いが、爽快な気分である。

四

一一時二十九分。ついに赤倉岳の標高一、五二一mのピークに到着。振り返れば、遠くには櫛ヶ峯に代表される南八甲田

連峰、中ほどには溪谷を挟んで緩やかに広がる北八甲田連峰の斜面、眼下には田茂泡岳や前嶽、そしてその遙か後方には青森湾に沿って弧状に広がる青森市街地が一望のもとだ。自分が住んでいる青森市が、何事もない穏やかで平和な街に見える。

他方、ピークから馬蹄形の爆裂火口を振り返ると、所々に黒々とした岩壁が現れているが、あの夏場に見た火山活動による凄まじいばかりの層状の彩りも岩石の積み重なりも、全て真っ白い雪に覆い尽くされ、斜度約五十度の急斜面は田代平高原に向かって下っている。この白雪の絶景に、岩壁の落としていく青い影が不気味に見える。

実は、この日はここまで来れば充分と思っていた。しかし、火口壁の縁に沿った大岳コースの遠くから、小さな人影が下りて来るのを見ると、もつとこの先の赤倉岳山頂まで行ってみたいと思う。今まで田代平高原から仰ぎ見ていた冬の北八甲田の山稜に、今初めて足を踏み入れて立っているのである。ためらうことなく、軽く握り飯を食べて元気をつけ、私が「赤倉大権現」と命名した小さな祠の建つ第二のピークへ向かって出発。

五

火口壁の縁を登っていく雪面には幾人もの歩いた跡があり、

雪庇から転落する恐れは全くない。緩やかに弧を描く斜面の行く先は、どういうわけか雪がこぶ状に付着しているのも興味深い。日常の生活からかけ離れた標高一、五〇〇mを超す山稜に立っていると、先程のピークで見た一人の登山客がゆつくりと下りて来る。大自然の中では、人間の存在がいかに小さいものが改めてよくわかるし、また、何という事もないのになぜか人影を見るとホッとする。それだけにお互いに通りすがりにかわす挨拶も嬉しい。

「赤倉大権現」に向かう途中、南方を望めば、一月に田茂・范岳の麓から神々しく見えた白雪の赤倉岳・井戸岳・八甲田大岳の西側の斜面が眼前を緩やかに下降している。この魂を



揺さぶる八甲田山中にあつて一人たたずみ、雪景色の美に浸っていれば、遠く南八甲田の主峰櫛ヶ峯もまた、静かに私を見守っているかのようだ。

一時四二分。「赤倉大権現」に到着。ここは、第一のピークから三十mほど高い位置にあり、火口壁の南西部の内側全体を見下ろすことができる。斜面は斜度約五十度以上。部分的にはほぼ垂直に近い。火口壁の縁から谷底にかけて落差数百m。何者をも寄せ付けない純白な雪の急斜面が、崩れ落ちた跡もなく滑らかに、陽光に輝きながら谷底に下っている。この壮大なスケールの急斜面を眺めていると、私はその美しさに我を忘れ、言葉では言い表せないほどの感動を覚える。

「赤倉大権現」の小さな祠は、全体が氷雪の塊と化しているだけである。厳冬期、いかに氷点下の強風が吹き荒れていたかがわかる。

ここまで来れば、赤倉岳山頂は目と鼻の先である。一時五四分、火口から離れた標高一、五四八mの赤倉岳山頂に到着。南方には雪に覆われた直径約五百m、深さ約八十mの井戸岳の爆裂火口が、岩壁の先端を黒々と突き出して大口を開けている。その背後には主峰八甲田大岳がどつしりと構え、南東に小岳、高田大岳、雛岳と続く。さらにそれらの後方には赤倉岳、猿倉岳等の南八甲田や遠く十和田湖東方の諸峰へと展望が広がっている。

「ああ、この季節、もう一度雪の赤倉岳に訪れてみたいも

のだ。」この日、初の積雪期の赤倉岳に立つて、そう思う。

六

翌年の四月の初め、南八甲田の猿倉岳登頂を終えた翌日。

私は昨年の赤倉岳での感動が忘れられず、再び赤倉岳に向かう。十時現在の山頂公園駅の天候は晴れ、気温一・二度、風速毎秒七m、南西の風、積雪百七十cm。絶好の登山日和である。周辺の雪質は固雪で、歩行はつぽ足で充分だ。

十時三十分、同駅出発。昼前には一、五二一mのピークに到着。心地よい汗をかき、壮大な展望を楽しんだのは、昨年の三月と変わらないが、ここからさらに「赤倉大権現」に達してからの眺めには幾分変化が現れている。それは、四月ともなれば黄砂の影響もあったのか、急斜面の雪がやや淡い黄土色気味で、幾本もの縦の筋模様が谷底に向かって付いていることである。純白を失っているのは惜しまれるが、急斜面のスケールの大きさは見応えがある。また、一、五二一mのピークの直下は、一部が抉られたような凹みになっていて、そこに陽光があたって鈍い輝きを見せている。

「赤倉大権現」は、風下にあたる東側の雪解けが進んで小屋根が現れている。傍に立てかけられた短い旗立ての竿には、金色の旗玉がついており、光を反射して眩しい。

私は、ここで昼食の握り飯を食べていると、赤倉岳山頂側

から三人の登山客が現れる。一人は神奈川から来た男性で、宮様ルートを経て酸ヶ湯に下りるのだという。もう一組は二人の女性で、「展望が素晴らしい。」と言って、袴腰岳や恐山の位置を尋ねてくるので、にわか案内人となって解説することになったが、他県の方に地元を自慢するのは気持ちがいい。

ざっと見て、距離にして五百mはある火口壁の縁を、三人の登山客が小さい点となって下りて行く。その途中に、一人の男性スキーヤーがストックを手にしながら周辺を眺めて立っている。何気ない光景である。それから十分ほど経ち、彼はストックとザックを置いたまま、手前に移動して谷底を覗き始める。そのうちに、いつの間にかもう一人のスノーボーダーも現れて二人組となる。私はこの時点では二人が何をしようとしているのか、気にも留めていなかった。

しかし、せっかくの機会でもあり、昨年三月と同様、赤倉岳山頂で時を過ぎて帰ってきた時、二人は湾曲した火口壁の上に、まだいる。私はこの時初めて、彼らは何をしているのだろうと思った。最初に彼らを何気なく目撃してから、これこれ三十数分が経っているのである。何か意を決しながら、状態とも受け取られ、もしかして奈落の底を確認しながら、自殺するのではないかと思った。あの垂直にも似た急斜面を二人が共々転落していく様子を想像する。「まさか」とも思う。私は、下山の身支度を済ませ、何気ない顔をして下りて行

くと、向こうから二人の笑い声が聞こえてくる。明らかに自殺ではない。スキーヤーは男性、スノーボーダーは女性で、男性は両ストックを手にし、女性は屈んでスノーボードの調整をしている。その横を、私は挨拶をして通って行くと、男性から返事が戻ってくる。「何をしているのですか。」とは聞き返さなかったが、二人揃って断崖の絶景を楽しんでいる風には到底思えない。

通り過ぎて間もなく、背後から男性の大きな声でした。

「えっ!」

何事かと思つて振り返つた。すると彼は、火口壁の縁から絶壁の直下に向かつて滑り出したではないか。

「滑降だ!」

私は、恐怖にも近いあの赤倉岳の急斜面を事もあろうに滑降するなどという、思つてもみない劇的な展開に心を奪われてしまった。

斜面は、最初は緩やかであるが、いきなり斜度三十度から五十度に変化する。彼は斜滑降で陽光に照らされた斜面を下って行くと、待ち受けている急斜面で切り替えをして第一の左ターン。上体は低く構え、腰はやや山側に傾き、膝は深く曲げ、後方に雪煙を上げながら第二の右ターン。完全な大回転である。速度は落ちず、ガラガラと固い雪の上を滑る音が聞こえてくる。そして第三の左ターン。谷底からは、

「雪、固い。」

と叫ぶ声がある。明らかに急斜面はアイスバーンだ。そして第四の右ターン。もう彼の姿は小さな点となり、岩陰に隠れてしまった。滑降は、目測にして約二百mの距離のところまで一旦停止したと思われる。それは、後に残された女性が無線でやりとりしていることからわかる。そこで初めて、私はあの二人が三十数分も火口壁の縁に立ち止まっていた意味を理解した。誰も滑降した跡もない、それだけに急斜面でもあるこの赤倉岳の火口壁をいかに滑るか、コースの読みと度胸の調整をしていたに違いない。

しかし、しばらく後に残された女性のスノーボーダーは谷底に向かつて立つたままだ。一見して緊張しているのが伝わってくる。そして私も、ただその一点の動きに注目する。

服装は黄土色と空色のウェア。頭には黒いヘルメットにゴーグル。背中には黒いザック。紅い手袋。完全装備の彼女が叫ぶ。

「行きまーす。」

谷底のスキーヤーに宣言したその声は、同時に意を決して自らを奮い立たせているかのようだ。

一三時四〇分。スタート。上体を谷底に向けてゆつくりと「くの字」に曲げた後、ややコースを浅くとつて、背を谷に向け、上体を少し起こす。向かう斜面には黒々とした絶壁がギザギザの青い影を落としている。

「あっ。」

一瞬、私は固唾を呑んだ。

第一の左ターンで、彼女は切り替えができず、腰と両手が急斜面についてしまった。上体はすっかり谷底に向いている。ボードは斜面に対して横向きではあるが、ブレーキが全く効かず、体はぐんぐんと加速度をつけて滑り落ちていく。その先で待ち受けているのは、斜度五十度は見込まれる急斜面である。斜滑降ができない状態で必死にスピードを抑えようとしても、背中が急斜面にいたまま益々落ちていく。そして遂に体全体が前のめりに転がり出し、ボードの黒い底が天を向き、右腕も頭も谷底を向き、救いを求めているかのようにゴグルも天を向くのもつかの間、完全に制動を失った彼女は、急斜面に翻弄され続け、ただただ転落と滑落を続けていくばかりである。スキーヤーが第三の左ターンをした手前あたりまで落ちていくが、それでもまだ止まらない。彼女は腹ばいになったり、仰向けになってボードの黒い底を上にしたりして、なお落ちていく。もし途中で岩塊が露出していたならば、激突と負傷は避けられなかったであろう。

そして再びボードを谷に対して斜め横向きにした時、ようやく滑落は収まった。谷底で小さな点となった彼女は立ち上がる事が出来た。時刻は一三時四一分。恐怖の一分間であった。転落と滑落の距離は、目測にして二百m以上。彼女は大回りをしながら右手の林の陰に消えていった。

当初火口壁の縁に二人が合流した時は、互いに赤倉岳を滑

降制覇する気持ちを調整していたと思われるが、その後、彼女は再び合流することもなく、別方向に向かつて去って行った。私にはその意味がわかるはずもないし、まして、彼女が滑降を失敗した一件で無傷であったのかどうかも知る由もない。後に残るのは、ただ、何事もなかったかのように静まり返っている赤倉岳の急斜面である。

私は、その後一、五二一mの赤倉岳第一のピークまで下って、スキーヤーが滑降コースの下検分をした跡が断崖の縁の少しばかり谷底側にまでついていたのを見る。彼は引き返していたので事なきを得たが、もし、そのまま蛮勇を振るって進んでいたなら、斜度七十度が待ち受けていたであろう。

注一 参考文献 「青森県史 自然編 地学」

「日曜の地学」 青森県地学教育研究会

注二 国土地理院の地形図によると、「田茂菴岳」とは、電波塔の建つ標高一三二六mのピークから約六百m南東に位置する標高一三二四mのピークを表示しているため、本稿ではそれに従って記述した。

注三 八甲田山の標高は、平成三十年二月一日、国土地理院発行の地形図をもとにした。

リヤカーを引くアイス売り

長利冬道

私が幼き頃

リヤカーを引いて

アイスを売る光景を

よく目にした

しかし いまは あまり見かけない

カランカランアイス

またはチリンチリンアイスと呼ばれている

このアイスの細かな氷粒の清涼感がよい

ほのかな独特の甘さが舌をくすぐる

弘前公園や岩木山神社あたりに

みかけると 思わず食べたくなる

昔は百円だったこのアイスも

今は百五十円

でもかなり安い

この庶民の味を大切にして欲しい

売り子の高齢化や

この業者の減少など

様々な問題を抱えているが

この津軽の文化が

未永く続くことを期待している

耳を澄ますと

遠くの方から

「カランカラン」「チリンチリン」と

鐘の音が聴こえるような気がする……

巫女伝説

郷 よしゆき

私は遠い光と闇に塗れた 二十一世紀のこの
国で 眠っている縄文の巫女 今日もまた一
万年の季節を巡りながら この国で暮らす心
優しき人々のために 顔に原色の入墨を施し
私達の豊饒な物語を 語り継いでゆくのです

私は遠い光と闇に塗れた 二十一世紀のこの
国で 眠っている伝説の巫女 明日もまた一
万年の季節を巡りながら 誕生と死を繰り返
す心優しき人々のために 古代の呪文を唱え
て 私達の鎮魂と再生の祈りを捧げるのです

春の香り

對馬洋子

私の好きなものは

柔らかな春の陽射し

耳元を過ぎていく やさしい風

たくさんのお咲き開く 黄色い花々

福寿草やたんぽぽ・菜の花の

きいろい色は春からの贈り物

時折の名残雪が舞い散る中にも

春はすべての生命が芽吹きだす

生命の芽吹き喜び

そして万物の鼓動

いとしさのときめきと想いを語れる喜び

そして多くの幸せたちが戯れている

陽射しがやさしい

長い休日

對馬洋子

長い休日の前日に

何故だか昔が懐かしい気持ちになった

幼いころ 私が住んでいた町に来た

うらさびれた町には

暖かい日差しが眩しく降り注いでいる

幾日かが過ぎ・

この頃は 夕暮れ時の黄昏に春の温みを感じている

この地に こんなにも情に充ちた夕暮れがあったのか

これまでの雑踏の中の昔の数々が巡るめぐ

定義づけの面倒な平和があちこちに芽吹いては

何者かが期待を生むような世界を思い出す

休日も終わり現実の世界に戻る

今日もまた日差しが冷たく降り注いでいる

紫陽花

對馬洋子

雨上がりに

泣きぬれた紫陽花

陽射しを受けて

眩し気に揺れている

風に揺れながら色を変え

ひとすじの雫に濡れて咲く紫陽花

彩りを変え 寂しさに揺れている

私の心も紫陽花のよう

貴方への想いに揺れている

揺れながら色を変え

貴方を想って揺れて咲く

記憶の片隅から (16)

江 渡 浩三郎

45 国を壊すやから

その頭は^{むち}大国でありながら

1ミリの国土でもわがものにする

戦争という手をつかって

今では皇帝気取りだ

不幸にも又 壊すやが現れた

相手国の死者数は5万3千人を超え

そのうち子どもは1万6千人だという

この人命をもてあそぶ頭は誰だ^{むち}

相手国が壊滅しない限り

戦闘は止めないと豪語する
神も仏もない蛮国か

逃げ場がなく食料も買えないという

これでは子どもたちが救われない

この地上に救える人が本当にいないのか

(2025・6・29)

46 私の犬物語

私は 子どもの頃から犬が好きだった

小学二年生の時 小犬をもらった

が小犬は食べすぎて不運にも死んだ

私は 犬のお墓をつくってとむらった

そんな私を見ていた祖父が

自分の飼った犬について語りだした

名前を太郎とつけ

家族同様の扱いだったという

漁師の祖父が出掛ける際は常に同行

太郎は おのずと海を知るようになった

太郎の姿が見えない時は海だった

その日 姿が見えないので海へ行ったら

案の定船の舳先の下で忘れ物の番をしていた

太郎は まさしく家族の一員だった

47 「人物点描」の教え

私は 自分の教員生活を振り返ると

先輩教師の指導に随分助けられた

厳しい言葉にも納得できた

駆け出し者は実に合わせだった

ところがいつもいいことばかりではない

これでいいのかと自問自答のくりかえし

その頃 ふとしたことから石川達三の

「人物点描」を手にした

その中に「植物でも動物でも

成長の時期というものがある

その定められた時期に成長する……」

この言葉に何十倍何百倍もの

力を得ることが出来た

昭和四十七年の八月のことであった

冬の陽が落ちて
ゆく

田邊 亨

岩木の向ふにいま冬の陽が落ちてゆくわが生命いのちを犒ねむらふごとく
 大空から降る雪を仰あおげば我は心が澄んでゆくのを覚おぼゆ
 雲海うんかいの八甲田山の白雲は浮うき潮吹しほくくじらのごとし
 野の菜なの花摘つめばほのかにあたたかし日ごとに強まる春はるの陽射ひざしに
 窓を開あけ空を仰あおいで簡単な田舎いなか暮らしの男おとこを生きる

私の犬

向山 敦子

校庭でウロウロしてた犬連れて十キロの道よたよた帰宅
 散歩だよピョンと反応する犬といつしかウオーク朝夕晩と
 あと少しもう少しだけと犬が言う夜十一時補導されたり
 ふと思う六キロ進む足力これって確かにいいんじゃないの
 歩くのは苦勞くろうじゃないし好きな方私の犬が空から見てる

四季を詠む

畑山房光

鎌を持ちタンポポ切らんと手を出せば蝶が寄り来てダメと言うがに
小指にも満たない小草も花咲かせ凜として立つ石の間まに
朝カッコー夜は蛙の大合唱満天の星に囲まれ眠る
晩秋の小雨に持てるビニールの傘に小さな音符が踊る
もみじ葉を浮かべし道の水たまり初氷の朝万華鏡となる

四季をまとひて

小屋畑謙一

磯辺にて待ち居し我らオレンジの初日に染まりまぶしく笑う
朝四時に発つてきたとふ若者の苗売る声は弾すがんで清し
戦止やめ共存するは幻か窓ごしに見る向日葵に問ふ
カリカリと皮むく音も心地好く柿干すハウス香りほのかに
小雪飛ぶ魚市場前の岸壁に鷗ら風と真向ひて立つ

白球

関柳人

熱戦の高校野球タイプブレイク想定外に固唾を飲みぬ
ストレート見せておいてのスライダー投手術も驚異の進化
チャンスだよ一か八かのスリーバント打球不運にラインの外へ
故郷ではテレビ応援熱気帯び一球一打歓声あがる
バス連ね遠路はるばる応援団からす声援青春はじけ

戦後八〇年
丸い飯台

田中智子

鳴きかわす早起き郭公森のこえ長閑に明けゆく里山の春

水口に赤飯供えて折りおり協同作業ありがたきかな

コロコロと丸い飯台囲み居り茶碗に嬉し新米を盛る

自給自足茄子の香の紫はキシキシ鳴りて食卓に満つ

“新聞の写真”瓦礫なか建つ母校 校訓・校歌みんなで歌う

―皇紀二六八五年―

今夏「入院」

五戸とし子

救急車呼ぶ我が指に迷い無し一一九のタッチ素早く

看護師の「今日来て正解」に安堵する夜半カテーテル検査始まる

ICUより個室へ移動「急性心筋梗塞」を告ぐ若き医師

八甲田の嶺を眺めて自転車漕ぎりハビリ有酸素運動

明日は退院カロリー塩分糖質の注意も娘と並び聴く

終戦後

ネプタ去り威勢よろしき虫の声あの暑い夏八月よさよなら
ふるさとの車力村での買い物は子どもの仕事通い帳持つて
終戦後「毒でないものは食べられる」父の言ウコギ、ハコベ、クローバ
食べた

三 上 瑛 子

すばらしい祖母の手料理納豆も自家製でした元気に遊んだ
ガザの子のガラ／＼の姿泣けてくる為政者サマを無様ふだまと思う

俳句

萩むらに

菊池信子

萩むらに夫の声きく夜半かな
生きてれば指折る先の秋あかね
秋晴れや撫でればぬくき夫の墓
秋風やランプの宿の影ぼうし
山百合の香り豊かに寺の門

桜桃忌

藤田則昭

冷奴今日も一日を終わりけり
百日紅古刹にありて紅ほのか
紫陽花に傘の雨音似合いけり
掛軸の裾の綻び桜桃忌
あれそれで会話成り立ちうらかに

奥入瀬

川上洋雲

初日の出

宮内香宝

奥入瀬の白波立てる涅槃西
みはるかす青田の波の豊かなり
空見上げ角を突き出すかたつむり
弁当は娘の手作り夏座敷
寒気来る声かけ共に踏み出せり

百歳のことばは深し初日の出
余生なる息を丸めてしやぼん玉
姫塚にひびく龍笛つつじ燃ゆ
美術館出て新緑の真下ゆく
漬樽のずしりと重き冬来る

蓮浄土

土田紫翠

本丸の高きより観る蓮浄土
掘り当てし薄紅色に茗荷の子
玉葱を刻みし母や背を丸く
夕張の名を冠したるメロン買ふ
初茄子朝市に求め夕食に

夏終わる

稲見則彦

海

嗟峨寛之

この雪を新幹線で送ろうか

ラムネ玉カチンと割れて夏終わる

母ちゃんの口癖「だから言ったでしょ」

配牌は国士無双を指している

理屈こねこねこねこねて深い秋

ふるさとの海も青森の海も好き

荒れた海私の心そのまんま

海は海空とは違う青の顔

海峡を渡らずここで立ち止まり

海の上白一点の渡り鳥

追懐

辻口 風来坊

肝に銘こればんず時敏なれと校歌謳うたう

久渡寺へのもはや伝説炊事登山

りんご台風めげずともえの公開研

三つのSUNねぶたも祝う半世紀

ドラえもん校歌はじける大成校

あいさつ

佐藤 光 則

あいさつは朝一番の合い言葉

あいさつは朝一番の贈りもの

あいさつは連帯創るエネルギー

あいさつは心の安らぎ連れてくる

あいさつは心のきずな強くする

逝きたくないの呟き (後編)

小山田 良 三・作

一戸 義規・画

大手の酒店は、すぐ近く、五分も歩けばあったのである。

……を過ぎると、さらさら凍り雪が道の両脇に盛られていく。次第に湿気を含んで融けかかってくると、人々はスコップなどを持って除雪をしていく。



二月になった。どか雪もまだ、時としてやってくるが、消えるのが早まってきているから、人々が作業で交わす会話は光が宿って明るくのびやかになっている。希望も交じっていい表情でなされる。

「これに雨が来れば、道はさっぱりするんだが」

光一の毎日は、乱雑な家で、残された日々疑問やらを解決する苦勞をあれこれ工夫して過ぎてゆく。市にある勉強サークルの二つに加入して、己をさらさらで磨いて逝こうと邪念に惑わされたりする。

老人クラブでは事務局から請われて、副会長、会長をこなして、二十年は超えた。威張るとか全然していない。

詩の創作グループには誘われて加入し、十年は経過した。駄作を年に四回発表している。合評会はなされていないが、忘れたとか届けなかったはない。交代で辞退した役職とか、あと一つあったが、いいか。

光一は、ノート日記帳に、その日何時に起きたかから、一日の経過を時間を入れて記している。来客の頃合いと電話の内容、新聞のこと、食事、天候、銀行から生活費の引き出しと支払い、お酒やビールやたばこを買ったことや、知人に年に何回かの電話をしたこと、切り抜きを貼ったこと、体操をしたことなどを就寝までメモ程度に書いていく。それで最後に落ち込んできた内容を知って、一日生きたとなる。

「これが人生なのか、生きたことなのか」

「人生は、ねらいはどうなるのか」

「どこへ進むのか、向かっているのか」

「死ねば死ぬが、どこへ行くのか」

「ほんとに死ねばどこへ行くことになるのか？」

こんなことを自問自答して酒を呑んでいる。それから明日の予定を確認して湯たんぼを二つ入れて床に就く。最近は特に、どこへ逝くのが尾を引く。霊界とか宗教での逝くではなく、正直なところ、どこへ行くかだ。

お寺とか信仰のことは小説で読んだ程度である。勉強不足もあるが、日常生活になされている程度のこととは否定はしない。

その日も冬を越しゆく緑に感嘆する。だから、そんな木々の枝を切つて、いくつか鉢に挿して玄関に置いた。水をやつたり日当りに置いたりしている。

実感しているとすぐに夕刻になる。時に浸食され埋没されている。別の方角からは、生涯で一度しか観られないであろう番組があつて、さらに狂わせる。今朝の九時頃のような気温の日には、朝食が先か除雪が先かとなり、どっちにしても全てに波及する。配達や集金も来るし、己の家とどこかの雪かきも、この老体では疲労しやすい。

「やらなければいいのに。時間がほしいんだろう、やめたら？」

と嘯きをするが、それは光一の心底に落ちない。そこは、

齡の領域のこと。息切れ呼吸なんかして、お湯を沸かしてコーヒーを入れる。

さつき食べたばかりだから、昼食は欲しくない、二回目の新聞を見ようとしたら、雨も雪も降らないどんよりが登志の記憶を呼んできた。正確ではないが、施設に七年以上は通所したろう。退職後、買い物は広告ばかり見るようになり、けしかけても、椅子にばかり座っていた。散歩したのは今まで一度か二度だ。下半身、足、筋力、などのことを口説いたがどこ吹く風であつた。今度はパーキンソン病だとも言う、呆れてならない三百近い難病の一つを言っておかしくてしょうがない。それからは「筋力がパーになつて損失してなつた病氣」だという表現で何度か論じたがためで、それからは黙している。病氣は当人の怠けが授けるものなのか。節制もなくて、その延長で病院の観察室という施設へ入所した。以来年越しも正月も戻れず、コロナの流行で数日の帰宅もできなかった。不自由になつて不自由なことの辛さや切なさを飼い馴らして、さらに心身が変になつていだろう。あ、でも不自由さとか辛さなりを受け止め、怠けない工夫とか努力を素直に受け入れなければだめなのに、だ。人としてそういう取り組みを正当としなければ、一種の罰となり、大切なものを萎縮させ、はやく逝くことになつていくぞ。登志……：そうではないか。まだ、普通にはできる。

「光一よ。そうは思わないか」

「登志よ、もう手遅れかもしれないが、そう思わないか」

常識的になるが、鍛えるって、笑われようが卑下されようが、いいんではないか。改める勇氣、採り入れる勇氣、これは薬剤ではない、心への食物で心への栄養だろう。戻れない別居で、面会もできないならば、空念仏だ。心配は心配だが、どちらも諦めの様相だ。生きていくには、なんだこりゃ、サーカスの曲芸師だな。面会でできなくてもしよげてはいけない、そういう事象をしっかりと受け止めることが大切で、思考の作用で、登志よ登志よ、きみはいま利口になつて変身したろう。……そうして逝けることは素晴らしいことだ。

自分は混乱はなく正常と考える光一は、焦りの迷いのような残された時間に、内心の狼狽を呈している。お金の工面のことではないから、その分だけ落ち着いて、価値なり、生きる、を問い続ける。

「いけない、光一らしくないぞ。星になれ、いやいや毎日外を眺めろ。美しいものがやがて訪れる、それを眺めて深呼吸をして転じる。時には登志やみんなのことを思い、宮沢賢治のでくの坊はすごいし感嘆するが、なつてはいけないし、考えろ考えろ、長生きしろ、悪事は予防しろ。今、テレビで、被害者が巧妙な手口で詐欺集団の要求から借金を背負わされた番組があった。一般人の何十倍もお金を騙しとられたという。田舎と都会では環境が違うが、基本を覚えておけ。生涯で善人だと見せつけていた者が、マッパであるんだ。この夕

刻、俺はどこを覗いている？どこに落ち込んでばたばたしているのか、このてっぺんをナニモノカニ汚染され支配されているのか、バカになつてている？普通のこれまでに戻ればいい、戻れ、己の光一よ。とにかく、夕食をすませ、とにかく二階で寝ることだ。でも胃でも切られたような痛みが噴出してくる。

もう胸奥に隠して、鍵をかけておいた数百万円の思い出が再び燃え上がる。この彼は離婚して再婚していた。二人の子供にも恵まれてからの破綻ということだった。

「お金を貸してくれ、これが契約書というか証書」

それからというもの、百万円から六、七十万円が数回にもなつていく。でも、友人の少ない光一は、友のためと言い聞かせては都合をつけ、デパートの広場とか、銀行の陰で手渡した。その後のその後、十年か、これが境になるそうだが、不便な路のない凹凸山の証書を何回か送付してきた。それを受けても雑木の山林はいらぬ、第一そこへは行けない、不便というより用もないし遠いし馴染まない。そういう理由を述べておいた。お歳暮は二度ほどりんごを貰ったが、その後姿を見せず、彼とは電話も通じない。

「お金は貸すものではない、そういうものだよ」

いつの時代のころか、耳にした言葉だ。直接身内からではなく、風紋のように飛び込んできていた。それを光一は、心に刻んだはずだった。親戚の氏と同じだった彼。その裏で彼

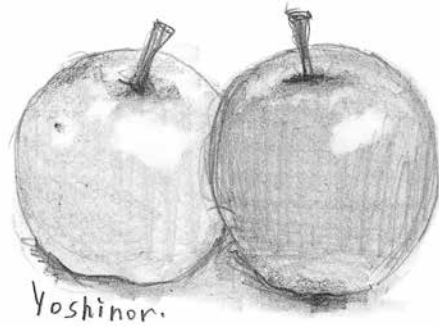
は、毎日、囲碁とか将棋に明け暮れて余生を過ごしているいま……明日明日に逝く時に来ている。

「簡単にお金を貸すものではない。一升代はあげていい。どんなに甘い話でも貸すべきではない。憎まれても脅されても、住宅地とか家になるお金でも貸すものではない。騙されてその先は盗まれたと同じになる。だったら、困っていなかったら、

書籍の一冊でも出版して、別れて逝くの挨拶状にするがいい。……カネカスナ、カスナだ。食べて洗って寝る」

光一は用心していたのだが、ここでもああととなる。登志と同じだ。

翌日になる。三度の食事になる。どう過ごしているのか登志は？ 繰り返しだが、どうなっても食べることに体を動かして深呼吸すること、最低続行しなければならぬ。病院の



施設に入所すれば、特に病院の紹介で回されると、出られないという。病人にとつてのナントカだ。光一は、だらしのない己をも自覚しているが、面会もできないから、工夫して届けた物がある。その一つのことを想起する。まだ忙しくなかつたから、大きな用紙に大きな文字で読みやすいようにした。秋頃か。大きな文字をマジックで書いた。

☆登志へ

◎またくるよ。

次は中国の話聞かせて 諒慈（長男）

◎食べて食べて。

笑顔で楽しくね。東京の中山さんから私に賀茂鶴「大吟

峰」を辞世本のお礼として。（光一）

◎お大事にしてください 辰美（長女の婿）

◎「咲良」が会いにくるからね 慶子（長女）

これに好物を添えて、登志の看護担当者に頼んだ。この数行が、べしゃんこの登志を鼓舞したか。コマーシャルのようだが、実は相当に励ましたはずだ。光一だつてやるだろう。

だから、仮ならぬ生活でも車椅子でも、望みなり微かなものを味わっているはずだ。見舞いに来て揃ったとき書かせた。

また一日が過ぎた。新聞を読めない、テレビを観られない、会話をできない、好物を食べられない、では可哀想。為せばいいことをしないで、その時を待つのみなんて、悪いが仮死

と言われよう。

「でも仮死は呼吸するのかな。息を引き取るときには可憐あたら身命しんみちうをもう説けない。至難、みんな薄れている、穢土えいどから浄土への女坂だ。生きてきての福因から、なんかの禍因があったことになるのか、それは高齢ということか、季節よ、いろいろな枝葉よ助けてくれ、光よ照らしてくれ、こうなるのが人生の深遠なる底無しちぞなしの淵なのか。緑よ、いい空気で包んでくれ。庭の木々よ」

また次の日になった。昨日は俺も変になつていた。俺は無欲むよくだったし苦難に遭遇しなかつたから、それを与えているものもろもろよ、この光一に、苦しめる諸々を転化していい。でもやはり生死の八鬼がまわつてくる。どのように俺には死を齋たくらすのだろう。液化して気化するか。

「……………逝くとき、苦しまないで、眠るように息を引き取つた」

どこかでの通夜とか葬儀で身内の人から聞かされることだ。登志は一言で纏まとめるなら、賢かつた。女友達は優しい人だつたと言つてくれていた。沈着とも。

光一は考え続ける。光を受け、浅い緑から深くなりやがて深紅となつて心を慰める木々の葉々。登志も、同様に受け止め感謝して生きて……………だろう。

「緑があれば言うことなし」

だから、雪が降つて積もつて、遅かつたが、小さな鉢に名

は知らないが枝を四、五本折つてきて雪を退けて土を入れ、軒下の枯れ葉を入れて挿した。日に何度も見る。

責任感が強かつた光一は、高齢でも集金の通知等には、迷惑をかけないようにとすぐに納入した。何度も訪問してもらつては申し訳がない。やがて逝く身に、納めないの汚名は被せたくはない。そういう身奇麗みきれで逝きたい。登志だつて同じはずだ。さあいつでも来いとなつていく。

その「来い」は、やれやれ皮肉となつて葬儀とかへの来いであつた。親しい中でも特に親切にしてもらつた方の、新聞のお悔やみ欄に驚いた。その心友夫妻とこちら二人で他県や近隣の山岳にしばしば登山して、時には山小屋に宿泊をしたりした。旦那は先に仏様になつたが、元気で明るくまだ聡明さの衰えない奥様が亡くなつた。その日、通夜あるいは葬儀のことを確認しようと電話を入れたが通じない。この市を入れると東方へ三つ目の町だ。受話器に縋すがる。通じない、ついに局の説明は現在使われておりません、である。その線の繰り返しの応答。中央紙だから逝つた人の氏名と住所だけ。いない証拠は、このあと続く弔い関係で知る。



昼食後、光一は着替への喪服や洗面具を積み込んだ。二つ先の町だからけつこう遠いが、御霊前を包んで出発した。今日がそれだつたら、取り返しがつかない。国道に出るまでは雪凍の凹凸が続く。途中で温泉に入浴したのは、万が一だつ

たなら、この髷面は失礼千万で出掛けた意味が消失する。いらないことに、ここで長靴を小さい物に間違えられた。積んである革靴にして、再びその町へとハンドルを握る。

安全運転は心掛けている。彼方の連なる丘まで、雪原だ。走る走る。やっと町の中を通過する。そうして、旧家というのだろう構えの前に到着した。人影なし。森閑として物音もしない。光一は玄関まで進んで、掲示されている張り紙をみる。戸は頑丈でカタとも一ミリも動じない。明日の通夜と会場が分かった。でもせめて、お悔やみは述べて帰りたい。明日午後の五時からとなっているから、欠席にはならずほつとする。光一は、遠かったと思いつながら、前方に最善の注意を払って帰路についた。その間、電話が通じないことの原因が分かるような気がした。

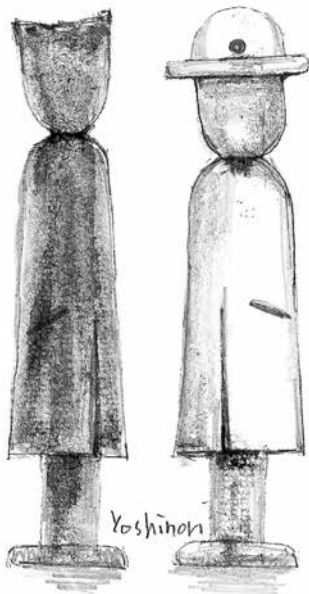
翌日、二時間早く車に乗る。凍った路面の凹凸と安全運転に心掛けるためだ。到着して地元中学校のまわりを見たり、役場の中に入った。それでも早かったから、列車の通過する様を見たくなり、転ばないように踏み切りまで歩いた。けっこう人が乗っていて、旅情と昔の懐かしい郷愁を味わった。列車は子供の頃の憧れでもあった。

「彼方から、特有の轟音を響かせて、やがて彼方へ去って行った」

山陰に消えてから、多くの何かなるイメージを与えた。まだ一時間はある。こういう時はだらしなく空き家の陰に急ぐ。

おしつこが近くなつて大変だ。後で、食事もコーヒーも予定がないから、ゆっくり歩いて会場へ向かった。すると、遺族を乗せたバスが来た。光一は間をとって中に入る。知人で、婦人の遺影が飾られていた。ややかにやかな写真だ。すべてが短縮されて、本人を前にしていると同じだ。少し脇には小さいが、お二人を山頂で写したものがある。光一は、登志を呼びたかった。三人で四人で話したくなる。でも、別れの場となっている、見詰めていると、深い寂しさとなる。

悔しさをもぐもぐしてから、またいつか会いましょう、待ってね、人々を私たちを幸せにしてくれてありがとう、



ここから帰れない気持ちだが、ありがとう、と内言を述べる。車では二分で百キロになる、これが別れの一つで現世との別れだ、そつと目に溢れてくるものを手で拭いた。遺族にお礼を述べて、光一は会場を出た。

明日はまたある。冬の遠乗りは危険で苦手だ、けれどもこれこそ欠かせない。登志の妹、妹の旦那が亡くなり、通夜となり葬儀となる。子供らは大人の苦しみと辛さは解らない、世を生き抜いて、艱難辛苦を凌駕しないと解らないだろう。けれども息子らを会場に連れてきている。

光一は、詩を詠みたくなっている。永訣の詩だったか。さうにいい詩がないか。短歌でもいい。詠んで共に慰め悲しみたい。経典などは複雑な文言で編みだされているのだが、深刻に信者のように読んだことはない。暇がないは言い逃れだ。けど、一般の人々はみんなそうではないだろうか。しきたりに従うしかない。一番の親族でもそうなのだ。

「死ぬ」

「生きてきて死ぬ」

「死んで去っていく」

「どうなつてどこへいく」

「本当にどこへいく」

「逝くところは、いくところは、いくところは」

翌日の今頃は、冬の真つ只中だ。それでも一日一日が、心情の薄れてきた今でも、情けないほど大事に感じられる。常

緑樹ばかりでなく沢山の緑よ、早く蘇つてきておくれ、酒とだけいるのも妙だ。施設で、登志も同様に至愚を払拭しようとしているだろうか。二人とも全てで死色をカバーしているが、正気はまあ、とろとろとろとして、自然淘汰に入っている。

光一は、氣力を絞る。登志よ、少しでもながく一日一日を過ごせよ。無との境の意味はどう考えよう、それが慰めだ。呼吸して食べて、一日でもやはり一時間でも一分でも生き永らえることだ、それだよ、遠くの子らもそれを望んでいるのだ。

風はある今日だ、太陽の感じで地上を照らしている。光一はそんな心情でも乱雑な居間を見回す。

「知っているとおり、だから俺は、ながら体操を続けてきたし、今日これからも工夫してやるよ」

一人でそう声にした。動かさず、呆然と座つてばかりでは、迎えに迎えられると逝くことになるぞ、だから表を作つて実行すると、赤まるを記入してきた。確実に八十七歳には向かっている。自賛じゃないが、継続している。寝る前になるのは、忙しい日もやっているからだ。

……◇腹筋はおしっこできなくなってきた、◇首の後ろを揉む、◇握力、◇体ひねり腹部の前後上下、◇しゃがむ立つ三十回を二回する、◇これが一番辛い、◇つま先立ち、◇腹の引つ込める出す、◇手の閉じ開き、◇足首をのばす戻すは

二十回、◇トイレへのいろいろ、◇温泉での部分体操などは生き残った項目だ。この数項目でも、毎日の続行となると大変なんだ。

光一は忍び笑いから高笑いになった。俺は、無位無官でもいい、あつてもいいが、拘らないできている。寧ろこの表での履行が、必要で大変なんだ。気力のほかに家事とか外の仕事とかたまのワープロ打ちとかもと、妨げである。いずれにしても己に拘ってくる間いだ。さらに怠けてではないが、ポツクリが来るだろう。暇というかタイムングを見いだしながら体操をしよう。また迷う、己を慰める液体なる水分もある。でもほらほら風が収まつてきて晴れ渡つてきて、雪国の幸せな外で、幸せな空気を一杯吸う、その後によれる体動かしだと、駄目タバコをくわえての外に出る。やがて、すべてが静かになる。光一は声を出す。

「いいなあ、静かできれいで、生きている喜びを悟らせる」
一体、後期高齢者という年寄り、どこへ向かつていくのかなとなる。死ではなくどこへだろう、死は省きたい、考える、どこへどうなつていくのだろう、無理で滑稽な考えだろうが。生きていたいし生き続けたいは、馬鹿な欲望だろうか。何かないか、不動産とかの処分もどうでもいいが、無為でも生きてまだどこへ向かつているのか、寿命なる命の燃焼へ向かつている、……ない何かの目的なりねらいへか、繰り返しても回答はない。ないが生きたい。みんなそうだ。人道を

破つて人を殺しては絶対にいけない、家族のいろんなメモを見よ、悲痛な叫びを聞け。働いて、心と体との芯から生きたいのだ。

「殺すつもりはなかったは、言い逃れだ、いいか」

俺は答えのない問いをしている。なんの知識もない。無位無官でまあとするが、道のない道を進んでいる。痕跡となる業績の取材とか印刷物も氏名もない。今年の冬は、通夜とか葬式の確かめとかで五日連続となった。故人をミオクルのが生きる道なのか、俺はそれが解らない。勿論見送るも大切でなければならぬ。

「どこへいくのか、どこへどのようにいくのか」

親しかつた知人にも無視され阻害され、貶められてもいるが、生きて生きていたい。考えるとそれは、実根の命は繋いできた大義だ。繋いできたから、殺害は絶対にいけない。

「ひたすらに今は、どこへ逝くかだ」

あれかも、各家庭には墓地がある、彼岸とか中日とかお盆では、そこへみんなが集まり、祈りを捧げる、それか。そこでは己の墓碑銘がいつか刻まれる。己の氏名が確りと刻まれる。何かなければ永久にそれは消えない。現在は自由の発想で任されているようだが、墓石に刻まれる。

「それだ、そこへだ。急がないで逝く先へは、それまで生きる」

墓石へ刻まれるところへ向かつている、と光一は思った。

その後明るく笑った。違いは勝手に考えてくれ。

◆
三月になつていた。誰かが来る度に「臭い、臭い」といわれる。親戚やら、子らが、光一に注文をつけてきた。何だと
思うか。

「紙パンツを買って来るから、はいて」

光一は転げまわった。笑つてなかなか治まらなかつた。

「皆がはいているんだからね、買ってくるから」

所業の悪さがしてきたから、解つたといつてその晩から身につける。水分を吸収するために紙の厚さで、変だ。水分を飲むのもいけないとその時は諦める。

春を迎える市や町や村の行事が報じられてきた。少しずつ暖かくなつてきたが、俺は、紙パンツに向かつて生きていたのかと、いつもの苦笑いを時折する。カレンダーを見たり外を眺める。光を受けていたい。生きていたい、いつまでも死にたくない、を微笑みながら呟いている。

「せめて登志が戻つて、二週間くらい生活してからでないか
……………逝ぎたくない…」

(了)

荒れ地の中から

長内 勝・作

逢坂 清悦・画

1

川浪校長先生が転任して来たのは、その年の春のことであつた。大宮中学校は、川浪校長にとつて最後の勤務校である。

三月まで、県庁所在地のA市に隣接する町のM中学校に、川浪校長は他管交流として赴任していた。ホタテの養殖で潤う、港の綺麗な町だったという。生徒も穏やかで、のんびりとした三年間を過ごしたそう。

その川浪校長が、最後の学校として赴任したのが、県内でも有名な教育困難校である大宮中学校であつた。他管交流で苦労されたであろうに、最後がこんな荒れた学校だなんて。人事異動というものは分からないものだ。わたしは、そのように感じていた。

教員の半分が入れ替わっていた。

大宮中学校になんかいたくはない。そう大声で語る教師もいた。授業どころの話ではないのである。校内での暴言や暴

力沙汰は頻発していた。一日校内を見回れば、大きめのレジ袋いっぱい吸い殻を拾うことができた。生徒が吸ったタバコの吸い殻である。自転車で廊下を駆け回る者、便器を粉々に壊し回る者、窓ガラスをバットで割る者。様々である。

気の弱い女性教員などは、一年を待たずして転任した。それがまた、身を守るための最善の方法でもあつた。

わたしは、新採用で大宮中学校に赴任した。初年度は三年生の副担任だった。前年度の荒れの影響で、生徒は荒んでいた。勤めて一週間後の掃除の時間の出来事である。やんちゃな男子生徒が組みついて来た。わたしは柔道部に在籍していたから、その生徒を背負い投げで投げ飛ばした。そこに学年主任がやって来た。

「内海先生、そこまでしておきましょう」

その後、主任が父親に電話でこの出来事を伝えたのである。その夜、父親は本人を連れて謝りに来た。ウイスキー一本というおみやげを持ちながら。これには戸惑ってしまった。

その後、その生徒はわたしの身近にすり寄って来た。仲良

くなりたかつたのであろう。

二年目には、一年生の担任を務めた。

その年の三年生は、しこたま荒れた。明日が卒業式という日の帰りの会の様子は忘れられない。

「さあ、明日は卒業式だぞ、校歌も立派に歌おう」

と言ったところ、生徒たちは外を見つめて声を上げた。何と三階の三年生の教室から、教科書が降ってくる。その次は椅子。そして机。三年生は学校に絶望していたのである。

来年は二年生に持ち上がれるものだと思っていた。ところがさにあらんや、半数の教員が転任したため三年生の学級担任がいけないのだと言われ、前任の校長から三年生を受け持つように頼まれたのであった。わたしを採用してくれた校長である。断ることができなかった。もんもんとして四月を迎えたのであった。

川浪校長は、四月一日初出勤の日、わたしを校長室に呼んだ。

「内海先生、お昼どこかで食べましょう」

「はあ？」

問いかけの意味が分からなかった。

「わたしは、この町が不案内ですから、お昼ご飯を食べるところを教えてください」

何ということもない、昼食のための店を知りたいのだというのである。

「まず最初だから、お寿司にしましょう」

昼飯で寿司を食うなどという贅沢は、思いもしないことである。

「一番よいお寿司屋さんに行きましょう」

ということ、町で人気の築地寿司に案内することにした。

「この主人は、東京の築地で修行された方なんです。ですから、店名も『築地』。何でもおいしいですよ、校長先生」

平教員の身である。校長に寿司をおごってもらえるなど、考えてもみなかった。

「木下校長は、内海先生をかっておられたんですよ。問題の多い一年生をよくまとめているってね。先生、本当は二年生に持ち上がりたかったんですよ」

「はい、でも校内事情でしたから、いたしかたありません」

「そういうところが、先生の信頼につながったんですね。自分の思いを二の次にして、人の意見に従う……」

「わたしの学級には、三年前のボスの弟がいました。生徒指導的な指導の絶えない生徒でした。ですから、家庭訪問も頻繁にしています、お父さんには『三年間面倒を見ますから心配しないでください』なんて、酒を飲みながら話していたもんですから、嘘をついたことになってしまいました」

「そんなこともあったんですか」

俯きがちなわたしの方を向くと、にっこりと笑い、

「まず今日は食べましょう。築地を堪能。それがわたしのこ

の町での第一歩です」

川浪校長は、おいしそくに寿司を頼張るのであった。

2

四月七日は、入学式と始業式が行われる日である。朝早くから玄関で生徒を出迎えた。

この日の対応を巡って、三月二十三日には保護者会が開かれていた。生徒指導主事の村山先生が、異装の生徒は、校内に入れないことを宣言した。

「春先の対応が、一年間の方向性を決めるのです。学校は、いえ先生方は生徒のわがままを絶対に認めない。そんな強い姿勢で出ないことには、あの子たちの心には響きません」
帰宅後服装を改めて登校した生徒は、校内に入れる。また、髪型も生徒心得に従わない生徒は、床屋で直してくるように指導する。

この内容は、保護者にも認められた。学校の荒れが始まって三年になる。昨年度は、玄関先で養護教諭を投げつけ、ケガを負わせたことが全国版の新聞で報道され、大宮中学校の荒れは全国に知れ渡ることになった。

「先生、大丈夫ですか？」

「先生方、頑張ってください」

保護者の熱い声が、心を奮わせた。

3

異装で帰宅指導された生徒、男子二十五人、女子十三人。その日の『生徒指導日誌』の記録である。

ところが、生徒たちは帰宅しなかった。トイレの窓や教室の窓から校内に入り込み、廊下に貼り出された新学級の名簿を眺め、トイレで一服して帰って行った。トイレに張り付いていた教師たちは、胸ぐらをつかまれたり、蹴り上げられたりした。散々なスタート地点であった。

授業どころではなかった。荒くれ連中は、教室にいることがなかった。

ある日のこと、授業中抜け出した二人組が廊下で石けんを転がしている。ポウリングのピンよろしく、教科書を立てている。英語の時間であった。わたしと同期採用の新山先生が、廊下に飛び出して注意した。それが気に入らないと言って、殴る蹴るの暴行である。これは警察に被害届が出され、この二人は保護観察処分を受けるのであるが、新山先生は全治二週間で二日間入院する羽目になった。

同じようなことが連日続いた。

わたしの学級には、直樹というボスがいた。背は低いのであるが、筋肉質で胸ぐらが厚かった。力が強く、学年のボスであった。ただ、学力は低かった。九九はまともに言えないのである。漢字も小学校三年生程度であった。自動車の免許

を取りたいというのが、教本を開いてみたが、「横断歩道」が読めなかった。

彼は、家庭環境がメチャクチャであった。

父親は、土建業を生業なりわいとしていた。勤務地は東京である。一年に数日家にいれればいい。タバコがなくなれば息子からもらう、そんな父親であった。母親は継母であった。料理はほとんど作らない。だから彼は、常に腹を空かせていた。

そのため、わたしは新婚間もない妻にお願いして、毎日にぎりを二個持たせてもらった。社長出勤で三時間目頃に登校して来ると、誰も見ていない部屋に招き入れ、おにぎりを食べさせるのであった。これは、卒業式の日まで続いた。

二期の半ば頃になると、継母が、

「お父さんのところに行くことになりました。直樹のことは、親戚にお願いしていくから何も心配はないよ、先生」と言い残して、姿を消してしまったのであった。ところが、親戚はその話をまったく聞いていなかった。その上、誰も彼の面倒を見ようとはしなかった。一週間後、ガスが切れた。その後、電気も止まった。かろうじて出ているのは水道だけであった。

わたしは、深夜徘徊している彼を捕まえて、夜中にカレーライスを作って食わせたり、家に招いて夕飯をごちそうしたりした。直樹は家なき子になってしまったのである。

4

わたしは、学級担任として二年目を迎えていた。荒れた学校であるから、先輩教師から学級経営について学ぶゆとりはなかった。誰も他の学級のことなど気にしていられないのである。ただ、受け持った学級の大半の生徒たちは、まともな生活をしているのである。真面目に勉強にも取り組んでいる。そんな生徒たちをしつかりと育てたい。そう思った。

「この子たちは、俺の学級の生徒だ。この学校で一番の学級をつくらう」

そのために、教育書を読みあさった。まずは教室の掲示物の作成である。教室の鳥瞰図をこさえた。どこにどんな物を貼ればいいのか、他校にお邪魔して調べ回った。

教室を六分割した。生活班は六班である。話し合いで一区画を決めさせ、掲示物を一週間で完成させる。後で分かるのであるが、それはグループエンカウンターのな取り組みであった。

話し合いの司会は、わたしが務めた。話し合いの仕方など分からないのである。まずは、それを教えるところから始めた。学級役員が決まると、全員を引き連れて校舎を回った。どの学級にも掲示物一つない。

「みんな見て分かるか。大宮中学校は、今生まれたばかりなんだ。だから、何もありません。これから、一週間かけて掲

示物を作成します。これをスタートとして、まずは大宮中学校で一番素晴らしい教室をつくりましょう。そして、荒れ回る連中に負けずに、勉強に励みましょう。心一つに、みんなで頑張れば日本一の学級ができるはずですよ」

こう熱く語るのである。生徒たちの目が燃え上がってくる。

一週間で勝負である。これ以上長くは取れない。学級目標は、わたしの筆字で完成させ、学級スローガンは、発泡スチロールを切り抜き、わたしが完成させた。

まだ土曜日に授業があつた時代の話である。土曜日の放課後、掲示係と一緒に、一斉に教室に貼り出していく。貼り終えたのを見ると、係の生徒が驚きの声を上げる。

「せつ先生！ すげーなあく。見違えるようだぜ」

「ほつ本当だ。これ絶対みんなびつくりするぞ！」

「なつ、みんなで頑張ればここまで来れるんだ。教室はまず大宮中学校一番になった。後は中身の問題だな！」

月曜日の朝、教室中に驚きの声が広がる。

「みんなが頑張つたから、教室は生まれ変わりました。一人一人の努力の結果が、大宮中学校一番の教室をつくつたのです。でも、この教室に住まう人間が、本物にならなければ、この掲示物はただの飾りです。勉強に励みましょう。そして、仲間を大切にしましょう。三十五人の学級の仲間が一つになって、日本一の学級を目指しましょう」

この後、学級内に問題が起こるたびに、この日の様子を振

り返らせた。あのスタートの日の思いはどこにいったのだ。あの新鮮な感動は無くなってしまったのか。日本一の学級を目指すためには、この問題をみんなの力で解決していこう。そう呼びかけ続けた。校内は依然として荒れていたが、まともな人間は立ち上がらなければならないのである。

5

「直樹が、外川中学校の生徒と乱闘だ！」

村山先生が、血相を変えた様子で職員室に駆け込んできた。

「川原の公園に、今警察が踏み込んだ」

職員室にいた先生方が、立ち上がった。川原の公園は、走つて十分。すぐ目の前である。

公園では、警察官に取り押さえられた中学生が二十人はいたであろう。大宮中学校の生徒は五人、外川中学校の生徒は十五人。ところが人数の多い外川中学校の生徒たちは顔中血だらけなのに、大宮中学校の生徒たちは一人も血を流していないのである。直樹は、右手にバットを握りしめていた。これがまずかった。直樹は、傷害事件の犯人として鑑別所に送られることになった。

鑑別所に送られても、素直な反応を示す直樹ではなかった。終始無言で、警察官をにらみつけていた。

「少年院送致が適当だな」

そう言われた。それをおさめるために、わたしは奮闘した。連日のように直樹に食い下がり、ついには警察官に頭を下げさせたのである。

「内海先生、連れて帰ってかまいませんよ。でも、こんな連中が多数いるような学校じゃたまったもんじゃないですね。わたしらだったら身が持ちませんよ」

「本当に申し訳ありませんでした」

深々と頭を下げると、わたしは直樹の手を引きながら警察署を後にした。

6

昭和五十年代から六十年代半ばにかけては、日本中の中学校が第三の荒れに見舞われていた。第一の荒れは、終戦後の混乱期である。殺人事件も頻発した。第二の荒れは安保闘争激しい時期一九七〇年代である。高校生までデモに繰り出した。中学生が影響を受けないわけがない。そして第三の荒れである。いじめが学校中に吹き荒れた。校則も規律もあつたものではない。自分自身の身を守ることで精一杯であつた。県南の中学校では、英語教師が授業中ナイフで刺し殺された。ある中学校では、トイレでいじめられた女子生徒が素っ裸で学校中を走り回っていた。

聞くに堪えない話が連日伝わって来た。

7

陽和ひよりが家出したのは、父親からの虐待が原因であつた。陽和は深夜徘徊して、異性の家を泊まり歩いた。それをとがめて、父親が焼き火箸を腕に押しつけるのである。陽和の腕には、無数のやけどの跡があつた。そのことをわたしは知っていた。そのため、何度も家庭訪問をして、父親に訴えた。しかし、それでも止むことはなかつた。そんな家庭環境に、陽和は耐えきれなかつたのである。

太陽の下で平和に暮らして欲しい。亡くなった陽和の母親が、そんな願いで命名したそうである。それが名前とは全く違う人生を歩んでいる。わたしにはそう思われた。

「かわいそうなやつだ」

何度も心の中でそう叫んだ。でも救うことはできなかった。陽和は、このあたりにはいないらしい。そんなことを言う女子生徒が多数いた。東京にいるという噂も立った。捕まえようがなかつた。わたしは悩んだ。父親に捜索願を出してもらおうと思つた。ところが、父親はそれに応じない。

「あんな娘は、死んでもいい」

そんな言い草だつた。

悩んだあげく、川浪校長に相談することになった。

「わかつた」

川浪校長は、その一言を残して陽和の家に向かつた。一升

瓶を下げて、である。

翌日父親が捜索願を出した。警察の捜索が始まった。未成年の家出として、全国に通知が回った。一週間後居場所が分かった。東京八王子の大学生のアルバイトに潜り込んでいたのである。すぐさまわたしが引き取りに向かった。旅費は、川浪校長が出してくれた。

「先生、あたしあんな家にいたら殺されちゃうよ」

「そうだよな」

「これってさ、ぎやくたいって言うんじゃないの？」

「虐待は、児童相談所ってとこで対応してくれる。でも、陽和のケースだとケースカンファレンスっていう相談所内の話し合いでは、養護施設送致になってしまうかも知れないよ」

「何でもいいよ。あんな家にいるよりまし」

陽和は、M市にある養護施設に入所が決まった。これには親の同意が必要なのだが、ここでもまた川浪校長が動いてくれた。

虐待での養護施設入所は、親元から離れた場所になる。親が引き取りに来れないようにするためだ。M市は、県南の遠い場所にあった。そのため、学級内の送別会は盛大に行われた。

陽和は、非行に走ってはいしたが、級友たちとの仲はよかつたのである。いじめの場面なんかを見たときには、いじめっこをこらしめ、助けてやった。だから信頼されていたのであ

る。

出発の日、川浪校長が駆けつけてくれた。

「陽和さん、負けちゃ駄目だよ。君の人生はこれからなんだ。幸せにならなきゃな。それがお母さんへの恩返しになるんだ。応援してるよ」

女子生徒が涙声で、話しかけた。

「陽和、いつでも訪ねてきてね……」

「陽和、元気でね……」

陽和は、にっこり微笑むと大きく手を振り、立ち去っていった。

爽やかな秋風が吹いていた。

8

校内の荒れは収まるどころではなかった。日を追うごとに荒んでいった。ただ、学年主任が偉かった。

「荒れてしまった生徒に、訓示や強い指導は無駄だ。抱擁するしかない。抱え込むんだよ、お前たちのためにつてな」

学年会議の席上で、こんなことを話すのであった。荒れた生徒たちも、この学年主任のことは好いていた。そして、けっして立ち向かうようなことはなかった。

「伊山主任、主任のように強い人はいいですよ。でも、みんな疲れ切っているんです。抱擁なんてできませんか？」

「だから、頑張るんだよ。あいつらだつてまだ中学生なんだ。これから先のことが見えないから、勉強なんかもできないから、投げやりになつてきているんだ」

「授業を変えればいいんですよね。あいつらにも分かるような楽しい授業に」

「うん、そうだな」

それからわたしの取り組みは始まった。一時間の授業の内容を事細かなプリントにして、毎日配布した。初めのうち、やつらはそのプリントをゴミ箱に捨てた。しかし、あきらめなかった。そのうち、家に持ち帰るようになった。その結果、テストの点数が上がった。

「内海、数学っておもしろいな。ゲームみたいだな。かならず答えが出る」

「よく言えた。これからだぞ」

この輪は広まっていった。どんなに忙しいときでも、必ずプリントを作成した。これが一年続いた。

「俺、勉強できるようになつたら、タバコなんか吸つてるのバカバカしくなつてきた。俺さ、M高に受かるかな」

「バカ、お前じゃムリムリ」

「俺は、絶対受かつてやる」

こんな風に進路の話題も出るようになった。こいつらにも、こんないいところがあつたんだ。わたしは、目頭を押さえた。他の学級は、教室の掲示物が破かれるのに、わたしの学級

だけはそんなことが無かつた。

わたしは直樹に聞いてみた。

「なあ直樹、他の学級は掲示物がポロポロなんだけど、うちの学級だけは絶対にはがれない。なぜなんだろう」

「あのなあ、内ちゃん、俺が止めてるからだよ。俺なあ知つてんだよ、みんなが一生懸命こさえてたこと。春先に内ちゃん言つてたよな、『日本一の学級をつくらう！』つて。俺、結構好きなんだよな、そんな話。だから掲示物ははがさない」

「直樹、ありがとう」

目元がかすんだ。直樹の手を力一杯にぎつた。直樹がぎよんとしていた。

9

十月に入り文化祭が近づいて来た。時を同じくして、秋祭りも始まつた。こちらは正式名を『散野祭り』といい、山車を八幡宮に収めることを競い合うものであつた。

祭りである、酒が出る。それを中学生が飲むのである。地域の大人たちは、自身の中学時代も大酒を飲んで過ごしていたので、誰もとがめる者は無い。大盤振る舞いである。これを取り締まる中学教師は大わらわである。乱闘になることもあつた。

こんな祭りが二日間も続くのである。教師は寝ずの番で夜回りをする。川浪校長も連日夜回りをした。

「校長、俺たちを止めようとしても無駄だぜ。祭りは一年に一度だけだ。楽しまなくちゃな」

耐ハイの入ったコップを片手に、絡んで来る。

「ハイハイ、そこまで」

川浪校長は、軽くないすとコップを取り上げ中身を投げ捨てる。

「なっなにすんだよ！」

「未成年者は、飲酒禁止でしょ」

くるりと回って、その場を去る。自然な動作が様になっていたのである。わたしは、感心して見ていた。

「しかったって無駄だよ。付き合えばいいんだよ。仲間としてさ」

川浪校長は、さらりと話した。

祭りは深夜まで続いた。あちらこちらでケンカが始まる。物騒な祭りである。

10

文化祭のメインは、合唱コンクールである。どの学級も練習に余念がない。真面目な生徒たちは、学級スローガンを掲げ当日を待つ。荒くれ連中も練習には参加する。しかし、異

装では参加できない。まともな格好にならなければならないのだ。それができるか。真面目な生徒たちは真剣に訴える。

「みんなで合唱コンクールに出ようぜ！」



荒くれ連中は、これに同意しない。

こんなことがあった。

孝夫が練習中キレた。リーダーの言動がしゃくにさわったのである。手近にあった椅子をリーダーに放り投げた。それが女子生徒に当たったのである。これは示談に持ち込むまで時間のかかる事件となった。

孝夫は普段から暴力的な行動が多かった。そのため、女子生徒の親御さんからの訴えもあり、中央児童相談所送致になった。そこでの検査の結果、発達障がいと診断された。そのため、半年間身柄預かりとなった。

わたしは、児童相談所の職員と何度も面談をした。今後の対応について、児童心理士からのアドバイスをもらった。

合唱コンクール当日の朝である。

直樹は、ボンタンではない裾のほそいズボンで登校した。

学ランも正規のものであった。他の不良連中もそれに従った。

「内ちゃん、俺の指導だぜ」

「さあ、みんなで精一杯歌ってこい！」

わたしは、笑顔でそう呼びかけた。

な声で泣いていた。

「こいつら成長したな……」

秋風がプラタナスの葉を揺らしていた。グラウンドの一角である。

「日本一の学級に近づいて来たな。先生は、そう思うけど、みんなはどうだ？」

「俺たちは頑張ってるよ。でもなあ、『白竜会』の連中が……。今のままじゃ、大宮中学校というだけで、高校受験も危なくなるぜ」

「うん、そうだ」

白竜会とは、荒くれ連中の組織の名前だ。体育館の裏の壁に、白色のスプレーで大きく落書きされていたのが、「白竜会」という文字だった。

白竜会は他校とのケンカを繰り返した。その先頭に立っているのが直樹だった。わたしは、ことが起こるたび現場に飛んだ。そして、他校の校長に頭を下げた。けが人は、他校生に多かったからである。

ある日のこと、不良女子生徒三人が我が家に押しかけた。

そのことを電話で知った。妻は戸惑っていたが、鮭入りのおにぎりを食べさせると、にこつと笑って帰って行ったそうである。

「内、あんたところの奥さん、よくできてるな。うらやましいよ。わたしんちの母ちゃんより優しいぜ」

合唱コンクールの結果は、金賞であった。見事に歌いきったのである。直樹が涙を流していた。仲間たちもみんな大き

加世子である。女子生徒で一番の悪^{わる}である。
「お前、加世子がほめていたぞ。すごいな。俺にも鮭入りのにぎりめし食わせろよ」

こんな会話が家庭内で続いた。

12

こんな生徒たちも、卒業式には出たいたのであった。しかし、異装・異髪では式に参加させられない。職員会議でそう決定していた。卒業式前日の様子は、今でも語り草である。

直樹の家を訪問した。信男と浩太がタバコをふかしていた。

「お前ら、明日の卒業式には出たいか？」

「もちろんだよ」

「でもな、そんな髪型じゃ出られないぞ」

「床屋に行くよ」

「金あるのか？」

「ねえよ」

直樹である。

「三千円やるよ。行ってこい」

「内、その三千円、酒とタバコに変わるぜ」

信男である。

「俺は、直樹を信じてる」

わたしは、そう言うのと直樹の家を後にした。卒業式当日の

朝である。直樹は、丸坊主頭に正規の制服で登校した。他の荒くれ連中も同じである。

「俺の指導、だぜ」

直樹は、そう言うのとわたしに寄りかかって来た。

「卒業証書のもらい方、分かんないんだよな」

練習に一度も出たことが無かったのである。急遽体育館に移動して、荒くれ連中全員にわたしが指導した。

「何とかなるだろう。あとは、名前を呼ばれたら大きな声で返事をするように。それだけ守れば、いい卒業式になるさ」

わたしの胸には込み上げるものがあつた。こいつらともお別れか。あれだけ困らされたのに、寂しい思いがある。

卒業式は始まつた。

川浪校長は、卒業証書を渡しながら、一人一人の頑張りを言葉として伝えていった。

直樹の番である。

「直樹、お前は合唱コンクール頑張つた。そして、今日の式のためにみんなをよくまとめてくれた」

直樹は、その言葉に涙で応えた。そして、おもむろに手を差し出すと、川浪校長とがっしり握手をしたのであつた。

感動の中で卒業式は終わった。生徒玄関の外には、パトカーが待機していた。生徒たちのお礼参りがあるかも知れない。そんな危惧があつたものだから、川浪校長が手配したの

であった。しかし、それも杞憂に終わった。何事もなく、生徒たちは在校生に見送られながら学校を後にしたのであった。

卒業式の翌日のことである。新生徒会長がわたしのところへやって来た。

「先生、今日の放課後、代表委員会を開いてください。話し合いたいことがあるんです」

「それはいいけど、急にどうしたんだい？」

「実は、隣の家に小学校六年生の男の子がいるんですが、その子が『中学校は荒れているから中学校には行きたくない』って言うんです。それが辛くて……」

「そうか、それは辛いよな」

「だから、なんとかいい学校になれるようにみんなで話し合いたいんです」

「うん、分かった。放課後、代表委員会を開催しよう」

代表委員会とは、各学級の会長一名と副会長二名が参加する会議の名称である。各学年六学級の学校だから、一、二年生の代表が全員集まれば、三十六人、これに生徒会役員が八人、四十四名の大所帯になる。その会議が始まったのは、午後三時。それから三時間延々と会議は続いた。

「始めにみなさん、今日はよい学校をつくるためにわたし

ちにできることは無いかについて話し合います」

生徒会長が会議の前に、話し合いのテーマを宣言した。そのあと、

「わたしは、まずこの学校でタバコを吸う生徒をゼロにしたいと思います」

タバコゼロ宣言である。わたしは、おもむろに手を挙げた。

「それは無理、無理。先生は三年間授業の無い空き時間帯に毎日学校を回りましたが、一日でレジ袋いっぱい吸い殻を拾いました。一日たりともゼロの日は無かった。あれだけ先生方が努力しても実現できなかったことが、生徒のみんなにできるわけが無い」

語気も強くそう語った。

「内海先生、やらせてください」

それから話し合いは、具体化していった。タバコはなぜ悪いのか。どうやったら無くすることができるのか。三時間、トイレに行く生徒は一人もいなかった。

午後六時、あたりは暗くなってきた。しかし、生徒たちは硬直した表情で、頬は赤くほてっていた。

『あー、この子たちは本気なんだ。真剣に考えている。中学生がここまで踏ん張ることができてなんて初めて知った。学校を変えるのは教師じゃない、学校を変えるのは生徒なんだ』

わたしは、心の中でそう叫んでいた。

「内海先生、校舎内の地図みたいなのありませんか？」

「あるよ、内観図っていうんだけど」

「それ、全員分コピーしてもらえますか？」

「うん、すぐやってくるよ」

内観図を生徒会長に配った。彼はそれを十二分割した。そして、その一区切り一区切りに学級名を記していった。

「内海先生、今日の話し合いの結論が出ました。報告します」

「しつかり聞くぞ」

「結論は二つです。一つは、校内でいつもタバコが吸われている場所に、禁煙ポスターを貼ります。『タバコやめますか人間やめますか』みたいなものです」

「いつ作るんだい？」

「今日これからですよ」

「そしてもう一つは、全校生徒のタバコ見回り隊の結成です。内観図を十二分割しました。そこに学級名を示してあります。明日から、休み時間中そこに必ず誰かが立ちます。誰かが立っていたら、隠れてタバコなんか吸えないでしょう」

「そんなことできるのか？」

「できます。やります」

「やります」

「やります」

至る所から声が上がった。

「分かった。先生は全力で協力するよ。みんなで頑張ろうな」

わたしは翌日の職員朝会で、二つの結論を発表した。ポスターは既に貼り出されていた。それを見た先生も多かった。しかし、見回りに関しては、わたしも心配であった。

「子供たちは十二分割した学級の場所に立つと言っています。わたしは無理だと思っただ、みなさん、もし生徒がいたとしたら、『頑張ってるね』ってほめてあげてください。お願いします」

わたしは、深々と頭を下げて話を終えた。

わたしは一時間目、二年一組の数学の授業を行った。授業が終わった。でも教室から出るのが怖いのである。まさか生徒がいるわけが……、そう思えるからである。でも出ないわけにはいかない。

恐る恐る廊下に出て、驚いた。全ての場所に二、三人の生徒が立っているのである。駆け足で、校舎を回った。どこにも生徒はいた。不在の場所はゼロであった。

なんとその日、校舎からはタバコは一本も出なかったのである。

「奇跡だ。やっぱり、学校を変えるのは教師じゃない。学校を変えるのは生徒なんだ！」

その言葉を、強く吐き出していた。

タバコゼロ日は、五日間続いた。しかし、六日目の朝、技術室の前から一本のタバコが見つかった。

生徒会長は血相を変えて職員室に乗り込んできた。

「内海先生、臨時の生徒集会を開いてください。わたしから全校生徒に投げかけます」

朝の会終了後、すぐに臨時の生徒集会を開催した。先生方も、緊張した顔立ちで体育館にいた。生徒会長は、すぐさま登壇すると話し始めた。

「小学生たちは、大宮中学校は荒れているから入学したくない。みんなそう言っているそうです。わたしは、それが悔しくて悔しくて。ですから校内からタバコを無くすことを皮切りに、何とかいい学校つくろうって、代表委員会で話し合っただんです。タバコ禁止ポスターとたばこ見回り隊はそこで生まれた結論なんです。それを実現させるために、みんなで頑張ってきました。しかし、今日タバコが一本出てきたんです。誰ですか！ 誰がやったんですか！ わたしは絶対に許せません。許せない」

生徒会長は、大粒の涙をこぼしながら、声の限りに叫んだ。その後、校内からタバコが出てくることはなかった。

ケンカがあれば、また臨時の生徒集会。生徒会長がケンカ撲滅を訴えかける。

この取り組みが一年間続いた。大宮中学校は、見事に立ち直った。勉強に打ち込む生徒も多くなり、県下の難関校を受験する生徒も多数出るようになった。

「内海先生、先生のお陰だよ。ありがとう」

川浪校長に声をかけられると、わたしは肩をふるわせて泣き出した。川浪校長もつられるようにして泣き始める。辺りにいる先生方がみんな涙を流した。大宮中学校は生まれ変わったのである。

川浪校長の退職を祝う会で、わたしが読み上げた詩である。凍てついた大地を突き破り、新芽が吹き出そうとしている。

春風が、寒気の流れをシベリアへと押しやり、ぬけるような青空が天空を覆っている。

ほこりをかぶったわずかばかりの雪は、陽の光と地熱によつて、ゆつくりと溶け、静かに地中に吸い込まれていく。

山々の獣たちは、もう長い眠りから目覚めただろうか。雪原を駆け抜けた、うさぎの仲間たちも、ゆるりゆるりと起き出すころである。

穏やかな海原を風が渡り、かもめの姿もひときわ鮮やかなことだろう。

岩場の陰にはこんぶやわかめが静かに揺れ、稚魚たちが陽気に戯れていることだろう。

町のあちらこちらの日溜まりから、子供たちの笑い声が聞こえてくる。

入学祝いのかばんやら、真新しい制服などを身にまとい、家中で一番大きな姿見の前に立ち、仕草をつくる様子が見える。

明るい笑いは庭先にまで届き、梢でさえずる小鳥たちまでが、その幸を願っているようである。

今、春はあたり一面に降りそそぎ、山も川も海も、そして、日々の生活に追われる人々の上にも、さんさんとその恩恵を施している。

過ぎ去りし日々に幸いあり。

巡り会う日々に幸いあれ。

旅人が、峠の道祖神に願うように、誠実な心で、そう願っていた。

風雨にもまれた柔らかな顔は、きっとその願いを聞き入れてくれるだろう。

長い長い道程の、一つのふしめを過ぎる人に、若い一人の旅人が贈る、それが唯一の願いであれば。

川浪校長は、穏やかな顔で聞き入っていた。

【補記】

これは、わたしの初任校での実話である。昭和六十年から七年間、在籍した学校は荒れていた。

直樹は金がないから修学旅行に行けない。悪ぶりながら、それでもいいやとうそぶいた。その直樹の修学旅行の旅費を川浪校長が出してくれた。

「出世払いでいいからな」

その直樹が、今では焼き鳥屋の店長である。川浪校長が訪ねていくと、料金を取らない。

「校長先生は、飲み食いただ。内ちゃんからはちゃんともらうよ」

こんなことを話すのである。

現在は、荒れた中学校の話を耳にすることはまずない。生徒はおとなしく、手がかからなくなった。ただ、元気がない。荒れていたときの生徒は、エネルギーが有り余っていたのである。それをどう出していいのか分からなくて、非行に走ったのであろう。

手もかからず、おとなしいだけの生徒たちが大人になったら日本の世の中はどうなるのであろう。そんな不安がある。

夢と志をしっかりと持った生徒を育てなければいけない。それが、これからの教師の務めであらう。

奇妙な決闘

竹浪 和夫・作

菊池 治夫・画

1

「応援団幹事にならねえか」

三村竜介が中野彰吾を誘った。三年に進級してすぐのことだった。

竜介は英語研究部、彰吾は考古学研究部の部長をしていた。

「英語劇に夢になつてる汝が、なんで応援団に首を突っ込むんだ？」

「応援団が潰れそうだって聞いたからさ」

「ふうん」

「幹事になり手が無いから、各クラスから委員を選出して、応援委員会をつくる方針だそうだ」

「誰の方針なんだ？」

「そりゃ、校長に決まつてるべな」

竜介は突き放すように答えた。

「俺が入学したときは風紀係だったのが、今は規律委員会だ。新聞部は新聞委員会になつたし、図書係は図書委員会になつ

た」

肺結核で留年した竜介は、彰吾より年齢が一つ上だった。そのせいで竜介は仲間から一目置かれ、いつのまにか安渡高校の「番長」と目されるようになった。

しかし、小柄で青白い顔をした竜介は、どうみても武闘派には見えなかった。

ただ、相手を一瞥する目つきに、ぞつとするような気味悪さがあった。

「応援団幹事会が応援委員会に変わつても、汝はなんともねえのか……」

彰吾は竜介が何に苛立つているのか分からない。

「幹事より委員の方がスマートでいいべさ」

「そつたら考え方だば駄目だ。名称が変わるといふことは、中身も変わるといふことだ。校長は俺たちの自立心ば削り取つて、従順な生徒にする気だのさ」

竜介が面倒なことを言い出したので、彰吾は面喰らつた。

「よくわかんねけど、とにかく俺が応援団幹事になればいい

んだべ？」

「うんだ。一緒にやるべし」

こうして、応援団幹事に自薦した者が八人もいたため、校内はちよつとした騒ぎになった。

「柄の悪い連中に応援団が乗つ取られたな」

顧問の小沼先生が嘆いていると聞いて、彰吾は、

（番長の竜介が団長なんだから、柄の悪いのは当然だべ）

と、苦笑した。

「二ヒルだからな。竜介先輩は……」

野球部を脱けて、考古学部を顔を出すようになった本間四郎がつぶやいた。四郎は竜介と出身中学が一緒だった。

「先輩の親父さんもお袋さんもお兄さんも肺病で死んでしまつて、生き残つたのは竜介先輩だけのさ」

四郎は竜介の生い立ちに詳しくかつた。

「先輩の爺様は本屋をやつてるんだ。休所堂きゅうしょどうつていう小さな店だけど、俺の町では一軒しかない本屋で、教科書も売つてるんだじゃ」

（そうか。それで竜介は読書家になつたのか）

彰吾は以前、

「おまえ、モーパッサンの『脂肪の塊』読んだが？」

と、聞かれたことを思い出した。

「竜介は番長つていわれてるけど、喧嘩したの見たことねえ

よな」

彰吾が疑問を呈すると、四郎は思案顔になった。

「いや、先輩は小学生の頃、鼻血流しても殴り合い止めねがつたぞ。並でねえとこあるんだよ」

「血だらけになつてもギブアップしないガキが、留年して番長になつたわけか……」

「ありえねえ話でもねえべ」

四郎は内ポケットから「ピース」を取り出すと火を点けた。天井の低い考古学部室に紫煙が広がつた。彰吾は慌てて窓を開けた。

「ここで煙草は止める。匂いが残ればどん亀にはれるぞ」

どん亀というのは考古学部顧問の亀井先生のことだ。ずんぐりむつくりの鈍くさい体型だが、生徒指導主任をしていて、喫煙者には容赦が無い。

「汝おまは今度無期停くらえば命取りだべ」

二年生のときに、停学の洗礼を受けている四郎は後が無いのだ。

「合わせて一本。退学処分つてが……柔道でもあるめえしな」

不敵な台詞を吐きながらも、四郎はそそくさと煙草をしまった。

言い出しつぺの竜介は、応援団長におさまり、彰吾を副団

長に指名した。

「安渡高校にも寮歌みたいな応援歌があればいいんだけどな」

応援団幹事結成会の数日後、学生寮の居室で竜介が宣^{のたま}った。

「寮歌？」

彰吾と四郎が同時に聞いた。

「知らねえのが。♪嗚呼玉杯に花うけて／緑酒に月の影やどし／治安の夢に耽りたる……」

「先輩。そのお経みたいな歌のどこがいいんです？」

四郎が目を白黒させた。彰吾は聞いたことのあるメロデーだな、と首を捻った。

「第一高等学校、今の東大の寮歌だ」

「東大……先輩は東大が好きなんですか」

「いや、そういうわけではねえけど、ほら、小林旭の『北帰行』、あれも元は寮歌なんだ」

マイト・ガイの大ファンの四郎は、その一言であっさり

「寮歌派」になった。

「誰か作詞作曲できる奴いねえかな」

竜介が本気だと知って、彰吾は思いつきを言った。

「叔父さんに相談してみようか」

「叔父さんって……」

四郎が聞いた。

「最善寺の和尚さんだよ」

「酒飲みで有名な生臭坊主にか？」

竜介が半信半疑の顔をした。

「東北帝大出だから、寮歌は得意かもしれない。それにバイオリンも弾くし……」

「ふうん……試しに頼んで呉^{つけ}ろじゃ」

竜介は和尚が「帝大出」だと知って、真顔になった。

「あまり期待しないでくれよ。噂通り、朝から晩まで酒浸りのアル中坊主だからね」

「じゃ、謝礼は般若湯一升でいいんでねえかな」

四郎がケラケラと笑った。

2

にわか応援団幹事の出番がきた。硬式野球の春季大会が、市営グラウンドで行われるのだ。

開会式のあとで、エール交換を仕切るのは安渡高校応援団長の役目なので、竜介は羽織袴に足駄という伝統スタイルになった。

副団長の彰吾は学ランに白ズボンという珍妙な出で立ちで、全校生徒と向かい合った。

「フレ、フレ、^{あんこう}ソール」

竜介のおっとりした声に、彰吾ははらはらした。応援団リーダー特有のドスの利いた声とは、似ても似つかない頼り

ないエールだった。それでも、彰吾は、

「フレ、フレ、安高。フレ、フレ、安高」

と、喉が破裂しそうな雄叫びを上げ、両手を振り回した。

その刹那、女生徒の一人と視線が合った。幼馴染みの新藤八千代だった。八千代は内科医院の一人娘で、彰吾の母はその看護婦をしている。

彰吾の方を見た八千代は、右耳のあたりで人差し指をクルクル回転させ、手の平をパツと広げた。

（えっ。俺がクルクルパー、だつてが！）



彰吾は軽い目眩に襲われた。とたんに声が止まった。八千代はさらにかんべえをした。

（なんだっていうんだ……）

彰吾は八千代の意図が分からず、腰砕けになった。竜介が「フレ、フレ、畑高」と相手チームにエールを送った。彰吾はホイッスルを鳴らしてその場を凌いだ。

開会式が終わると、彰吾は八千代を探したが見当たらなかった。八千代と仲のいい尾山道子に聞くと、

「家に戻ったみたいだよ。日焼けしたくないって言ってた」と、そっけなく応じた。

（全校応援をサボるなんて、全く呆れたもんだ）

彰吾は胸の中で毒づいた。

「どっちがクルクルパーだつてよ」

そう呟いて天を仰いだ。晩春の日が輝いていた。

応援歌の制作を叔父の最善寺住職に依頼に行くと、住職は酒臭い息で言った。

「彰吾君、そりゃいけないよ。寮歌つてのはね、寮生自ら創作したものだ。だから、時代を超えて歌い継がれてきたんだね。自主、自律、自治……それを尊ぶ精神が底に流れていないよ、意味がないよ」

アル中坊主に面倒臭い理屈を並べられて、彰吾は気後れした。

「この話は団長の竜介が言い出したんです。僕は別に寮歌もどきの応援歌に拘りはないんです」

「せつかくの機会だから、君が作つたらどうだい。自分たちの代に応援歌を制定するのは、いい記念になるんじゃないかな」

「えっ、俺がですか？」

彰吾は首をすくめた。

「現代の若者は現代の言葉で心意気を歌うべし。うまい、下手にこだわらず、作詞にチャレンジしたまえ。曲はブラスバンド部の連中に頼むといいんじゃない」

そういうと、叔父の住職は「ふわあ」とあくびをした。

(うわあ、臭い)

酒毒を浴びたような気がして、彰吾は顔を背けた。

叔父の説教を竜介に伝えると、竜介は、

「ふうん」

と、頷き、

「さすが帝大出の和尚さんだな。それだけ、このさい汝が歌詞書いてみるじゃ」

と、勝手なことを言った。

「無理な話だべ。俺は土器や石器を友にしてるんだから」

「そう言わねえで、チャンス・チャレンジ・チェンジの3C

精神でやってみろ」

「なんだい、それは？」

彰吾は目をパチクリさせた。

「機会を得て、挑戦し、自己を変革する。これが3C精神さ」

英研部の部長の竜介は得意げだった。竜介の押し強さに負けた彰吾は、授業時間に応援歌の作詞という「内職」を始めた。それは次のようなものだった。

♪「決戦は今」

おお 決戦の時は来た

いざ ゴールを目指し

一直線にひた走れ

奮えよ 奮え

安高の勇者

勝利の栄光は

いま そこに輝く

この下書きを竜介に見せると、

「これは陸上部向けか……じゃこの調子で二番は野球部、三番は排球部ってとこだな」

と、気楽なことを言った。

「そう簡単にはいかねえじゃ」

彰吾は溜息をついた。

「Where there is a will, there is a way. つていうからな」

「なんだって？」

「為せば成る、為さねば成らぬ、何事も、成らぬは人の為さぬなりけり、つていう諺の英訳だ」

「汝は、英研部と応援団は一緒にしてんじゃねえの」

彰吾は竜介がやたらに格言を振り回すのが癪に障ったが、反論する言葉を持たなかった。

3

嗩声を張り上げたせいか、彰吾は激しい咽頭痛に見舞われた。母親に誘われて新藤内科を受診すると、門前で登校する八千代と出くわした。

「風邪ひいたみたいなんです」

彰吾の母の言葉に八千代は軽く頷き、彰吾の方を見ようともしなかった。

「俺もあとから行くよ」

無視された彰吾が言い訳がましく声を掛けると、八千代が振り向いた。

「竜介なんかと連むの止めたらいいべさ」

「……」

「汝は汝らしくしてればいいのに。内気なくせして、目立ちたがりなんだから」

八千代は捨て台詞を浴びせて、坂道を下って行った。母親は先に立って医院の戸を開けると、上がり口で彰吾にスリッパを並べた。

彰吾は喉の痛みよりも、胸の奥の疼きに耐えかねた。

(俺が目立ちたがりだつてが……)

幼馴染みの八千代がクルクルパーの仕草をした訳が、なんとなく分かった気がした。

高校総体が終わると、東北六県拡大模試があり、二週間後にその結果が発表された。校内上位二十名の氏名が、職員室前の壁に張り出され、そこに彰吾の名前はなかった。

配布された成績票には、志望校日大文学部の偏差値がDと記されていた。つまり、合格の可能性はゼロに等しいのである。

(国立一期校は無理か……数学が一桁じゃどうもなんねえな)

彰吾は身もたえした。この状態では地元の二期校も難しいだろう。文学部日本史学科への憧れは、叶わぬ夢だと知らされ、目の前が真つ暗になった。

(私立なら国語と英語と日本史だけやればいいけど……)

嘆き節が口から漏れそうになる。母独りの働きで私学に進むなど、はなから諦めねばならぬ事情なのだ。

彰吾は背水の陣に立たされていた。

(考古学部も応援団も辞めて、数学と生物と化学に打ち込むしかねえな)

大学で考古学を学びたいという志望を貫くために、彰吾は、「一日の全てを受験勉強に差し向けよう、それで駄目なら……いや、その先はそのときのことだ」

と、自らに言い聞かせた。

彰吾を意気消沈させた理由は他にもあった。なにかと意地悪な八千代が、模試十傑の三番目に入っていたのだ。八千代はK大医学部を目指しているという噂で、彰吾の母は、

「お嬢ちゃんは新藤内科の跡継ぎになるんだよ」

と、日頃礼賛して止まなかった。

「あつたら冷たい女が町医者になったら、三日で潰れるべさ」

彰吾はそう嫌みを言ったが、八千代の好成绩はやけに眩しかった。

(中学のときは俺の方が上だったのに……)

いつの間にか八千代に追い抜かれたのかと記憶をたどったが、それは何の益もない負け犬の遠吠えでしかなかった。

進路指導部の小川先生に呼ばれた彰吾は、屠殺場に引かれて行く牛のような気分だった。

「このままだと国立は無理だね。親御さんに頼んで私立へ行かないかな？」

鼠というニックネームの小川先生は、小さな目を大きく見開いて彰吾を見た。

(窮鼠猫を嘯む……)

彰吾は場違いな諺を思い出した。

(俺は鼠に睨まれた落ちこぼれ猫か?)

返事に窮して、彰吾はネズミをにらみ返した。

「私立は無理です」

母子家庭の事情を吐露する気は無かった。

「……H大の教員養成課程なら、数学で二桁取れば合格すると思うけど」

小川先生が救いの手を延べてくれた。

「これからは数学をやらずに、他の教科で得点を稼ぐ作戦に出ようじゃないか」

数学担当の小川先生に見放された彰吾は、悔しいというより、目の前が開けたような気がした。

(二桁ということは最低十一点とればいいということか……)

それならぶつつけ本番でも何とかなるだろう、そう彰吾は樂觀した。

(文学部史学科が駄目なら、教育学部の社会科で帳尻を合わせるか)

「受験必勝法なんてうまい話はないけど、勉強方法を工夫するとか、生活リズムを変えてみるとういかもしれないね」

小川先生はそう言って面談を切り上げた。

その一言が彰吾に決断を促した。

「俺、応援団辞めるよ」

放課後の教室でそう切り出すと、竜介は横を向いたままだった。

「勉強に専念するんだ。応援団も考古学部も辞める……それしか方法がないんだ」

一方的にそう告げると、彰吾は窓の外を見た。べた風の安渡湾に、初夏の陽がチカチカと反射していた。

翌日、彰吾の下駄箱に手紙が入っていた。封筒にはマジック・インキで「決闘状」と書かれており、文面は、「許しがたいことあり。明日、午後三時。水源池公園の喫煙場^{モック}で待つ。竜」というものだった。

(番長のしめしをつける気か?)

彰吾はうんざりしたが、恐怖心はみじんもなかった。竜介より上背の勝る彰吾は、腕力では自分の方が上だと思っていたのだ。

(応援団を脱げるのに決闘か……ヤクザでもあるまいし、くだらない話だ)

そう呟きながらも、彰吾は竜介の挑戦を避ける気にはならなかった。

その日は朝から霧雨が降っていた。授業が終わると彰吾は、校門を出て水源池公園に向かった。



住宅街を通り過ぎて、公園の門をくぐり、なだらかな坂を上り詰めると、悪童たちが称する「モク場」である。周囲を桜の木に囲まれ、花の季節には酔客で溢れる場所だが、梅雨寒の今は人気がない。

竜介はモク場の真ん中に立ち尽くしていた。

「汝を同志だと思っていたんだ」

両手をズボンのポケットに突っ込んだ竜介が、彰吾を射すくめるような目で見た。

「汝は自分勝手な奴だな」

竜介は押し殺したような声で言った。

「俺にはよけいなことをしている余裕が無いんだ」

彰吾は竜介との間合いを計った。蹴りを食らわれないように用心したのだ。

「受験勉強しねえばねえのは汝だけでねえべ？」

竜介はポケットから手を出さない。

(まさか、メリケンサックか?)

素手の殴り合いのつもりだった彰吾はうろたえた。

しかし、それは彰吾の勘違いだった。竜介は殴り合いを避けるために、拳をポケットに封じこめていたのだ。

「汝さ手出す気はねえじゃ。ただ、白黒付けておきてんだ。

俺は汝を信じていた。でも、汝は俺を見捨てた。だから、口をきくのはこれきりだ。I have no relations with you. 汝とは絶交だ」

竜介は番長としてではなく、英研部の部長として、「言葉での決闘」を挑んできたのだ。

しかし、応ずべき英語を知らない彰吾は、

「仕方ねえべな」

と、怒鳴り返した。

霖雨が二人の肩をしとどに濡らしていた。

(了)

春の珈琲タイム

梶浦公平・作

品田浩・画

春の訪れ

その二人は、ここを忘れずに毎年飛んでくる燕とそっくり
に、春の陽気に誘われるようにしてやって来ました。横浜港
に着いたクルーズ船の乗客が新型コロナウイルスに感染してい
るというニュースが流れた一年後の春のことです。突然発生
したウイルス感染症は、すぐさま世界中に広がっていきまし
た。多くの人が亡くなって、暢気に構えていた日本でもコロ
ナの犠牲者があつという間に増えていきました。高齢者、持
病のある人たちが亡くなったというので、街から離れたこん
な山奥にいる私も、コロナに備えてマスクを外せなくなつて
いたときのことです。

「こんにちは」

大きな車から降りたマスクをかけた若い男の人が、私の姿
が目についたのだと話します。私は玄関先で、春の陽射しに
急かされて芽を出し始めた雑草を摘んでいるところでした。

「こんにちは、おばあちゃん」

助手席から若い女の人も降りてきて、笑顔で私に言います。
マスクをかけているのですが、目が笑っているのはわかるも
のです。集落の外れにあるこんな辺鄙なところへやって来る
人は滅多にいません。それでも、ときどき迷惑なセールの
人が来たりもします。年寄りが相手だと思つて、できそこな
いのいんちきな品物売りつけようとしたりします。そうい
うこともあるので、警戒しながらの愛想笑いで二人に挨拶を
返しました。

「あの丘にお墓があるんですね」

若い男の人、この人の名前は後で俊介さんとわかるので
がそう言うのです。

「ええ、うちのお墓ですよ」

お墓のセールスで来た人かもしれない。うちにはこのお墓
があるのにと思いつながら応えました。私の家は小高い丘のす
ぐ下にあつて、目の前の小径を上ると集落の墓地があります。
その一番手前にこちらを向いてぼつんと見えているのがうち
のお墓です。他のお墓は周りの木立で少し見えにくくなつて

いますが、うちのお墓だけは玄関先からも見えています。丘に向かう小径は少しきつめの坂になっていてるので、この頃はお墓へ行くのがちよつとしんどくなっているのです。

「おばあちゃんのところのお墓なんですね」

得心したように頷く俊介さんを、新しい墓石を売りつけようとするやはり胡散臭い人なのだと私は警戒しました。

「お墓のところから下を眺めると景色がいいんでしょう」

若い女の、この人の名前も後でわかることになるのですが美穂さんが私に言います。お墓からは川沿いに細長く伸びる集落全体を見渡すことができます。その川沿いにはソメイヨシノの木が数本あつて、サクラの花が見頃を迎えるところです。

「おばあちゃん、珈琲はお好きですか？」

俊介さんは突然そう聞いてくるのです。

「ええ……」

この人は墓石ではなく珈琲を売り込むつもりだと思つたのですが、私は珈琲が大好きなので曖昧な声を出してしまいました。珈琲を飲むのは私の日課のひとつです。インスタント珈琲ですが、砂糖もミルクも入れないのが私の流儀です。仏間の縁側で、お日様を浴びながら飲むのがなにより好きです。

「美味しい珈琲を淹れますから、三人で飲みましょう」

「見晴らしがいいお墓の前でお参りしながら飲みましょうよ、おばあちゃん」

俊介さんにつづけて美穂さんもそう言います。いきなり珈琲を飲もうと言われて、呆氣にとられてしまった私は返す言葉もありません。そんな私を尻目に二人は車に戻つてなにやら荷物を運んできます。俊介さんがその荷物を両手にぶら下げて坂道を上つていくと、

「おばあちゃん、ほら」

美穂さんは私が坂道を上るのが億劫になつて知っているのを知っているかのように、手を差し伸べてくるのです。この奇妙な成り行きなのに、私はなんだか嬉しくなつて美穂さんに手を引かれて坂道を上り始めました。

「あつ、そうだ。お家の中に他に誰かいらつしやらないですか？ その方の分も珈琲を用意しますよ、おばあちゃん」

「誰もいないですよ」

この家には私一人しかいません。一人になつてから、もうずいぶんの年月が流れてしまいました。

「それなら三人の珈琲タイムですね」

美穂さんは納得してそう言います。坂を上りきると、俊介さんはもうキャンブ用だという小さなテーブルと椅子を並べていました。お墓の前はそんなに広くはないので窮屈な感じですよ。今度は背負つていたりリュックからドリッブ式の珈琲セットなどを取り出して、俊介さんはテーブルに置きました。すぐに、ペットボトルの水を注いだ小さな薬缶をキャンブ用の小さいガスボンベに載せます。後はお湯が沸くのを待つば



かりです。その間に、俊介さんと美穂さんは並んでお墓に手を合わせました。こちらを向き直った二人を見て、私は思わず叫びそうになりました。俊介さんの右手には鉄の板が握られているのです。私はこれで殴られる。鉄の板の長さは三十センチあるかないかで、幅が五センチぐらい。厚さは二、三ミリあります。俊介さんの右手が振り落とされてそれが私の脳天に突き刺さるのだと思うと、身体が小刻みに震えてきました。

「お湯が沸いたみたいですよ。おばあちゃん椅子に座りましょう」

美穂さんがそう言うのですが、脅える私は身動きができなくなりました。振り込め詐欺の人が家にやって来て、それが強盗までになったりする物騒な世の中になったのはテレビなんかで知っていたはずなのです。それだというのに、見も知らない人たちに珈琲を飲もうと誘われて能天気についてきた私はなんという間抜けなのでしょう。なにかを要求された挙げ句、私はこの鉄の板で殴られてしまう。

「おばあちゃん珈琲入りましたよ。おばあちゃんはミルクと砂糖入れます？」

二人が話しかけてくる声はどこまでも優しいのです。美穂さんは立ち竦んでいる私の手をとって椅子に座らせます。珈琲を飲むのでマスクを外した美穂さんの肌はつるりとしていて、本当に可愛らしく優しい笑顔です。けれど、目の前の

テーブルにはさつきまで俊介さんが握っていた鉄の板が置かれています。まだ震えが止まらない私はそれをじっと見つめたまま、

「これ、危ないものじゃないですよね」

頭の上に振り落とされるのではないかと思っていたので、そう言ってしまうました。

「これ、僕と美穂のお守りです」

俊介さんはそう言うのです。

「お守り？」

「これが僕と美穂の命を救ってくれたことがあったんですよ。その日から、僕たちはお守りだと思つて手元に置いてます」

俊介さんはそう言いながら、鉄の板を優しく撫でました。

道路を走っていると車の前になにかがぶつかる大きな衝撃がして、車を降りるとその鉄の板がヘッドライトのガラスと車のボディの隙間もないところから半分ほど突き出ていたそうです。ガラスにも車のどこにも傷はなく、どこから飛んできたのか鉄の板が見事に突き刺さっていたそうです。

「もし、これがフロントガラスに飛び込んでいたなら大事故になっていたと思います。僕も美穂もどうなっていたかわからないし、僕らは命拾いをしたんだと思つたんですよ。それから車に乗るときはお守りだと思つて持ち歩いています」

「おばあちゃんの家の前までくると、この丘にお墓が見えたでしょう。お守りがここへ連れてきたように思つたりしていい

るんですよ、私」

俊介さんにつづけて美穂さんがそんなことを言うのです。

どう見ても二人は悪人とは思えないし、いい人のようだとは思うのです。けれど、鉄の板のことをお守りだと言ったり、それがこのお墓へ連れてきたと言つたりして、二人はやはり不思議な人たちです。もしかすれば、これから本格的に詐欺の話が始まるのではないかと、私はまた身構えました。

「このお守りを持って、私たち東京の近くから出かけてきたんですよ」

「東京から来たの？」

私は美穂さんに首を傾げながら訊きました。はるばる東京から、このお墓へ、しかも鉄の板に連れられて。そう話す二人はなにか得体の知れない宗教関係の人たちかもしれないと、今度は思つてしまいました。

「本当は東京の隣の県なんですよ」

美穂さんが東京隣の市の名前を口にしたので、懐かしさに駆られた私は、二人がなにかを企んでいるかもしれないと思つて警戒していたことも忘れて、つい珈琲カップに口をつけてしまいました。

「おばあちゃん、お味はどうですか？」

俊介さんにそう言われ、

「美味しい！」

私は思わず声を上げました。今まで飲んだことのない、本

物の珈琲だと思いました。

「良かったね、美穂。おばあちゃんに喜んでもらって」

「私たちはここを目指して旅に出かけてきたみたい。俊介さん、そう思わない？ こうしていると、どんどん落ち着いてくる。私たち、しばらくここにいましようよ」

美穂さんは俊介さんに背きながら話します。

「ほら、きれい！」

美穂さんが感嘆の声を上げて指さしたのは、下に見える田んぼです。その畦に紅紫の花が咲いているのが見えたのです。

「レンゲ草よ。今はあんな感じどころどころに咲いているだけになったけど、昔はここから見える田んぼは一面のレンゲ草のお花畑になって、それは綺麗なものでしたよ」

私は美穂さんに教えてあげました。

「私レンゲ草を見るのは初めてです。レンゲ草ってどんな匂いがするのかしら」

「珈琲を飲んだら行ってみようよ」

俊介さんもレンゲ草を見るのは初めてなのだ和美穂さんに話します。その二人からテーブルの上に置かれたお守りだという鉄の板に目を移すと、今度はそれがなんとも知れずに懐かしいもののように思えてきたのです。

「おばあちゃん、この辺でキャンプできるところありませんか？」

鉄の板にそつと手を伸ばした私に、俊介さんは突然そんな

ことを訊くのです。この辺りにキャンプ場があるなんて聞いたことはないので私はすぐに首を振りました。

「キャンプ場でなくても、テントが張れる場所ならどこでもいいんです」

俊介さんはそう言うのです。ここから川沿いの道を一キロほど遡ると、私たちがただ奥と呼んでいるうちの農機具なんかを置いている小屋があつて、その前がちょうど空き地になつています。山からの湧き水もあるので、テントを張るのにはうつつけのように思いました。それを話すと、

「そこいいと思います。おばあちゃん、そこをしばらくお借りしてもいいですか？」

俊介さんはそう言います。

「誰も行かないところだからなんの迷惑にもならないけど、しばらくいるとしてもなんにもないところですよ」

「車で街にも簡単に行けそうだし、それと、そこなら毎日ここに来て珈琲タイムができるじゃないですか」

マスクを外している俊介さんはそんなふうにして微笑みました。

その夜から俊介さんと美穂さんは奥でテント生活を始めました。そして、私は毎日珈琲タイムを楽しむことになりました。二人は手作りのサンドイッチを持ってくることもありました。お相伴に預かると、それはそれは美味しいものです。

「街のスーパーで買った食材の残りで作ったんですよ。美味しかったですか？」

美穂さんが言います。

「ええ、とっても。スーパーに並んでいるものよりずっと美味しかったですよ」

「私たちは料理を作る仕事をしてたんですよ。住宅地で小さなレストランをやっていたんだけど、コロナで店がなりたたなくなつて、店を畳んでいるときに鉄の板がこの車に飛び込んできて、助かった命でこうして旅に出たんですよ。だから、おばあちゃんに喜んでもらえる嬉しくなっちゃうな」

二人は料理人だという美穂さんのお話で、珈琲を本物だと思つたのもそれでなのだと私は納得しました。こんな山奥でお隣さんになつた私たちは、毎日の珈琲タイムでいろんな話をしました。お互いの名前も年齢も知ることになつたし、なんだか他人のように思えなくなつてしまいました。

「奥でのキャンプ最高ですよ、知代さん」

俊介さんは、私をおばあちゃんではなく知代さんと呼びます。

「知代さん、川のせせらぎと一晚中鳴きやまない蛙の声で気持ちが和みます」

美穂さんもそう話してくれます。

「それに、こうしてお墓の前で珈琲タイムをしているとそれ

こそ心は安らぐし、ここへ辿り着けて本当に良かったと思います」

二人はそんなことを言つて、毎日日本物の珈琲を淹れてくれます。それでも、雨の日にはお墓の前にテーブルを広げることができないので、二人には家の中に入つてもらつて、台所つづきの居間で私がお茶を淹れます。

「知代さんはいつも台所の勝手口を開けてるんですね。不用心じゃないですか？」

テーブル兼用で年中使っている電気炬燵の前に座っている美穂さんが、台所に立つている私にそう言うので、

「美穂さん、ちよつとこつちへ来てみて」

私は美穂さんを台所に呼んで、天井下の壁を指さしました。「えっ、なんですかこれ？」

「燕の巣ですよ」

そこには燕の古い巣が二つほど並んでいます。毎年、燕はこの巣に戻ってきます。戻ってくる巣を作り直して雛を孵します。それが可愛いので、燕が自由に出入りできるように勝手口は開けつ放しにしているのです。燕の親は子育てのために日中はひっきりなしに虫を捕まえてきます。暗くなるとようやく親も巣の中へ入るので、そのときに戸を閉めるのです。夜は物騒です。暗闇にまぎれて蛇が雛を狙つてやってくるのです。

「そろそろ巣作りが始まるので、じきにここへ飛んできます

よ。家中が賑やかにするので、私の楽しみ」

「そうなんです。知代さんにはそんな楽しみがあったんですね」

美穂さんは燕が家の中へ飛んでくる様子を見たいと話します。

「だけど、蛇なんかが入ってくれば怖いね」

俊介さんはそう言います。

「私はお父さんと違って蛇は苦手」

私は二人に亡くなった主人のことを話しました。私は主人のことをずっとお父さんと呼んでいましたが、主人は私のことは知代と名前で呼んでいました。お母さんと呼ぶことに抵抗があったのです。お父さんは捕まえた蝮を焼酎に漬けて、私たちはそれを切り傷や虫刺されによく使っていました。燕を狙う蛇なんかは素手で捕まえて放り投げていました。それと、蛇ではないのですが、鰻を捕るのも上手でした。それを見事に捌いて美味しい蒲焼きにしてくれたものです。

「二人がキャンプしているあの辺りの川でお父さんは鰻を捕ってましたよ」

私が話すと、

「あの川で鰻が捕れるんですか!」

俊介さんは目を輝かせて声を上げました。

「俊介さん捕ってみたいよね」

美穂さんも弾んだ声を上げます。

「お父さんが鰻を捕まえていたのはもうずいぶん前の話ですよ。今は砂防の堤なんかできたので、鰻はこんな山奥まで来ることができなくなつたとみなさんは話してます」

そう話しても、

「知代さんのご主人、どうやって鰻を捕っていたんですか?」

俊介さんも美穂さんも鰻を捕まえる気持ちになっています。私は納屋に行つてお父さんが使っていた仕掛けの籠を持ってきて二人に見せました。お父さんが竹を編んで手作りした、もう古びてしまった籠です。

「知代さん、これを僕たちに貸してください。今晚仕掛けてみます」

俊介さんはすっかり乗り気になつていて、籠を受け取るとキャンプをしている奥に行きました。けれど、やはり籠に鰻が入ることはなく、次の日もその次の日も二人はがっかりした顔で珈琲タイムにやつて来たのですが、次の日のことです。

「知代さん、鰻の蒲焼きです」

俊介さんと美穂さんは本当に鰻を持ってきたのです。鰻はまだいたのです。私は思わず笑顔になつてしまいました。

「俊介さんが捕まえたと思うでしょう。そうじゃないのよ、知代さん」

美穂さんが言います。

「それじゃ、美穂さんのなの？」

私が言うと、

「それも違つて、残念ながらこれはスーパーで買ったやつです」

美穂さんは笑いながらそう話したのです。

「捕れないとなると無性に食べたくなって、スーパーで買ったちゃいました」

俊介さんも笑つて話します。

「私騙されちゃった」

私がそう言うと、

「ごめんね、知代さん」

舌を出した美穂さんは、声を上げてまた笑います。そんな日は、一段と賑やかな珈琲タイムになります。

俊介さんと美穂さんがここへやつて来るのは珈琲タイムのときだけではありません。二人は私を病院へも連れて行つてくれました。四週間ごとに薬をもらうために通院するのですが、いつもは乗り合いタクシーを予約して来てもらつています。それで、私は二人に断つたのですが、どうしても連れて行くのだと言つて私を車に乗せてくれるのです。私も二人ののんびりと連れて行つてもらつた方が気が焦らなくていい気分です。それと、ここ数年スーパーで買い物をしたことがないと私が話すと、二人は何度もスーパーにも連れて行つてく

れました。いつもは週に一度やつてくる移動販売の車で買い物をしているだけなので、それも本当に楽しい時間でした。

「この鉄橋、だいぶ錆びてますよね。峠越えの国道を走つていたときにこの鉄橋が目についたので下を通り抜けて走つたら、いつの間にか知代さんの家の前に辿り着いたんですよ。だけど、電車大丈夫なのかな？」

俊介さんが鉄橋を見上げながら心配そうに言つたのは、車に乗せてもらつて病院へ行くときのことでした。川沿いの道を下つて集落を三つほど過ぎると国道に出るのですが、その手前に小さな鉄橋があつて、車はその下をくぐり抜けなければなりません。JR線なのですが、俊介さんが不安になるほどずいぶん古めかしくなつてしまいました。

「電車じゃなくつて、気動車がちゃんと走つてますよ。廃線になるつて話す人もいるけど、まだまだ大丈夫ですから」

「この路線は瀬戸内の方から日本海に抜ける路線ですよね」
美穂さんが言います。

「大事な線路ですよ。今も学生さんが通学で使つていられるでしょう。だけど、昔は海で捕れた魚を担いだ行商さんたちがいっぱい、車内は魚臭くてそれはもう大変でした」

私は汽車の中の懐かしい光景を思い浮かべながら話しました。昔はもちろん蒸気機関車が黒煙を撒き散らしながら走つていました。

「今はJRだけど、国鉄の時代はお父さんも私も働いていた

んですよ」

「えっ、知代さんとご主人は国鉄の職員だったんですか」

「職員じゃなくって、線路保全の工夫です」

私は慌てて俊介さんにそう言いました。お父さんと私は、農作業の合間にはいろんな土方仕事をしました。国鉄の線路を保全する力仕事もしたのです。うちの田んぼや畑は小さいので、それは大事な収入源でした。今こうして腰が曲がっているのはそんな力仕事をしたからかもしれない。

「知代さんとご主人が働いていた線路が廃線になったら、それは寂しいですよね」

美穂さんが、

「働き者だったんですね、知代さんは」

俊介さんが言います。

「私以上にお父さんは働き者でしたよ。工夫の仕事がないときは、田んぼや畑に悪さをする猪狩りに集落のみなさんと暇なして出かけてましたから」

そこまで話すと、

「知代さん。猪じゃなくて、夕べ僕たち鹿を見ました。動物園とか奈良公園とかにいるのが鹿じゃないですか。それが本物の野生の鹿だったのでびっくりです」

驚いたのだという顔で俊介さんが話し、

「そうなのよ、知代さん。峠の先にある道の駅の温泉に行った帰り、鉄橋をくぐり抜けて集落に入ったら、目を輝かせた

黒いものが道路にいたの。それこそ猪じゃないかと二人で話したんだけど、立派な角のある鹿だったの。それも四、五頭も群でいたのよ」

美穂さんも、それこそ目を輝かせて話します。

「この頃この辺では鹿が増えてるの。夜になると、鳴いてるのが聞こえるでしょう」

今はほとんど猪は見かけなくなっていて、家の周りに毎晩やってくるのは鹿なのです。朝起きると、糞や足跡がそこら中にあります。

「蛙の鳴き声に混じって聞こえる、あのなんだか奇妙な声はもしかして鹿なんですか？」

美穂さんが脅えるような顔で言います。

「夕べ鹿を見て驚いたけど、鹿は毎晩テントの近くにまで来ていたんだ」

俊介さんも不安げな声を出します。

「猪と違って鹿は人に向かって来ないから、大丈夫ですよ」

「そうなんですよ」

美穂さんは安心した顔に戻ったのですが、

「だけど、猪が出てきたら怖いですよ」

俊介さんがまたそう言います。

「それも大丈夫ですよ。鹿が多くなると猪はいなくなるって、お父さんは言っていましたから。猪を見かけなくなつたので、この頃は猪肉が口に入らなくなりましたよ」

私がそう話すと、猪肉を食べたことはないのだと二人は言います。鹿がこんなに出てくる前は家の冷凍庫にはお裾分けでもらった猪肉がいつでもあつたものです。今は二人に食べさせてあげることができません。

次の日の珈琲タイムにやつて来た二人は、昨夜もテントでは鹿らしい鳴き声が聞こえたと話します。それから毎晩、二人は鹿の鳴き声を聞いていたようです。もちろん、私の家でも聞こえていました。

「またレンゲ草を見に来ます。ここで珈琲を飲みながら知代さんとおしゃべりするのを楽しみに来ますからね。それまで元気でいてくださいね」

最後の珈琲タイムを終えると、俊介さんと美穂さんはそう言ってお墓の前に置いたテーブルと椅子を車に戻しました。

二人の車が家の前を離れて間もなく、今度はいつものように燕が勝手口から家の中へ飛び込んで来ました。

二度目の春

俊介さんと美穂さんは、去年の春は一ヶ月ほど奥でキャンプ生活をして帰っていましたが、約束通りこの春もやつて来ました。

「今年は真つ直ぐここを目指して来ました」

俊介さんは私の顔を見るなりそう言います。昨年は車中泊をしたりテントを張ったりして十日ほどかけてここへ辿り着いたそうです。初めは北陸へ行き、そこから大阪など関西を回り、普通の道を走ったり、高速道路を走ったりしてこまめに来たそうです。今年はここへ来ることだけを考えていたので、高速道路の最短の距離を走って来たと言います。それでも、お昼の珈琲タイムの時間を考えたので、昨夜は高速道路のサービスエリアの駐車場で車中泊をしたとも言います。それで、この時間に二人はここにいて、すぐにお墓の前にテーブルを広げると言います。

「知代さん、今年もレンゲ草きれいに咲いてますね」

そう言つて、美穂さんは一年ぶりの笑顔を見せてくれます。「あつ、そうだ。燕どうなりましたか？」

「ええ。俊介さんと美穂さんのように遠くからはるばるやつて来て、もう空を飛び回っていますよ」

私は俊介さんに笑い返します。

「去年も台所で巣作りをしたんですか？」

「俊介さんたちが帰つてすぐに巣作りを始めて、雛たちはちゃんと巣立つてここを飛び立っていきましたよ」

「今年もそうなるといいですね」

「ええ。もうじき勝手口からまた入ってくると思いますよ」

二人に応えているうちに、もう珈琲ができあがつたようです。私たちはお墓に手を合わせてから、椅子に座つて珈琲を

飲みました。

「やっぱり美味しい。一年ぶりなものね」

私は思わずそう言ってしまう。俊介さんが淹れてくれる珈琲は本物なのだとまた感心してしまいます。

「あのね、知代さん。私たち仕事を始めたんですよ」

美穂さんが突然そう話すのです。

「レストランを再開したの？」

「そうじゃないの。ほら、ここへやって来る移動販売の車があるでしょう。あんな感じでお総菜やサンドイッチなんかをこの車に積んで住宅地や団地を回ってるの。それと、こんなふうに珈琲を淹れたりして売り歩いているのよ」

「移動販売なのね」

「レストランをまた始めるまで、それでがんばろうと思っているんですよ」

俊介さんも言います。

「それじゃ、去年のようにのんびりとキャンプなんかしてられないわね」

「いや、今年も奥でキャンプさせてください。働くのは大事ですけど、休むのも大事なんです。僕たちはここでのんびりと過ごす時間を大切にしたいと思っています」

俊介さんがそう話すので、しばらくは三人での珈琲タイムを楽しむことができるのだと思って、私はほっとしました。

珈琲タイムが終わると、テントを設営してくると言って二

人は奥へ行きました。しばらくして戻ってきた二人は、私をスーパーへ連れて行くと言います。

「知代さん、今日はお家の前の庭でバーベキューをしましょうよ」

美穂さんが言います。それで、私は一年ぶりに、また二人に連れられて街のスーパーへ行くことになりました。

「この鉄橋まだがんばってますね」

国道手前の鉄橋をくぐり抜けると、運転する俊介さんが言いました。

「どんだん錆びてきてるでしょう。だけど、まだまだ大丈夫ですよ」

「知代さんの思い出深い鉄道だから、鉄橋もそうだけど廃線になったら困りますよね」

そう言ってくれる美穂さんに私は素直に頷いたのですが、何事も時の流れに連れて移ろう定めなので、この線路だって廃線になる日がくるかもしれないとも思うのです。

スーパーでバーベキュー用の食材をたくさん買いました。

お肉があまり得意でない私には鰯の開きも炭で焼けば美味しくなると買って買いました。食材だけでなく普段は買うことができないでいたものも、私は買いそろえることができました。

まだ陽のあるうちからバーベキューは始まり、俊介さんと美穂さんはお肉をたくさん焼いて食べます。私もつられて焼

いた鱈の干物や野菜をいつもの倍以上は食べていました。

「今晚も鹿出てくるかしら」

美穂さんがそう言ったので、私ははたと思い出したのです。猪肉があったのです。二人には鹿が出てくると猪がいなくなると昨年話したのですが、集落の人から、暮れに異にかかった猪の肉を久しぶりにお裾分けしてもらっていたのです。二人が猪肉を食べてみたいと話していたので、それを冷凍庫に保管していました。歳を取ると嫌なことがたくさん増えるのですが、物忘れもそのひとつです。美穂さんがバーベキューの話をしたときに猪肉のことはすっかり忘れていて、食べ終わろうとする今になって思い出したのです。

「忘れていたんだけど、二人のためにとっておいた猪肉があるの」

私は申し訳なく思いながら言いました。二人は大喜びでしたが焼き肉はもう十分だと言うので、残った炭火で味噌仕立ての猪鍋を作ることにしました。

次の日、奥からやって来た二人は、

「夕べはありがとうございました。知代さんの猪鍋が一番美味しかったです」

そう言うてくれました。二人は昨夜も峠の先の温泉に行っただけですが、鹿は見かけなかったと言います。川のせせらぎも蛙の鳴き声も聞こえなければ、鹿の鳴き声らしきものは

聞こえなかったとも言います。

「久しぶりだと言っても猪の肉が獲れたということは猪が勢力を盛り返してきて、鹿はいなくなってきたことなんだらうね」

「じゃあ、テントの近くに猪が出てくるってことになるの？ 俊介さん、今晚は車の中に泊まりましようよ」

脅え顔の美穂さんが俊介さんに言います。

「私には夕べも、朝方も鹿の鳴き声がちゃんと聞こえましたよ」

私が話してやると、美穂さんはようやく安心したという顔になります。

「心配事がひとつなくなりました。ここにいると本当に心が安らいでいくし、コロナのこともよその国の戦争のことも忘れて平和だなあって思っちゃう」

美穂さんは下の田んぼをゆっくりと眺めながら言います。

「そうだよ。ここは人が人を殺すような戦争なんか関係のない別天地だよ」

俊介さんがそう言うので、

「そんなことはないと思いますよ。ここだって戦争は無関係だと言えないと私は思ってますよ」

珈琲カップから口を離して、私は二人にそう言いました。

「私は亡くなった主人のことをお父さんと呼んでいただけ、主人は私のことをお母さんと呼ばなかったと前に話しまし

たよね」

私はお父さんのことを話し始めました。私は峠の向こうの町から人の紹介でここへ嫁いで来ました。まだ峠のトンネルもない大昔のことです。峠道は曲がりくねった険しい道でした。私が育つたのは兄弟姉妹の多い農家でした。紹介してくれた人はお父さんのことを優しい人だと言いましたが、この集落に昔から住んでいる家の人でなく、小さな田畑しかないのでまた貧乏をするかもしれない、それは覚悟しなさいとも言いました。それでも、顔合わせで会ったお父さんを見て、私はここへ来ようと思いました。働きづめで、それなりに苦労はしましたが私は幸せでした。

「お父さんは戦争の犠牲者の一人でした」

私は俊介さんと美穂さんにそう言いました。お父さんは終戦の少し前に軍隊にとられたそうです。その頃は私はまだ国民学校の生徒だったので、お父さんと私はちよつとばかり歳の離れた夫婦になります。戦地へ出かけることなく戦争が終わったのでお父さんは無事に復員できたのですが、辿り着いた瀬戸内の故郷は恐ろしい原子爆弾で焼け野原になっていました。帰るべき家も、母親も幼い兄弟たちも失ったお父さんは天涯孤独の身になりました。お父さんは家のあった場所から離れることができずに茫然自失の日々を過ごしていたそうです。偶然、遠い親戚筋の人がそんなお父さんを見かけ、その人の伝手でお父さんはこの集落へやって来ることになった

そうです。わずかばかりの田畑を耕す暮らしを始めたのですが、お父さんはここで戦争の傷を癒していったのです。

「子どもが私たちをお父さん、お母さんと呼ぶようになったので、私はなんのこだわりもなく主人をお父さんと呼びましたけど、亡くなった母親を思い出すのでお父さんは私のことをどうしてもお母さんと呼ぶことができなかったんですよ」

お父さんが戦争で負った心の傷を、私は二人にそんなふうに話しました。お父さんと私はここで穏やかに一生懸命生きてきましたが、この場所にも消し去ることのできない戦争の傷はあったのです。

「そうなんです。ごめんなさい、知代さん。私たち勝手に平和だとか、戦争は関係のないことだとか言ったりして」

「無責任なことを言ってたんですね」

俊介さんと美穂さんは私に謝るのです。

「そんな深刻にならないでください。今はこんなに穏やかな気持ちでお父さんのお墓の前にいられて、やはり平和なんでしょうから」

私は二人にそう話してあげました。そして、息子もこのお墓にはいるのだとも話そうかと思いましたが、二人があまりにもしよげ返っている様子なので今は話すのは止めようと思いました。

「知代さん、明日もご主人のお墓の前で珈琲タイムをしてもいいですか？」

まだ詫び足りないという感じで俊介さんは言うのです。

「もちろんですよ。私の楽しみですから、お願いします」

私が笑うと、俊介さんも美穂さんもようやく笑顔を取り戻しました。

「そうだ。ご主人の鰻の籠また借してくれませんか。今年も鰻捕りに挑戦してみたいと思ってるんです」

俊介さんが言います。

「今度はスパーの鰻でなくて本物の鰻を知代さんに見せるんでしよう」

美穂さんが笑います。

「どうぞ捕ってきてください」

猪も久しぶりに獲れたりしているので、鰻も籠に入ることがあるかもしれないと思って、私は籠を取りに納屋へ向かいました。

三度目の春

俊介さんと美穂さんがこの春もやって来ました。三度目の春です。

「ここへ来ると本当に落ち着きます」

俊介さんはそう言って珈琲を淹れてくれます。お墓を前にした珈琲タイムがまた始まりましたが、今年も俊介さんと美穂さんに息子のことも話したいと思っています。



「レンゲ草は相変わらず可愛らしいし、ここから見渡す風景はなにものにも代えられないよね」

美穂さんは嬉しそうに言います。そして、二人は頭上を掠め飛んでいく燕を見つけて声を上げます。

「峠を越える手前の国道沿いにあるサクラ並木が満開でしたよ」

美穂さんが話すと、

「知代さんの出身は峠の向こうの町でしたよね。明日、あのサクラ見に行きませんか」

俊介さんがそう言って私を誘います。

「サクラはここにも見えますからいいですよ。ほら、このサクラだって満開」

そう言つて、私は川沿いに咲いているソメイヨシノを二人に指さしました。

「このサクラも綺麗です」

美穂さんがそう言い、私たちは俊介さんが淹れた珈琲を飲み始めました。すると、近くの藪で、また春の初めなので綺麗にホーホケキヨと囀ることができずに、鶯がケキヨ、ケキヨと短く鳴いたのです。

「待ちに待ったという感じで、僕たちの珈琲タイムを祝つてみたいだ」

俊介さんが微笑みます。

次の日は薬をもらいに行く日だったので、俊介さんは峠の向こうのサクラ見物の代わりだと言つて私を病院へ連れて行つてくれました。鉄橋の下を通り抜けて国道へ出る手前で移動販売車とすれ違いました。

「私たちもこの車に惣菜なんかを積んで、団地のお年寄りたちのところへはりきつて行つてますよ」

美穂さんが移動販売車を振り返りながら言います。

「コロナが落ち着いてきていろんな店が再開してきています。それで、僕たちもまたレストランを始めるタイミングを計つたりしています」

俊介さんが言います。
「できますよ、きっと」

私は二人にそう言つてあげました。コロナがなくなることはないかもしれないけど、コロナへの対策が進んできているので、みなさんが気をつけることでいろんなことが復活しているということは知っています。きっと俊介さんと美穂さんのレストランも再開できると思います。

病院を出て薬局に向かうときに雨が落ちてきました。途中スパーへ寄つて買い物をするうちに本降りの雨になって、雨で濡れた帰りの鉄橋はとてももの悲しく見えます。今日の珈琲タイムはお墓の前ではできません。俊介さんと美穂さんに家の中に入ってもらつて、私がお茶を淹れることにしました。息子のことを話すいい機会になったと思つて、私は二人

を仏間に通しました。

「ご主人と、この方はどなたですか？」

美穂さんが仏間の鴨居の上にある写真に気づきました。

「お父さんと息子です」

「知代さんの息子さん、亡くなられていたんですね……」

「一人息子だったんですよ。息子もあのお墓に入っています」

美穂さんに言いました。

「そうだったんですね……」

「お父さんは一人でここへやって来た人だとお話ししましたよね。あのお墓は先祖代々の墓ではないので、お父さんと息子の二人だけのお墓になるんですよ」

「知代さん、お線香上げてもいいですか？」

美穂さんが言うので、

「どうぞ上げてやってください」

私は仏壇の蠟燭に火をつけました。

「お写真見ると、息子さんはまだお若かったんですね」

美穂さんがそう言い、私は息子のことを話し始めました。

「遅くにできた子どもでした」

結婚してもなかなか子どもは授かりませんでした。復員後しばらく被爆した場所に留まっていたので、放射能のせいかもしれないとお父さんは子どもを諦めかけていました。それが突然私は身籠もり、息子が生まれたのです。息子は申し分

なく、身体も勉強も人並みに育ちました。高校を卒業すると、息子は大阪に本社のある会社に勤めることになって、家に送りもしてくるようになりました。営業の仕事だった息子はいろんな町へ転勤することになりました。

「俊介さんと美穂さんが東京ではなく隣の県から来たとき、息子が最初に転勤したところだったので驚いたんですよ」

「そうなんですね」

「北陸の町にも、関西の町にもいました。最後は姫路の営業所でした」

いろんな町を転々としていたせいなのか息子はなかなか結婚できないでいました。それが、姫路の営業所に転勤すると、すぐにいい人に巡り会ったと言うのです。それで、その人をお父さんと私にどういう形で会わせたらいいか、それを相談するために一人で家に帰ってきました。姫路からなので、高速道路を使うとたいそうな時間はかかりません。息子がその人をいきなりここへ連れてくるのではなく、お父さんと私が姫路に出向くことに決めて、息子はその日を楽しみに帰っていききました。ところがその帰りの高速道路で息子は事故を起こして還らぬ人になったのです。事故は、息子が高速道路の壁面に突っ込んだ自損事故で処理されました。他の人を巻き込むことがなかったのが不幸中の幸いだったと話す人もいましたが、結婚を楽しみにしていた、ついさつき別れたばかり

の一人息子が亡くなったのです。主人と私は言いようのない悲しみと口惜しさを覚えまして。

「知代さんにはそんな辛いお話もあつたんですね……」
美穂さんは涙を流してくれませう。

「俊介さんと美穂さんがここを訪ねてくれて、お墓に手を合
わせながら珈琲タイムをしてくれるのは、お父さんと息子の
供養のためだと思つて私は嬉しかつたんですね」

私は二人にそう言いました。

「僕たちはなにも知らずにのほほんと珈琲タイムだなんて
言つたりしてたんですね……」

俊介さんの目にも涙が浮かんでいます。

「二人が初めてここへ来たときには私はものすごく警戒した
んだけど、二人が優しい人たちだとわかつてから、毎年こう
して珈琲タイムができればいいと楽しみにしてますよ。こん
な年寄りの相手をしてくれて本当に感謝しかないと思つてま
す」

「そう言つてもらえれば僕たちは嬉しいですよ。これからも
ずっと知代さんのところへ通いつづけたと思います」

「ありがとう、私も楽しみに待ってますよ。だけど、私はも
うこんな歳になつたので、いろんなことの始末をしなければ
ならなくなつていくでしょう。この家には後を継ぐ人がいな
いので、この家も、位牌も、主人と息子が入つてお墓も
守る人はじきにいなくなるんですよ」

そう話すと、俊介さんも美穂さんも悲しそうな顔になつて
私を見つめます。

「だけど、これからのことを私は決めてるんですよ」
私がそう話すと、

「親戚の人とかが後を継いでくれるようにですか？」

そう言つた美穂さんに私は首を振りました。私は二人に墓
じまいの話をしました。集落の中にあるお寺とお話をして、
もう決めていることがあるのです。私は亡くなる前に、主人
と息子のお骨を小さな骨壺に入れ替えてお寺の納骨堂に納め
ます。そして、亡くなった私のお骨もそうしてもらふことに
しているのです。お墓はここからなくなりませんが、私たち家
族三人はこの集落にいつまでも一緒にいることができるよう
になるのです。そう遠くない日、そうなることは決まってい
ます。

「……」

俊介さんと美穂さんはまたなにも言わずに俯うつむいてしまいま
した。お話しすることがなくなつた私も俯うつむき、三人がそうし
ていると、屋根を打つ雨音がやけに大きいのがわかります。
どしゃ降りの雨です。今晩はテントなんかには泊まること
ができないと思つて、俊介さんと美穂さんに家に泊まるよう
に話したのですが、二人は車の中で眠るのだと言つて奥へ戻つ
て行きました。

「明日の珈琲タイム楽しみしてますよ」

私はそう言つて二人を見送りました。

一の春

子育て中の燕が出入りする台所の勝手口からも、お墓を見上げる事ができました。お墓の前で春の景色を眺めながら、青空の下で俊介さんと美穂さんと珈琲タイムを楽しんだことが思い出されます。施設の窓からは小さく区切られた空しか見えません。私は施設のベッドで、過ぎ去つたこれまでのことをこうして懐かしんでいます。

昨年の春、俊介さんと美穂さんが帰つていつてから線状降水帯による洪水が発生して、この地域一帯も大きな被害を受けることになりました。線路が数力所で流され、今は鉄橋を気動車は走っていません。大雨で線路が流された二ユースを見た美穂さんからお見舞いの手紙が届いたのは、体調が優れなくなつていてご飯もあまり欲しくなくなつていた頃です。

私は元気でいられることはもうできないのだと思ひました。俊介さんと美穂さんにも話したのですが、墓じまいのときがきたのだと思つたのです。それで、まだ少しは動けるうちに自分で始末をつける決心をして、入退院の合間にお寺さんと墓じまいの段取りを決めました。

美穂さんから二度目のお手紙をいただいたのは、お父さんと息子のお骨をお寺の納骨堂にちょうど納め終つたときの

ことでした。赤ちゃんができたというお話と、お店を開くことができたというお話が書かれていました。私は嬉しくなつて、二人のもとに飛んでいつておめでとうと言いたくなつてしましました。美穂さんは翌年の春は赤ちゃんが産まれる頃なので珈琲タイムに出かけることができなくなつたと詫びていましたが、こっちの方こそ二人には謝らなければなりません。墓石屋さんにお墓の解体をお願いしたので、あの丘にはもうお墓はありません。そして、美穂さんからお手紙をいただいたから間もなく、私の身体は動き回ることもできないほどになつて、私は家を離れて施設に入ることになりました。俊介さんと美穂さんがもしやつて来たとしても、お墓はないし、私も家にはいないのです。二度とも美穂さんに返事を書くことはできませんでしたが、年賀状だけは施設の職員さんに代筆をお願いして出すことができました。職員さんには、赤ちゃんの無事なお誕生をお祈りしていると書き添えてもらいました。

区切られた窓から見える春めいた青空を見つめていると、本当にいろんなことを思い浮かべます。気になつていながらもありません。美穂さんは手紙の中に、生まれる子どもさんには私の知代の一字、「知」をとつて名前をつけるのだと俊介さんと決めていと書いてありました。私の亡くなつた息子の名前は知久です。私の「知」とお父さんの久志の「久」をとつて名付けたのです。なにか因縁めいたものを覚えてしま

います。そして、俊介さんと美穂さんがお守りだと言っていた鉄の板のことです。初めは恐ろしくも思ったのですが、次

美穂さんと私。美穂さんは、語りつくせないほど可愛らしい、懐かしい赤ちゃんを抱きかかえています。

には懐かしさみたいなものを覚えたものでした。こうして日がな一日ベッドに伏せていると、忘れていたことが頭にふと浮かんでくることがあります。知久が亡くなったときの事故現場に鉄の板のようなものが落ちていたというのを思い出したのです。俊介さんと美穂さんのお守りは知久の事故現場に落ちていた鉄の板なのかもしれない。どこをどう彷徨ってか、俊介さんと美穂さんの元に届き、知久のお墓に辿り着いたのではないかと思ったりするのです。三度の春を巡って、美穂さんのお腹の中に「知」の名前が付く子どもが宿つています。それと、俊介さんと美穂さんが初めて訪ねてきたときには、知久が暮らしていた町を次から次に巡って来たらしいので、やはり、なにかがそうさせていたのかもしれないのです。命の灯火がもうじき消えようとしている私は、呆けたようにそんなことばかり考えています。こうしていると、また眠りに誘われていきます……。

青空を切り裂くように、燕が掠め飛んでいきました。田んぼは畦^{あぜ}だけでなく、一面がレンゲ草のお花畑です。川沿いのソメイヨシノは今が盛りに咲き誇っています。鶯も本調子で、余裕たつぷりに声を伸ばして、気持ちよさそうに鳴いています。

春の珈琲タイムが始まりました。お墓の前には俊介さんと

了

続・白魔の顛末

船橋敏昭・作

石岡英夫・画

【三潮第48号】『白魔の顛末』あらすじ

令和某年十二月二十六日の夜、県警本部警務部会計課の係長である藤田達也が自宅でくつろいでいると、ガラスのテーブルに置いていたスマートフォンが激しくバイブした。それは、従妹の小島仁美が母の晃子——達也にとつては叔母——の急死を知らせる電話だった。

達也と、晃子の姉である達也の母・麗子は、取る物も取り敢えず県立総合病院の救命救急センターに駆けつけた。そこで、晃子を担当した内藤医師から、救急搬送される前後、並びに死亡宣告に至るまでの経過を聞いた後、変わり果てた姿の晃子と対面して悲嘆に暮れた。

葬儀社に依頼して晃子の自宅に遺体を安置した達也は、翌二十七日の午前六時頃、晃子の救急搬送に関わった葛西警部補の求めに応じて彼が箱長はこぢょうを務める附田交番に向いた。そこで達也は、葛西警部補から晃子が救命救急センターに搬送されるまでの状況について説明を聞き、内藤医師の説明とぴったり繋がったので、晃子が死亡した経緯については納得

した。だが、晃子のせいで迷惑をかけた小笠原運転手には本当に申し訳ないと思いつつも、もしも晃子の異変に気づいた小笠原運転手が、すぐに救命救急センターへ向かってくれたら……と、無念の思いを葛西警部補に吐露してしまった。

晃子の葬儀の翌日である十二月三十日、達也は青杜タクシーの本社を訪れた。小笠原運転手は休みを取っていたので、代わりに対応した営業課長の中山に未払いのタクシー代を払い、丁重にお礼とお詫びを述べた。達也に叱責され、罵声を浴びせられるものと覚悟していた中山課長は、思わぬ達也の紳士然とした言動に心の底から安堵した。

青杜タクシーからの帰途、ふと達也は、自分が中学生で、晃子が二十代だった時分のある情景を思い起こした。それは、いまは青い杜公園になっている場所に県立総合病院があった頃、腹膜炎の手術をして一ヶ月余り入院した達也の病室に、当時県庁の保健福祉部に所属していた晃子が勤務を終えると毎日やって来て、二時間ほど甲斐甲斐しく世話をしてくれた記憶だった。その折、バイクの事故で足に重傷を負い、達也

の病室にあとから入院して来た若者がいた。その若者は、はじめの数は、「痛い！痛い！」と苦痛を訴えて達也の睡眠を妨げていたが、快方に向かうとともに晃子に好意を抱き、誕生日や連絡先を聞き出そうとするなど、無遠慮な態度を日増しにエスカレートさせていった。すると晃子は、「わたし、警察官の夫と結婚しているの。ごめんなさいね」と、一撃で若者を黙らせた。そんな晃子の若々しく美しい顔を思い浮かべて、達也は男泣きに泣いた。

令和某年一月八日、北奥日報の見出し『不明の運転手、練炭自殺か 遺書で女性死闘を告白』。その記事によれば、「青杜署は七日、今月三日から行方不明となっていた(株)青杜タクシ一の運転手、小笠原明夫さん(52)が、六日午前七時頃、中岳ロープウェイ山麓駅付近に駐車していたワンボックスカーの車内



から遺体で発見されたと発表した。死因は、車内で練炭を燃やしたことによる急性一酸化炭素中毒。また、車内に本人の自筆によると思われる遺書があったことから、自殺の可能性が高いとみている。なお、その遺書には、先月二十六日にタクシ一の乗客だった市内の女性が急死した原因は、かつて自分が犯した罪にある、という内容が記入されていたので、現在、事実関係などについて同署が調べを進めている」とも報じていた。

この記事に達也は衝撃を受けた。なぜなら、彼は叔母である小島晃子の病気による急死に際して、小笠原運転手が最後まで誠心誠意行動してくれた善人だと信じていたからである。それ故に、安易に小笠原明夫を信じた自分の未熟さを痛感し、大いに落胆した。

小笠原明夫が叔母の晃子に対して犯した罪とはいったい何だったのか。県警本部の大きな窓の外で荒れ狂う吹雪を見つめながら、腕組みをした達也は思いを巡らせた。

◆ 『続・白魔の顛末』

令和某年一月八日。

正午を過ぎても天候は回復せず、窓の外では吹雪が続いていた。

藤田達也は、昼の休憩時間になっても全く食欲が湧かず、机上に広げた新聞の同じ記事を何度も読み返しては、時折大きなため息をついていた。

そこに突然、新聞の下に置いたスマートフォンがバイブしで着信を知らせた。ディスプレイには、『葛西警部補』と表示されている。それを見た達也は、きつと新聞記事のことだと直感的に思いながら画面をスワイプした。

「お疲れ様です。附田交番の葛西です。勤務中に電話して申し訳ありません」

「いえ、大丈夫です。今は、休憩時間ですから……。ひよつとして、今日の北奥日報の記事を読んで、電話をくださったのですか？」

「はい、そうです。あの小笠原明夫運転手が自殺したなんて、係長の叔母様の事案を担当した私にとっては大事件ですよ。もしも、記事に書いてあることが事実なら、私は小笠原運転手に騙されたことになりませう」

「騙されたという意味では、私も同じです。小笠原運転手を善意の人と信じて、感謝さえしていた訳ですから。ただ、青杜署では、練炭自殺の詳細な検証と併せて、小笠原運転手が車内に残した遺書に関する捜査もするでしょうから、私は少し様子を見てみようと思っています」

達也は敢えて落ち着いた口調で言った。

「わかりました。交番勤務の私では何もできませんが、警察

学校の同期で所轄の刑事課にいる者に少し探りを入れてみます」

「それは助かります。どんな些細なことでも、何か分かったら教えてください、ください」

「了解です。それでは、また」

スマホを机上に置いた達也は、全く予期していなかった叔母の死に関する疑念を必ず晴らそうと心の中で誓った。そして、それは彼が思春期から青年期にかけて密かに恋慕の情を抱いた一人の女性の弔い合戦でもあった。

二日後の一月十日。

珍しく好天に恵まれて、歩道に腰の高さまで積み上げられた雪に陽光が反射して眩しいほどの朝であった。

この日も達也は、誰よりも早く出勤して会計課の室内を清掃し、お茶やコーヒを淹れる湯の準備をした。無論、掃除は夜間に委託業者の清掃員が行うし、湯茶の準備も彼がする必要は無い。しかしながら、これは十五年前に亡くなった父親の言いつけで、採用以来県内どの所轄署に転勤しても二十



年以上続けてきた彼の日課なのだ。

朝の儀式を終えた達也は、自席で一息入れようとコンビニで買って来たカフェラテを啜り、北奥日報に目を通し始めた。やがて社会面に進んだ彼の視線は、小笠原明夫運転手の続報記事で釘付けになった。

『タクシー運転手は他殺か!? 青杜署は去る一月七日に発表した(株)青杜タクシーの運転手・小笠原明夫さん(52)の死因について、行政解剖を司法解剖に切り替えて実施した結果、当初発表した車内で練炭を燃やしたことによる急性一酸化炭素中毒に加え、頸部圧迫並びに急性アルコール中毒の複合的な要素があると変更した。これにより、今後は自殺・他殺の両面で捜査が行われることとなった。』

「なんだと！ いったい、どういうことだ?」

達也の叫び声が朝の静寂を一気に攪拌した。

「係長、だつ、大丈夫ですか?」

ちょうどその時入室しようとした会計課職員の武田理沙が、新聞を握ったまま仁王立ちになっている達也を見て、ドアノブに手を掛けたまま目を丸くして立ちすくんでいた。

「あつ、おはようございます。驚かせてごめんなさいね。大丈夫だから、どうぞ、入ってください」

達也は如何にもバツが悪いという顔で、皺くちやにした新聞を丁寧にたたみ直した。

その時、背広の内ポケットでスマホがバイブした。ディスプレイ

ブレイの表示は、『葛西警部補』だった。

「藤田係長、朝早くから申し訳ありません」

「いいえ。実は、今日の新聞記事の件で、いまこちらからお電話しようと思っていたところです」

実際、達也は葛西警部補への連絡を考えているところだった。

「今朝、新聞を読んだ時、私は思わず椅子から立ち上がって、大声で叫んでしまいました。台所で朝食の用意をしていた家内が、びっくりして居間に飛び込んで来ましてね。朝から何やってるのって、叱られました」

「いしましたが、私も職場で同じようなことをやってしまいました」

達也は武田理沙に視線を送りながら苦笑いをした。

「ここからは真面目な話ですが、今晚、お時間をいただけないでしょうか。一昨日の電話で申し上げた刑事課の同期に藤田係長のことを話したら、今晚、一時間ほどなら都合をつけて会ってくれると言っています。彼の方でも係長に伺いたいことがあるそうです」

「今晚ですね。何を伺っても伺います。時間と場所、お任せしてもよろしいでしょうか」

「もちろんです。決まり次第お知らせしますので、よろしくお願いします」

「こちらこそ、よろしく願います」

この時、達也は葛西警部補との間に何か絆のようなものを感じ始めていた。

その夜、七時過ぎ。冬の夜は早く、すでに日はとつぷりと暮れていたが、路傍に降り積もった雪を街灯が照らしていたので、街には不思議な明るさがあった。

達也は葛西警部補が会場所に指定した居酒屋『義経』の暖簾をくぐった。その店は県警から少し離れた場所であり、警察関係者と鉢合わせすることはまず無い。これから交わされる会話の内容を推量した葛西警部補の配慮が、いまの達也には嬉しかった。

「葛西で予約していると思いますが……」と告げると、愛想の良い女性従業員が店の一番奥にある個室に達也を案内して、「お連れ様がお見えになりました」と言いながら襖を開けてくれた。

「お待ちせして申し訳ありません」

靴を脱いで部屋に入った達也は、葛西警部補ともう一人の屈強な体格の男性に対して、畳に両手をついて深々と頭を下げた。

「係長、堅苦しい挨拶はやめてください。こいつが電話でお話した同期の片岡です」

葛西警部補が隣の大男の脇腹を小突いた。

「初めまして、青杜署刑事課の片岡です。今夜はお時間を

作っていただき、ありがとうございます」

片岡刑事が厳ひがつい外見のわりには丁寧な物腰だったので、達也の緊張は少しだけ緩んだ。

挨拶が終わったところに、先ほどの女性従業員が飲み物のオーダーを取りにきた。葛西警部補は生ビールの中ジョッキ、片岡刑事と達也はウーロン茶を注文した。

「食べ物の注文は、少し話をしてからにするから、呼ぶまでは誰も来ないようにお願いします」

「はい、わかりました」

飲み物とお通しを運んで来た先ほどと同じ女性従業員が、真摯な眼差しを葛西警部補に向けて一礼した。

従業員が襖を閉めるのとほぼ同時に片岡刑事が開口した。「あまり時間がありませんので、早速で恐縮ですが、これをお読みください。これは、先日遺体で発見された小笠原明夫が、小島晃子様とそご家族様宛に書いた遺書をコピーしたものです。実は、この他に、青杜タクシーの社長宛のものもあるのですが、小島晃子様のご死亡に関わったお二人のみお読みいただくという条件付きで、なんとか管理官から閲覧の許可が降りたのは、この一通だけでした」

硬い表情でそう言うと、片岡刑事は達也と葛西警部補にA4判の数枚の紙をホチキス留めした書類を手渡した。

「わかりました。謹んで読ませていただきます」

達はテーブル越しに両手で恭しくそれを受け取ると、さっそく読み始めた。葛西警部補も達也とほぼ同時に書類に視線を下ろした。それは、便箋に手書きで書かれていた。

「私、小笠原明夫は、いまから三十年ほど前に小島晃子様に対してストーカー行為を繰り返し、遂には暴行傷害の現行犯で逮捕、起訴されました。そして、裁判では懲役二年、執行猶予三年の判決をいただきました。

執行猶予期間中は、保護司の後藤正吾先生から熱心にご指導ご鞭撻を賜り、私なりに全力で更生に努めました。

執行猶予期間満了後は、北海道に渡って心機一転人生をやり直したいと思い、後藤先生に紹介していただいた箱館のタクシー会社に運転手として就職しました。以来、二十五年間、無遅刻無欠勤で勤め上げました。

そして、一昨年、母が脳梗塞で倒れたのを機に帰郷し、青杜タクシーに入社しました。

去る十二月二十六日の夜、ホテル青杜で客待ちをしていた私のタクシーに、あろうことか小島晃子様が乗車なさいました。三十年ぶりでしたが、私はルームミラー越しの女性が晃子様だとすぐにわかりました。声も昔のままでしたから、私はとても嬉しくなりました。でも、小島晃子様は私に全く気づきませんでした。だから、私も目的地まで晃様を送り届けて、お別れすれば良かったのです。

ところが、そこで魔が差しました。目的地近くのショッピングセンターで停車した際に、私は若気の至りで三十年前に犯した罪を直接謝りたくなり、後部座席に振り向いて『晃子さん、お久しぶりです』と声を掛けてしまいました。それを聞いてきよんとした晃様は、私の顔を一瞥してから助手席側に表示してある運転手の氏名を確認したようでした。すると瞬時に恐怖の表情を浮かべ、『あなたは、まさか、あの小笠原……』と震える声で言ってから、胸を押さえて苦しみ出しました。私は驚いて車を降り、後部ドアを開けて、『晃子さん、大丈夫ですか？ しつかりしてください！』と何度も大声で叫びました。しかし、晃様からは何の反応も返ってきません。すでに事切れてしまったようでした。

私は、そこでハッと我に返りました。小島晃様にとつて、私は三十年ぶりに遭遇したストーカーで、絶対に会いたくない人間だったのです。それなのに私は嬉しさのあまり声を掛けてしまいました。それによって小島晃様の体調が急変し、死亡したことに間違いありません。

私は、どこまでも罪深い人間です。小島晃子様並びにご家族様に対し、この一命をもってお詫びいたします。

小笠原 明夫

一度読み終えた達也が、最後のページのみをもう一度読み終えたところで、葛西警部補も読み終わり、大きく息を吐いた。

「結構長い文章でしたが、藤田係長は、どういう印象をお持ちになりましたか？」

片岡刑事が達也の瞳を覗き込むように返答を求めた。

「私は中学生の時に県立総合病院で腹膜炎の手術を受けて入院しました。叔母の兄子は、県庁での勤務が終わると毎日のように病室にやって来て、面倒を見てくれました。その時、確かに事故で足に大けがをした若者と同室でした。ケガの痛みが治まったその若者が、兄子叔母に好意を抱き、叔母がやって来るのを楽しみにしていたのは、中学生の私にも分かりました。退院後、私は自宅と学校を往復する生活に戻りましたから、兄子叔母が若者、つまり小笠原明夫からストーリー行爲を受けて、裁判にまでなっていたなんて全く知りませんでした。しかし、いまになって思うと、母は叔母と度々電話で話していて、母は小声で深刻な口調だったように思います。中学生の私に余計な心配をさせまいと考えてのことだったのでしょう。それが、三十年も経ってから兄子叔母が小笠原明夫に遭遇するなんて。しかも、それがきっかけで帰らぬ人となった。なんとという悲劇でしょうか。ただ、私にはこの遺書を小笠原明夫が自分で書いたとは到底思えません。文章のクオリティーが高過ぎます。もう少し簡潔に短い文章で書くはずです」

達也の話に聞き入っていた片岡刑事が大きく頷いた。

「私も藤田係長と全く同じ印象を受けたよ。最後の一文以外

は、遺書というよりも反省文か始末書みたいだ。ひよつとしたら、事の顛末を知っている何者かが筆記したのではないだろうか？」

葛西警部補の言葉にも片岡刑事は納得の表情を浮かべた。

「どうもありがとうございます。実は、これを小笠原明夫自身が遺書として書いた確率は極めて低いという科捜研文書科からの報告が上がっています。また、もう一通の青杜タクシーの社長宛の文書には、『採用時に会社へ提出した履歴書には【賞罰なし】と虚偽の記載をし、私に前科があることを申告しませんでした。誠に申し訳ありませんでした。』という記述があるのですが、かつて保護司の後藤正吾氏からの薫陶を受けて更生し、以後二十五年間を箱館市でタクシー運転手として精勤した小笠原明夫が虚偽の履歴書を提出したというのは、どうも解せません。我々捜査員も、『これらは小笠原本人が書いた遺書ではない』という判断を共有しています。更に、小笠原明夫の練炭自殺にも疑義があるため、明日、青杜署に不審死事件として帳場が立ちます。今夜ここで、本案の関係者であるお二人から意見を伺って、見立ての補強ができました。本当にありがとうございます」

そう言って、片岡刑事は表情を引き締めた。

「つまり、小笠原明夫は当初の自殺から、何者かに自殺に見せかけて殺害されたという見立てに変わったということだね。メンツを重んじる上層部が、そんなこと、よく許したな」

ビールを飲み干した葛西警部補が、据わった目を片岡刑事に向けた。

「警察もひと昔前とは違うよ。いまのキャリア組は、小さいときから間違つたらすぐに過ちを認めて謝るという教育を受けているからね。あとで嘘がバレる方が悪い結果を招くことは、先輩たちを見て学習しているよ」

「ふーん、それはいい傾向だ。ところで、ホシの目処はついているのか？」

「今夜のところは具体的なことは言えないが、勝ち目があるから帳場が立つという事で勘弁してくれ。ただ、当然、藤田係長の叔母様が亡くなった経緯についても捜査するので、全容が判明したら必ず係長にお知らせします。その時は、もちろん、お前にも同席してもらうよ」

「片岡、よろしく頼む！」

「ああ、全力を尽くすよ」

葛西警部補と片岡刑事は、がっちり握手をした。

「片岡さん、どうか、よろしくお願いします。叔母の無念を晴らしてください」

感極まった達也は、二人の握手を両手で包み、落涙した。

結局、料理を頼まずにお開きにしたので、主人と愛想の良い従業員には、「次はたくさん注文しますから、今夜は許してください」と葛西警部補が詫びて店を出た。

達也は居酒屋の前で、署に戻るといふ片岡刑事、どこかで

飲み直すという葛西警部補と別れ、キュツ、キュツと自分が踏む雪の音を聞きながら家路に就いた。その間も彼の脳裏では、今しがた居酒屋で読んだ遺書が映像化され、中学生だった自分が出会った二十代の小笠原明夫の顔がぼんやりと浮かんだ。

「もしも、あの遺書に書かれていることが事実なら、晃子さんは小笠原に殺されたようなものだ。三十年前に俺があんな奴と同じ病室に入院したばかりに……」

達也は白い息を吐きながら無性に腹を立て、雪道を早足で歩いた。

達也が帰宅したのは午後九時を少し回っていたが、母の麗子はまだ寝室に入らずに居間でテレビのニュースを見ていた。

「おかえり」

麗子がテレビから視線を外して達也に声を掛けた。

「ただいま」

達也は麗子に無愛想な返事をした。

「そんな怖い顔をしているのは、きょうの新聞記事のせいだね」

凶星を突かれて返答に窮した達也は、わざとらしく柔和な表情を作つて麗子の向かいに座つた。

「母さん、その新聞記事について、俺に何か言うことはないかい？」

「そうだね。新聞記事というか、晃子と小笠原明夫のことをもっと早くお前に話しておくべきでした。本当にごめんなきい。でも、小笠原明夫が晃子にした犯罪行為を知れば、正義感の強いお前が自分のせいだと思つて苦しむから、達也には絶対に話さないでほしいと、晃子に頼まれていたんだよ」

麗子はこれまで見せたことの無い神妙な顔を達也に向けた。「それはそうだろうけど、俺が成人したタイムイングで教えてくれてもよかつたんじゃないの？」

その答えを持ち合わせていない麗子は、達也から視線を外して唇を結んだ。

「いまは、そんなことどうでもいいよ。母さんの口から小笠原明夫が晃子叔母さんに何をしたのか、聞かせてほしい」

「うん、わかつた。少し長い話になるよ」

そこで達也は小さく頷いた。

「おおよそのことは、もうわかつていると思うけど、事の始まりは、お前が中学生の時に県立総合病院で腹膜炎の手術を受けた四日後だった。その日、わたしはお前に付き添つていたんだ。夜の九時頃に交通事故で左足に重傷を負つた若者が、応急処置を終えて私たちがいた二人部屋に運び込まれて来た。その若者が小笠原明夫だよ。麻酔が切れた彼は、一晩中、『痛い！痛い！』と訴えて、何度も夜勤の看護婦さんを呼んだから、わたしは一睡も出来なかつた。何日かして警察官が二人来て、彼にいろいろ訊いていた。カーテン越しに聞こえて来

た話の内容で、若者が暴走族のメンバーで、仲間たちとバトカーに追跡されている時に転倒して負傷したことがわかつた。だから、わたしはお前を一人にしておきたくなくて、晃子に県庁の仕事が終わつてからでいいから、達也のところへ寄つてほしいと頼んだんだよ。まさかあの若者が晃子に執着して、ストーカーになるなんて考えもしなかつたからね」

そこで麗子は緑茶で喉を潤し、話を続けた。
達也は一切口を挟まずに母の話に耳を傾けた。

「晃子に対する小笠原明夫のストーカー行為は、お前が退院してから三ヶ月ほどしてから始まつた。左足がまだ完全に治つておらず、杖をついて歩いていたら小笠原明夫は、県庁から帰宅する晃子の後ろを少し離れてつけて歩く程度だつた。ところが、足が回復するにつれて彼の晃子に対する行動は、

面と向かつてしつこくデートに誘つたり、自宅アパートの玄関ドアを叩きながら大声で叫ぶなど過激になつていった。そして、ついに決定的な事件が起こつた。日没後に帰宅する晃子を待ち伏せしていた小笠原明夫が、街灯の無い暗がり得意になり晃子の前に飛び出し、怯んだ晃子を力ずくで近くの公園まで引きずつて行つた。もちろん、晃子は大声を出して全力で抵抗したが、若い男の力に敵うはずもない。その時、ちようど警邏中の警察官が晃子の悲鳴を聞いて駆けつけたので、晃子は軽いケガを負つただけで済んだのよ。もしも、近くに警察官がいなかつたら、どうなつていたか。考えただけ

でゾツとするわ」

「小笠原は現行犯で捕まったの？」

もう我慢できない、という勢いで達也が訊いた。

「いいえ。警察官の姿を見て、彼は脱兎のごとく逃げたそうよ。でも、兎子が自分を襲ったのが、かねてより警察にストーリー行為で相談していた小笠原明夫であると明言したので、警察はその夜のうちに逃亡しようとして青杜駅にいた小笠原の身柄を押さえることができた。青杜警察署に連行された小笠原明夫がすんなり罪を認めたので、警察は直ちに暴行傷害罪で逮捕したのよ」

「小笠原は何度も兎子叔母さんにストーリー行為を繰り返して警察から嚴重注意されていたのに、たった一度の暴行傷害罪は、あっさり認めたんだね」

「それがね。あの時担当した刑事さんが言うには、『裁判で



彼女に会えるのが楽し

みだ』と言って、小笠

原明夫は嬉しそうにニヤニヤしたそうなのよ」

「それは気味が悪いな。

彼は筋金入りのストーリーだったというわけか」

そこで達也は、さきほど居酒屋で片岡刑事が読ませてくれた小笠原明夫の遺書と、いま母から聞いた話の内容に大きなギャップを感じた。無論、麗子の話の方が限りなく真実に近いと彼は確信していた。

「実はさつき、小笠原明夫が死亡した件を捜査している所轄の片岡刑事と会って来たんだ。あまり詳しい話は聞けなかったけど、どうやら小笠原は自殺ではなく、何者かによって殺されたらしいんだ」

「ぎょうの新聞には、自殺と他殺の両面で捜査するって載っていたけど、他殺の可能性が高いのね。それって、やっぱり兎子が亡くなったことと関係あるのかしら？」

「俺は、九分九厘関係あると思うてる。だから、今夜会った片岡刑事にも、絶対に兎子叔母の無念を晴らしてほしいと頼んできたよ」

それを聞いた麗子の目から大粒の涙が溢れ出るのを見て、達也も目頭を熱くした。

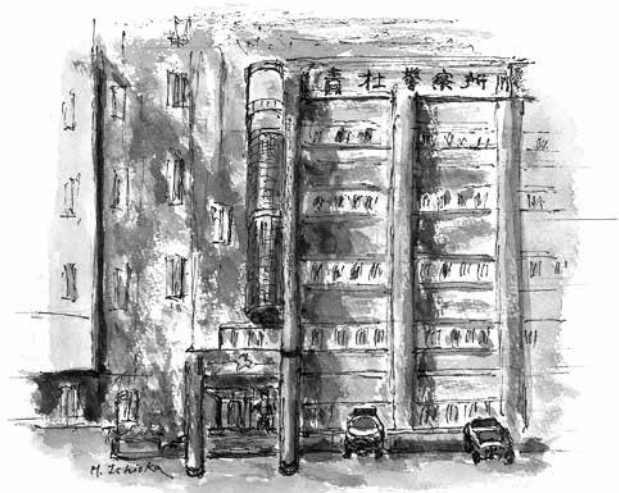
「県警にいても俺は警察官じゃないから、具体的にできることは何も無い。あした、青杜警察署に捜査本部が立つそうだから、俺たちはいつもの生活を送りながら、捜査の進展を待つしかないよ」

「ああ、そうだね。でも、これまでの事を何も知らない仁美にも、小笠原明夫のことをわたしから話してもいいよね」

「もちろんいいよ。仁美は叔母さんの一人娘だからね。捜査

の結果次第では、仁美にとっては母親の死と深く関わりのある事件になるかもしれない」

麗子にそう言った達也だったが、この時の彼には、この事件の背景に潜む人間の欲深さを推し量ることは到底できなかったのである。



翌一月十一日、午前九時。

所轄署である青杜警察署内に県警捜査第一課と青杜署刑事課の私服警察官三十名、それに鑑識課員五名と警察事務職員三名を加えた総勢三十八名で、『タクシー運転手不審死捜査本部』が設置された。無論、その一員に片岡刑事もいた。

附田交番の葛西警部補によれば、本来、青杜警察署刑事課捜査第一係の係長である片岡警部補を刑事と称するのは適当ではない。刑事とは、巡査部長及び巡査の階級にある私服警察官の呼称だからである。だが、片岡警部補本人が自分を叩き上げのデカだと自負しているそうなので、達也も葛西警部補に倣って片岡刑事と呼ぶことにしたのである。

帳場が立った三日後に、片岡刑事から『自分は県警捜査第一課の部長刑事とバディを組んで、小笠原明夫に関する捜査を担当しています』とのメールが入ったが、その後、片岡刑事からの連絡はパツタリ途絶えた。

二週間ほどして葛西警部補からは、「私から片岡に捜査の状況を訊いてみましょうか」との電話があった。しかし、達也は捜査に忙殺されている片岡刑事の姿を想像し、「彼を信頼して一任したのだから、こちらからの連絡は控えましょう」と返事をした。

二月十八日。

昼休みの時間帯に片岡刑事から達也のスマートフォンに、

明日の夜七時に居酒屋『義経』に来てほしいとメールが届いた。そのメールには、「もちろん、お店の予約は、葛西警部補に頼みました」とも記されていた。達也にとつては待ちに待った連絡だった。片岡刑事からどんな情報もたらされるのか、期待と不安が交錯する達也であった。

翌二月十九日。

真綿のような大粒の雪が空からまっすぐ降ってくる中を、午後六時四十分に県警の正面玄関を出た達也は、徒歩で居酒屋『義経』に向かった。

待ち合わせの午後七時ちょうどに暖簾をくぐった達也は、一番乗りで前と同じ一番奥の個室に案内された。それから、数分のうちに葛西警部補と片岡刑事がやって来て、三人の役者が揃った。

相変わらず愛想の良い女性従業員に飲み物だけを運んで貰った。きょうは、葛西警部補も他の二人と同じウーロン茶を頼んだ。

達也と葛西警部補は、固唾かたずを呑んで片岡刑事が話し始めるのを待った。

「今夜も雪の中をご足労いただき、ありがとうございます。この前、ここでお目にかかってから一ヶ月以上何もご報告できず、申し訳ありませんでした」

そう言つて、片岡刑事は深々と頭を下げた。

「とんでもありません。我々も警察の人間ですから、帳場が立ったあとの片岡刑事の繁忙ぶりはだいたい想像できます。そんな中こうしてご連絡をいただき、心から感謝しています。そうですね、葛西警部補」

「全く藤田係長と同じです。片岡、忙しいのに本当にありがとうございます。今夜、お前からどんな話が聞けるのか、俺、かなり興奮しているよ」

大げさではなく、葛西警部補のテンションはかなり上がった。

「では、そのご期待に応えて、まだ世間に発表されていない情報をお話しします。なお、私からお二人に未発表の情報をお伝えすることについては、捜査本部の実質的な責任者である県警捜査一課の阿部管理官から特例として許可をいただいています」

「それは有り難いですね。阿部管理官は、なかなかの人物で、しかも切れ者。次の捜査一課長の最有力候補のようです。その阿部管理官のお墨付きなら片岡刑事のお話を心して拝聴いたします」

そう言つて達也が居住まいを正したので、葛西警部補も背筋を伸ばした。片岡刑事は持参したビジネスバッグの中からタブレットを取り出して電源を入れた。

「捜査本部は、まず始めに、不審死を遂げた小笠原明夫本人について調べを進めました。その際、彼の死亡時に遺体のす

ぐ側から発見された遺書、そして去る一月八日に藤田係長からお伺いした三十年前に県立総合病院で小笠原明夫と同室に入院した際のお話も参考にさせていただきました。

さて、ここから話の本筋に入ります。小笠原明夫の両親は、彼が小学校四年生の時に離婚しており、一人っ子だった彼は母親と二人、アパートで暮らすことになりました。つまり、母子家庭となったわけです。母親は昼の弁当屋のパートだけでは生活できず、夜にはスナックのホステスも始めました。やがて母親より十歳も年下でスナックの常連客だった男がアパートに転がり込んで来て、三人の生活が始まります。明夫はその男から騷と称して虐待されるようになり、危うく命を落としそうになりました。児童相談所は明夫の命を救うために、彼を児童養護施設に収容し、そこから学校へ通わせます。父母の離婚からそこに至るまで小学生の明夫の意思に耳を傾ける大人は一人もいませんでした」

「交番でもこういうケースには度々遭うけど、結局、一番の被害者はいつも子どもだよ。明夫もそういう子どもの一人だったわけか」

情に厚い葛西警部補らしい発言だが、達也は賛同できなかった。

「しかし、明夫と同じような境遇に育っても全く犯罪性を持たずに成人する人間の方が多いはずですから、私は明夫に同情する気にはなれません」

「まあ、お二人とも、あまり私情を挟まないでください。これは捜査に

関するお話なので、あくまでも客観的に聞いてください」

そう言って、片岡刑事は話を続けた。

「中学生になると明夫は市内の高校生不良グループと交流を持つようになりました。そのグループが暴走族と繋がっていたので、明夫も自然な流れでバイクの後ろに乗り、暴走行為に参加して、何度も補導されています」

「その延長線上でバイクの転倒事故で左足に重傷を負い、中学生だった私と同じ病室に入院したということですね」

「そのとおりです」

片岡刑事は達也に感情を抑えて短い返事をした。



「小笠原明夫は入院中に藤田係長の叔母である小島晃子さんと出会い、一方的に好意を寄せました。そして、退院後にストーカー行為を繰り返したというのは、小笠原の遺書に記述されていたことですが、県警のデータベースによれば、実際のストーカー行為はとても苛烈であり、最終的には暴行傷害罪で逮捕・起訴されています。その時、彼は満二十二歳でした。裁判では、懲役二年・執行猶予三年の判決が下り、実刑を免れました。その後、小笠原は再犯なども無く、執行猶予期間を満了しています。暴走族のメンバーで跳ねつ返り者だった小笠原明夫が執行猶予期間を無事に満了できたのには、彼を担当した後藤正吾という保護司の尽力が大きかったようです。後藤さんは従業員百人ほどの水産加工会社の経営者ですが、長年にわたり保護司としても献身的な活動をなさった方です。その後藤さんが小笠原明夫を担当したのは、まだ四十二歳で保護司一年目の時でした。つまり、保護司になって最初に担当したのが小笠原明夫だったのです。それで、後藤さんは先輩の保護司の助言を仰ぎながら、毎週一回は必ず彼と面談を行いました。また、度々自宅に招いて奥様の手料理も振る舞いました。同業者に相談して小笠原の就職先まで世話をしています。そして、二年が過ぎた頃に小笠原が、『執行猶予期間が終わったら、北海道に渡って人生をやり直したい』と自ら後藤さんに申し出るまでに更生させたそうです」

「それで後藤さんは、どうなさったのですか？」

達也は後藤保護司に興味津々の体である。

「後藤さんは、残り一年の執行猶予期間中に小笠原明夫の真意を見定めて、彼の覚悟を信じたと捜査員に言ったそうです」

「では、暴走族上がりで暴行傷害までやった小笠原明夫が、執行猶予期間が終わったあとで、実際に北海道に渡ったということか？」

葛西警部補は明らかに疑心暗鬼の表情を浮かべた。

「そうです。後藤さんは、小笠原明夫の保護司としての職責を全うしたあとも、出来る限り彼の支援をしています。旧知の仲である箱館のタクシー会社の社長に頼み込んで、小笠原を運転手に採用してもらいました。その会社で小笠原はタクシー運転手に必要な二種免許を取得させてもらい、結婚こそしませんでしたが、無遅刻無欠勤の真面目な勤務態度で落ち着いた生活をしていました」

「小笠原明夫は、育った環境のせいで不良になったり暴走族に入ったりしたようですが、根は真面目な人間だったのかも生まれませんね」

それまでの片岡刑事の話を聞いて、達也が抱いていた小笠原明夫への先入観は少しだけ軟化した。

「ところが、一昨年の冬に小笠原明夫の母親が脑梗塞で倒れて、介護が必要な状態となりました。彼は随分迷いましたが、母親が住むこの街へ帰ってきたのです」

「なるほど。それで、箱館市で長年従事してきたタクシー運転手に青杜市でも就いたのか。でも、前科があるのに、すぐに採用されるなんて、なんか解せない!？」

「ホントにそうですね。私も葛西警部補と同じ疑念を持ちました」

葛西警部補が口にした素朴な疑問に達也も賛同した。

「そうなんです。捜査本部でもその点について、当初は保護司の後藤正吾さんか箱館のタクシー会社の社長の口利きで青杜タクシーに入社したものと当たりを付けて裏取りをしたのですが、すぐにそうではないことがわかりました。そこで、捜査本部では県警捜査二課の協力を仰いで、青杜タクシーの内偵を行いました。その結果、昨年の株主総会で退任した青杜タクシーの元取締役から、ここ数年のうちに東京の大手タクシー会社との業務提携を経て、最終的には青杜タクシーが子会社化されるという情報を得ました。ただ、大手タクシー会社からは、青杜タクシーが運転手不足を解消し、車両の稼働率を上げて営業収益を向上させなければ業務提携は行わない、という条件が出されているとのことでした。そこで、捜査本部がさらに内偵を進めると、本件に繋がるとも興味深い事実が判明したのです。そうです。おそらく、今お二人が思いついたことです」

そこで片岡刑事は葛西警部補に発言を促した。

「俺が考えたのは、小笠原明夫のように前科がある者でも、

模範囚で刑期を終えたり、真面目に執行猶予期間を満了した者をタクシー運転手として積極的に採用しているのではないかと、ということだ」

「私も葛西警部補と同じ考えです。ただ、万一この採用方法が露見した際には青杜タクシーの大きなダメージになりますよって、社長や専務など会社の上層部が関与しているとは考えにくい。ひよつとしたら、運転手の採用を担当している社員が独断で行っていることではないでしょうか？」

達也も率直に自分の推察を述べた。

「さずがお二人は的を外しませんね。現在、青杜タクシーで運転手の採用を担当しているのは、営業課長の中山靖彦という四十九歳の男です。彼はなかなかの野心家で、大手タクシー会社からは、無事に子会社化が進めば常務取締役に取り立てるとの言質を取っていると、直近の部下に漏らしていました」

「うーん、きな臭いですね。私は梶子叔母の葬儀の次の日に、その男と会いました。かなり有能な社員という印象を受けましたが、いま思うと狡猾な人間なのかもしれません」

そう言いながら達也は中山の人相風体をはつきりと思い出した。

「捜査本部は、小笠原明夫の不審死に中山靖彦が何らかの関わりを持っているのではないかと方向性でまとめたのですが、確かな物証が無く、関係者の証言も乏しい段階では、

中山靖彦を引つ張るのは無理でした。そんな時に、我々の内偵で中山の社内不倫の相手であることが判明していた営業課の秋元早苗という事務員が自首して来ました。そして、『小笠原明夫の遺体と一緒にあつた遺書を中山課長に指示されて書いたのは私です』と自白したのです。彼女は、ペン習字で師範の免状を持つており、小笠原明夫の筆跡を真似て書いたとも言っています」

「えー！ それ

はまた、驚きの展開だ。なんで、その秋元という事務員は、中山靖彦の愛人でありながら彼を裏切る行動に出たんだ？」

葛西警部補は



ボルテージを上げて、片岡刑事に尋ねた。

「彼女の言葉をそのまま借りるなら、『新聞記事を読んだ時に、中山課長が小笠原運転手を練炭自殺に見せかけて殺したに違いない』と思いました。東京の大手タクシー会社との業務提携を控えている大事な時に、前科のある小笠原明夫を独断で運転手に採用した。そして、その小笠原が過去に犯した罪のせいで、タクシーに乗車していた女性客が急死してしまつた。そんなことがバレたら、業務提携も子会社化もパーになつてしまいます。もちろん、自分の常務取締役への昇進も……。だから、中山課長は小笠原運転手一人に全ての責任を負わせるために、自殺に見せかけて殺害したんです。その殺人に私が書いたものが遺書として利用されたかと思うと、とても怖くなつたので自首しました』と言うのです。無論、秋元早苗からは正式に供述調書を取りました」

「それで、中山靖彦に任同をかけたんですね」

達也は確信の眼差しを片岡刑事に向けた。

「はい。二月十五日の午前八時から六名の捜査員が青杜タクシーの本社前に待機して、出勤して来た中山靖彦と配車係の細川進哉に任意同行を求めました。細川は素直に従いましたが、中山は『自分は無関係だ』と言って抵抗しました。そこで私が『営業課長としてお話を伺うだけです……』と言うと、渋々任同に応じました。署に到着後の午前九時から、バディの部長刑事と私が中山の、別の二人の刑事が細川の取

り調べを始めました。午前中、中山が完黙を通したので、午後の取り調べの冒頭で、小笠原明夫が遺体で発見される四日前の一月二日の夜に中岳ロープウェイの駐車場に止まっていた乗用車から入手したドライブレコーダーの動画を見せました。そこには、ワンボックスカーと軽自動車が増車場に入ってきて、軽自動車だけが出て行くところが映っていました。科捜研での画像解析により特定された車のナンバーを照会したところ、ワンボックスカーは小笠原明夫が所有する車、もう一台は青杜タクシーで配車係を務めている二十代の男性社員・細川進哉が所有する車であることが分かりました。ワンボックスカーを運転して来た者が軽自動車の助手席に乗ると、二台の車が来てから九分二十八秒後に軽自動車だけが駐車場を出て行きました。ただし、二人とも黒いマスクをつけて、頭には深くフードを被っていたため、中山靖彦と細川進哉だと特定することはできませんでした。動画を見た中山の顔は明らかに強張り、動揺しているように見えました。彼の完全黙秘は夕方まで続きました。中山の取り調べは、あくまでも任意によるものなので、その日は夕方の五時に終了して、警察車両で自宅に送り届けました。翌日は朝八時に中山を迎えに行き、任意による取り調べを続けました。相変わらず中山は完全黙秘を続けていましたので、これでは埒が明かないと判断した部長刑事と私は、阿部管理官の許可を得て、細川進哉が『ドライブレコーダーの動画』で、軽自動車を運転して

いるのが自分、助手席に乗っているのが中山課長です。正直僕は厭でしたが、中山課長から小笠原運転手の遺体を捨てに行くから手伝え、と命じられて断れませんでした。でも、僕は自分の車を運転しただけで、小笠原運転手の遺体には触れていません」と自供したこと。更に、一昨日、秋元早苗が自首をして、『中山課長の指示で小笠原運転手の遺書を書きました』と自供したことを中山に告げました。すると、彼は程なく顔面蒼白になり、全身を痙攣したようにブルブルと震わせて机に突っ伏したのです。五分ほどして少し落ち着きを取り戻した中山靖彦は、対面にいた私に焦点の定まらない視線を向けて、『わたしが、小笠原運転手を殺しました』と蚊の鳴くような声で、それでもはつきりと言いました。この自白をもって、中山靖彦が小笠原明夫を殺害した犯人と断定して直ちに裁判所に逮捕状を申請し、二月十六日午後四時二十分に殺人及び死体遺棄で逮捕しました。また同時に、細川進哉を死体遺棄幫助で逮捕しました」

「完落ちだな。殺人事件の犯人を発生から一ヶ月半で挙げるなんて凄い！ 県警本部長賞、間違いなしだ。さあ、ビールで乾杯しよう！」

葛西警部補は破顔して、居酒屋の従業員を呼ぼうとした。「葛西、乾杯は少し待ってくれ。逮捕の後の取り調べで中山が自供した小島晃子さんに関することを藤田係長に報告させてほしい」

「わかった。そもそも、この事件で係長と俺が一番知りたいのは、そこだからな」

「どのような状況で叔母が亡くなったのか、ぜひ聞かせてください」

片岡刑事は深く頷くと、真摯な表情で語り始めた。

「小島晃子さんがお亡くなりになった十二月二十六日は夕方から猛吹雪でした。そのためか、青杜タクシーでは衝突事故が重なり、配車センター長は事故係の応援に出張りました。

結果、配車センターには業務経験の浅い細川進哉だけが勤務に就いていました。そこで、急遽、営業課長の中山が配車センターの応援に入ります。夜の九時過ぎになって、小笠原運転手から慌てた様子で無線が入りました。その内容を聞いた中山は烈火の形相でマイクを細川から奪い取り、無線越しに『その女と昔何があったか正直に言え！』と叫び、それに答えた小笠原運転手を『お前、何をやってるんだ！』と激しく叱責しました。そして、『いま県立総合病院の近くにいるから、すぐに救命救急センターに行きたい』と懇願する小笠原に、『その女が死んだのを確認してから、マニュアルどおり最寄りの波打交番に行け！』と厳命しました。その命令を小笠原が渋ると、『もしもその女が救命救急センターで息を吹き返したら、お前、どうなると思う!?』と恫喝しました。結果、小笠原は中山の命令に従い小島晃子さんの心肺停止を確認してから波打交番に向かいました。あとは、小笠原が葛西

警部補に説明した通り、波打交番を経由して附田交番に行った訳です」

「そいつは惨いな。小笠原が救命救急センターに直行していれば、係長の叔母様は助かったかもしれない」

「では、中山は愛人の秋元早苗や配車係の細川進哉を手下にして、自分の保身や出世のために小笠原運転手を自殺に見せかけて殺し、私の叔母も見殺しにしたということですね」



片岡刑事と葛西警部補のやり取りを聞いた達也が、湧き上がる憎悪に目をギラギラさせながら言った。

「本日午後六時から県警捜査一課長がこの事件についての記者会見を行いました。明日、テレビや新聞で一斉に報道されるはずですが、私は、これから捜査本部に戻って、犯人を検察へ送致する準備をします。だから、葛西、生ビールは当分お預けだ。無論、係長の心中を思えば、乾杯なんかできない」

「ああ、そうだな。すまなかつた」

葛西警部補はバツ悪そうに頭を叩いた。

「片岡さん、怒涛のような忙しさの中で、葛西警部補と私のためにわざわざ時間を割いていただき、本当にありがとうございます。お陰様で叔母の最後を知ることができました」

達也は片岡刑事に深々とお辞儀をした。

居酒屋の主人といつも愛想の良い従業員には、「今回も飲み物だけでごめんなさい。近いうちに、この三人で必ずお酒を飲みに来ます」と詫びて、達也たちは居酒屋『義経』を出た。この前と同じように、片岡刑事は青杜署に向かい、葛西警部補はどこかで飲んでいくと言つて達也と別れた。

冬の夜空を見上げると大きなオリオン座が煌めいていた。

達也は自宅へ向かう雪道を歩きながら思った。

「十二月二十六日の夜が猛吹雪ではなく、こんな夜だったら」

「ホテル青杜で梶子叔母さんが別のタクシーに乗っていたら」

「小笠原明夫が青杜タクシーの運転手ではなく、尚且つ中山靖彦が同社の営業課長ではなかつたら」

「俺が中学生の時に腹膜炎で県立総合病院に入院しなければ」

このうち、どれか一つでも現実であれば、梶子さんは死なずに済んだかもしれない。

「ちくしょう！」と達也は叫び、雪の塊を右足で蹴った。

そうこうしているうちに自宅に近づくと、母の麗子が家の前に積もった雪を片付けているのが見えた。そのシルエットは梶子叔母にとても似ていて、達也の心を僅かに震わせた。

達也は、母がどんなに怒り、悲しみ、慟哭しても、さきほど片岡刑事から告げられた中山靖彦の悪行と小笠原明夫の悪行をそのまま伝えなければならないと心に決めていた。それは、彼の心の底から絶えず湧いてくる中山靖彦への復讐心が、この先良からぬ行動に自分を駆り立てるかもしれないと畏怖したからであるし、何より、亡くなった梶子叔母への供養になると信じていたからであった。

(了)

青森県高等学校文化連盟文芸部 令和七年度入賞作品

〔詩部門〕 最優秀賞

おかしなきもち

青森県立青森北高等学校 三年 竹谷 芽実

今日の疲れを溶かしたくて
チョコレートを口に入れる
生ぬるく溶けていく
甘さが喉を焼く

私の陰口を溶かしたくて
アイスクリームを口に運ぶ
冷たく溶けていく
頭の奥が痛む

将来の不安を溶かしたくて
キャンディーを口に含む
ゆつくり溶けていく
だけど待てずに噛み砕く

辛い過去を消したくて
笑顔に滲む涙を舌に載せる
なかなか溶けない
飲み込むのが怖い

本当に
消えてしまつていいのかな

おかしにまかせて
わたしが
とけて
きえていく

〔短歌部門〕 最優秀賞

青森県立八戸西高等学校 三年 高畑道磨
胎内の温度はきつと味噌汁の湯気と一緒に優しさだった

青森明の星高等学校 三年 船橋拓実
躑躅咲く原爆ドームの空青し

〔俳句部門〕 最優秀賞

〔短歌部門〕 優秀賞

青森県立八戸西高等学校 三年 脇坂望杏
洗っても残る弁当箱の角祖父にやさしくすればよかった

〔俳句部門〕 優秀賞

青森県立弘前南高等学校 一年 荒谷萌衣
衣替え初めて通す姉の服

青森県立八戸西高等学校 三年 山形彩羽
AIの回答はみな励まして叱責したのは母だけだった

青森県立八戸中央高等学校（定） 二年 阿部稜也
悩み事灯の輪に溶けて盆踊り

青森明の星高等学校 三年 舘田果歩
書いて消し消しては書いてをくり返し私の全てを見ていた消しゴム

東奥学園高等学校 三年 吉川大栄
円盤の最後の投てき夏終わる

〔散文部門〕 小説 最優秀賞

夢になる日まで

青森県立青森高等学校 二年 水谷 美祐

『……わあ……っ！』

それを初めて見たのは、数年前。

眼前に広がる世界はきらきらしていて、きれいでかっこよくて、どうしようもなく魅力的だった。

たくさんの人の声が重なる歌、激しいのになやかな動きもある踊り、そして頭のとっぺんから足の指先まで洗練された演技。

『すてき……私もやりたい』

私が目にした歌劇の舞台は、その瞬間に私の夢のすべてになったのだ。

「ただいまー」

家に帰ると、お母さんが作ってくれているであろうカレーライスの匂いがした。

「おかえり瑞希、お疲れ様」

リビングに入ると、予想通り、お母さんがお玉で鍋をぐる

ぐるかき混ぜている。この時間にお母さんが帰ってきてるってことは、今日は残業がなかったらしい。それはなによりだと思いつながら、私は重いリュックをソファの近くに降ろした。

「もうご飯できるけど、食べる？」

「食べる！」

帰ってくれば、あたたかい料理。

優しく迎え入れてくれるお母さん。

私は恵まれていて、幸せな家庭に生まれたのだと、いつも実感していた。

「お父さんは？」

「もう少しで帰ってくると思うよ」

きつとお父さんは、帰ってきたらまずお風呂に入って、大きな声で気持ちよさそうに浴槽に浸かるのだろう。そんな穏やかな日常を想像するけど、私の心は一向に晴れない。

……その理由は、もうわかっている。

『月末までに提出すること』

先週渡された進路志望調査用紙。

私は明確な将来の夢を持っていないながら、希望する未来を進路志望欄に書けないでいる。

「……ねえ、瑞希」

「……なあに」

私の考えていることを察したのだろうか。真面目な声で話しかけてきたお母さんが、スプーンを動かす手を止めた。

相変わらず察しいい母だ。

「やっぱり、歌劇の道は諦めた方がいいと思う。現実的じゃないよ」

「……」

そう、それこそ私が進路志望調査用紙を前に手が止まってしまう理由。

私の夢は、歌劇の世界で生きること。

小さい頃、人気の劇団の歌劇を見たことがきっかけ。その夢を追うため、私は地元の歌劇教室に通って歌劇を学んできた。

でも、大学はこのまま夢のとおりに進学していいのだろうかと迷ってしまうのだ。

大学選びは将来に直結してくる選択だ。ここで歌劇を選べば、後からやっぱりなし、なんてことは許されない。

そして歌劇は、夢を叶えることも、それで生きることもしんどい道であるがために、私はどうするべきなのかわからない。

私はこのまま夢を追いつづけていいのかな。それとも現実を考えて諦めるべき？

悩んで悩んで、そのせいでカレーライスを食べるスプーンが進まない。

「提出までまだ時間があるのよね、瑞希？」

「……うん」

「じゃあ今度、進路のことゆっくり話し合って考えよう。お父さんも混ぜて」

私は視線を斜め下に落として頷いた。お母さんが私を気遣ってくれているのはわかるのに、力強く頷くことができない私が嫌になってしまう。

そんな私の姿にため息をつきながら、お母さんも無言で食事を再開したのであった。

「あ、おはよう瑞希……ふあ……」

翌日。登校すると、友達の千紗が挨拶してくれた。彼女は珍しくあくびをしている。

「おはよう千紗。眠そうだね」

「眠いんだもん。昨日夜遅くまで進路の話し合っていて」

「……そっか」

千紗は美術系の大学を志望しているはず。

そういうえば、千紗も進路志望調査の紙を渡されたときには苦い顔してたっけ。

「美大は相当辛いつて言うよね。美大行っても行かなくても美術って厳しい世界だし、やっぱり現実的じゃないかもか思ってたさあ」

「わかる。私も、歌劇で生きていけるかなって考える」と……

私たちは困り眉の顔を見合わせてため息をついた。まった

く、本当にどうしたものか。

「でもそれが理由で夢をあきらめるのも嫌だしなあ……」

私は思わずもう一度ため息をついた。すると、そんな私を気遣ってくれたのか、千紗は雰囲気を切り替えるように手を一度叩いて微笑んでくれる。

「とりあえず、瑞希は進路調査用紙の提出期限の直前、歌劇の定期公演でしょう？」

「うん。千紗もそのちよつと前に美術のコンテストがあるって言ってたね」

「そうそう、決めるのは、そのあとでいいんじゃない？」

「……そうだね。うん、ありがとう」
お母さんも言っていた。まだ提出期限まで時間があるんだから、ゆつくり話し合えばよいと。それはその通り。進路については真剣に考えなくちゃ。私の、将来を決めるんだ。

「……………」

私の十年後の景色に輝かしい歌劇の舞台がある可能性は、いったいどれほどだろう。

……………息を吸う。

吸って、吐いて、前を見据えて、力強い声で宣言するのだ。

「……【私は諦めないよ、リゼ】」

【わからないわ、アリスーあなたのそんな夢、叶うわけがないのにー】

その日の放課後。歌劇教室にて、私は次の公演に向けてとあるシーンを練習していた。

私が演じる主人公のアリスが、たとえ叶わずとも夢を追いつめ続ける、と親友のリゼに宣言するところだ。

【夢を諦めたことで後悔したくないの。そうするくらいなら、叶わなかったことを悲しみながら死ぬほうがよっぽどいいよー】

……私は最近、この重要なシーンの演じ方が掴めずにいる。なぜかと言うと、それは私がアリスに共感できていないからだ。

役者は経験した感情しか演じられないとはよく言ったものだ。夢を追いかけるという決断ができていない私は、決断したアリスを上手く演じられない。

【私は空を飛んでみたい！ 鳥みたいに自由に、雲のように悠々と】

……私は、歌劇の世界に進みたい。あの日見た希望のように輝かしく、あの日抱いた夢のように煌びやかに。

——でも、本当にそれでいいの？

「んー、一旦ストップ！」

「……っ」

私の未来への不安を強く想ってしまったその瞬間、監督の声が歌劇の世界を止めた。

……しまった。今はアリスになりきるべきなのに、私のこ

とで悩んじゃうなんて……これじゃだめだ。

「瑞希ちゃん、アリスの言葉にもっと力強さが欲しいな。なんかまだ迷って聞こえる」

「……っ、はい」

「それからリゼ役は……」

やっぱり私の演技はあまりよくなかったらしい。指摘を受けて、私は少し沈んだ気持ちになりながら台本を手に取る。

希望いっぱいにとメモ書きされているアリスのセリフ。空を飛びたいと夢見る少女の決断は、未来への期待に溢れているのだ。

迷いながら話しては、いけない。

「……もっと、頑張らないと」

進路決定も、歌劇も、だ。

「……ふう、よし」

私は改めてやるべきことを定め、頬をべちんと叩いて気を引き締めた。

「すみません、さっきのところ十二行目からもう一回お願いします」

「わかった、じゃあそこから。スタート！」

「【私は諦めないよ、リゼ】……！」

「……ただいまー」

「おかえり瑞希。お疲れ様」

結局、私は満足のいく演技ができないまま家に帰ってきた。決断をしたあとって、いったいどんな気持ちだろう。すつきり？ 不安は残ってる？ 強く主張したいのかな。それも落ち着いてる？

それがわからなくて、迷いが残ったままの演技しかできなかったのだ。

「あつ……ねえ瑞希、千紗ちゃんは進路どうするって言ってた？」

「え……千紗？」

今日の練習の反省をしていると、お母さんが心配そうに切り出してきた。

「私は歌劇は諦めた方がいいとは思ってるけど、まだ悩んでいるでしょ？ 千紗ちゃんも同じ芸術系の大学を志望してたから、千紗ちゃんの進路なら参考になるかなって」

断固反対の姿勢は保ちつつ、お母さんは私の迷いを尊重してくれるらしい。

心配そうな顔を見て、私はずっとお母さんの主張を無視し続けていることが申し訳なくなり、なんとなく視線を逸らした。

「いや……まだ決まっていって言った」

「……そう」

重たい空気が満ちる。

ちよつと古くなったガスコンロの炎の音しか聞こえない中

で、お母さんはばつと優しく笑って話を変えた。

「ご飯できるまでまだちよつとかかるから、勉強しておいで」

「わかった。できたら呼んでね」

ご飯がまだだと聞いて、正直ほつとしてしまった。もうこれ以上進路について話したくない、なんて思ってしまったからだ。

「……だめだなあ」

階段をのぼりながら、ぽつりと呟いた。

……今、私は、アリスと本当に真反対だ。

「どうすればいいんだろう……」

部屋に入って、壁に背を預けてずるとしゃがみ込む。

本番が近いのに上手くない自分が情けない。うじうじ悩みたくないのに、どうしてもアリスは私にはできないんじゃないかと思ってしまう。

……そういえば、千紗はどうしてるかな。もうすぐ作品の提出期限だつて話だけだ。

満足のいく作品は、できただろうか。

「……あ」

すると、ちょうど千紗からメッセージが送られてきた。

『ちよつと話さない？ 進路のことで』

『私上手くいつてなくて、考え整理したい』

「……千紗」

千紗も、上手くいつていないのか。

同じ状態で安心したような、でも千紗には苦しんで欲しくなくて悲しいような。

でもたしかに、誰かと話して自分の考えを整理するのはいいかもしれない。

『電話する？』

私は千紗に、そう返した。

『……もしもし？』

千紗は、すぐに電話をかけてきてくれた。上手くいつていないのは本当のようで、声いつもの元気が感じられない。

『千紗、大丈夫？』

『……ちよつと、やばいかも』

大丈夫か、なんて聞いておいて、私だつて大丈夫じゃない。やっぱり進路選択で悩まず苦しまず、なんて無理なんだなと実感した。

『あの、ね、瑞希。私……何を描きたいのかわからなくなつてきちゃつた』

『……千紗』

千紗の声は震えていて、今にも泣き出しそうだった。

生き生きと絵を描く千紗の姿を知っている私としては、何が描きたいのかわからないと嘆く千紗が痛ましくて堪らない。

『……もう、苦しいだけなの』

『考えるのが？』

『そう。未来のこと考えるの、不安で苦しくて嫌なの……っ』

……でも、考えるしかない。

そんな現実が私たちの首を絞めて、息が苦しい。呼吸ができなくなりそうだ。

『今の気持ちを描いても、いろんな絵の具をぐちゃぐちゃに乗せただけの紙にしか見えないの。……ずっとそう。もうわかんないよ』

『……そ、っか』

……わかる、気がした。

私だって、最近はただただ文字を読み上げるだけの舞台人形になった気がしていた。筋書き通りに話して体を動かすだけじゃ、世界なんて作れるはずがないのに。

『いくら夢を持ってたって、ここは現実なんだから意味ないんじゃないかって……』

夢と現実。

私たちが望む世界と、私たちに突きつけられる世界。

その二つはいつも私たちを板挟みにしてくる。現実というものには本当に優しくない。

そんなことを考えながらずっと悩んで黙っていると、千紗は少しだけ鼻を吸り、無理に明るい声で謝ってきた。

『ごめん、一人で話して……でも、もう私、どうしても瑞希に聞いてもらいたくて……』

『気にしないで。話してくれてありがとう』

もう大丈夫、と聞こえたけれど、とても大丈夫そうには思えない。

だけど、私には千紗にかける言葉は見つけられなかった。同じような悩みがある私が何か言っても、説得力がないだけ。

……私じゃ、力になれない。

『……瑞希は、どう……？』

『私、は……』

自分だけ話すのが申し訳ないと思ってくれたのだろう。千紗は私に話を振ってきた。

でも正直なことを言ってもいいのかわからなくて、なんとなくでもってしまおう。

『上手くは、いつてない……かな。その、私も迷いが出ちゃって、上手くできない』

『……そっか』

千紗も、何を言えばいいのかわからないといった様子だった。

そのせいで私たちは何も話せなくなってしまい、奇妙な沈黙が電話越しに落ちた。

『……夢って、苦しいね』

『……そう、だね』

もう苦しみたくないよ、って。

そう言ったのは、果たして私たちのどちらだったのだろうか。

『でも、私、夢を諦めきれない』

「苦しそうな声で、嗚咽と一緒に、千紗が吐き出した。

『悩むのが痛くて苦しいけど、それでも諦めたくない』

『……』

私は、またもや何も言えなかった。

でも、今感じたのは苦しみや悩みだけじゃない。

千紗が吐き出した苦しみが、妙に私にひっかかるのだ。

……諦めたくない、か。

【私は諦めないよ、リゼ】

『……』

【夢を諦めたことで後悔したくないの】

……本当は、わかってるんだ。

夢を諦めれば、絶対に後悔するってこと。ずっと舞台上

にいる人を羨ましがって、やればよかったって思うであろう

ことも。

やらずに後悔するよりも、やって失敗して悲しむほうがい

いってというのは、いろんなところで聞いたことだ。

私は舞台上に立ちたい。輝かしく、煌びやかな世界で生きて

いたい。

それでも悩んでしまうのは、まだ不安のほうが大きいか

だろうか。

歌劇の道に進んで失敗したら？ それで生きていけない
なったら、私はいつだってどうすればいいの？

『……どうしようね』

「瑞希ちゃん、大丈夫？」

「だ、大丈夫だよ。……大丈夫、できる」

そしてついに、定期公演当日。

私たちは、近くの大きいホールの舞台袖で用意をしていた。

私が演じる、主役のアリスは空を飛ぶことを夢見る少女。

みんなに否定され、反対され、悩んで苦しんで、それでも

夢を諦めずに進む決意をする物語だ。

今まで、私は練習でいい演技ができなかった。それでも主

役を降ろされなかったのだから、本番は……本番こそ、「ア

リス」になりきらないと。

「……【私は諦めないよ、リゼ】」

決意の言葉を呟いた。

諦めない、諦めない。今だけはアリスになりきって……そ

れだけを考えるのだ。

「瑞希ちゃん、スタンバイだって！」

「わかった、今行く！」

リゼ役の子に呼ばれ、私はアリスの髪飾りを調整してから、

緞帳の降りた舞台に走る。

「瑞希ちゃん」

監督が、位置に着いた私に微笑んだ。

「瑞希ちゃんなら、大丈夫」

「……はい！」

そうだ、私なら大丈夫。未来への不安も現実への恐怖も投げ捨てて、夢だけを追えばいい。それがアリスなのだから。

「歌劇【空を夢見る少女】、開演致します」

放送とともに、ゆつくりと緞帳が上がっていく。

その先に見えるのは、目を輝かせる観客でいっぱい、観客席だ。

「……っ」

白色のスポットライトが私を照らす。観客の視線が私に集まる。舞台セットが照明を反射して眩しい。私の衣装が舞台袖の扇風機の風を受けて摩く。

そのすべてを認識した瞬間、私はとてつもない高揚に襲われた。

……ああ、そうだ、これだ。

私は、これを夢見てここまで来たのだ。

私が小さい頃に夢見た歌劇の世界に、今主役として立っているのだ。

感動をかみ締め、私はぎゅっと自分の手を握った。

すうっと息を吸い、思いのままに、アリスの最初のセリフを紡ぐ。

「——【青い空、白い雲】」

『……わあ……っ！』

歌劇を初めて見たのは、数年前。

眼前に広がる世界はきらきらしていて、きれいでかつよくて、どうしようもなく魅力的だった。

たくさんの人の声が重なる歌、激しいのにしなやかな動きもある踊り、そして頭のとっぺんから足の指先まで洗練された演技。

『すてき……私もやりたい』

私が目にした歌劇の舞台は、その瞬間に私の夢のすべてになったのだ。

私はずっと迷っていた。

夢を追い続けていいのか。失敗したらどうするのか。現実には甘くないんじゃないのか。でも夢は諦めるべきじゃないんじゃないか、って。

もちろんそれも大事だけど、私は一番大事なことを忘れていたのだ。

「私は……」

唇から流れ出る言葉は、今までのどんな時よりも熱を帯びていた。

理解できていなかったアリスの気持ち、手に取るようにわかる。

「【私は諦めないよ、リゼ】……っ！」

「【わからないわ、アリス！ あなたのそんな夢、叶うはず

がないのに！」

お母さんは、現実的じゃないと言った。

千紗も、夢と現実は違うと悩んでいた。

でも、そうじゃないのだ。

舞台上上がってやつと思いついた。

「夢を諦めたことで後悔したくないの。そうするくらいなら、叶わなかったことを悲しみながら死ぬほうがよっぽどいいよ」

ああ、そうだよ、アリス。私もそう思うよ。よく共感できる。

未来への不安や成功するかどうかに囚われていて、私がなぜ歌劇の世界に進みたいのかを忘れていた。

私は観客でいっぱいホールが好きだ。

眩しい一筋のスポットライトが好きだ。

光を受けて輝く、舞台セットが好きだ。

刺繍が施された、綺麗な衣装が好きだ。

そして何よりも、自分たちの声で、体で、誰かに光と希望を届けるのが好きなのだ。

「私は空を飛んでみたい！鳥みたいに自由に、雲のように悠々と」……！」

私は、歌劇の世界に進みたい！あの日見た希望のように輝かしく、あの日抱いた夢のように煌びやかに！

アリスがこのとき抱いていたのは、不安でも期待でもない。

夢見る空への無垢な愛だ。

もちろん不安もあるけれど。でも、それ以上に空を愛し、飛ぶことを強く望んでいるから、夢を追う以外の未来を想像できない。

決めた。

私は、夢を追いかける。

だって、歌劇を愛しているから。

未来への不安、現実への恐怖、それがあっても尚、私は歌劇への尽きせぬ愛を捨てられない。

「私は、空を飛ぶために生きるの！」

私は、この舞台の上で輝くために生きる。

「……お疲れ様、瑞希。よかったよ」

「ああ。ほんとによかった。お疲れ様」

家に帰ると、お母さんとお父さんが拍手して褒めてくれた。私の気持ちをすべて込めた演技が認められて、じわりと心臓に温もりが広がる心地がした。

「あのね。私、やっぱり歌劇の道に進むよ」

「！」

私は堪られずにその場で決断を話した。

どうしても、お母さんとお父さんには最初に話しておきたかったのだ。

「叶えるのも難しいし、それで生きていくのも難しいけど、それでもやりたい」

「そうか」

「そう。……【夢を諦めたことで後悔したくないの。そうするくらいなら、叶わなかったことを悲しみながら死ぬほうがよっぽどいいよ】」

「……！」

このアリスのセリフ、私が言いたいことそのまんまだ。

ありがとうアリス、あなたのおかげで私は大事なことに気がつくことができた。

そんな気持ちを胸に抱えて、私は二人に自分の夢を語った。

「私は、小さい頃に見に行った歌劇みたいな世界を演じたかった」

あの綺麗な世界は、一瞬で私の視線と心を奪い、私に夢を与えてくれた。

あの世界は私の夢そのものののだ。

だから、私はその感動を他の誰かにも分け与えたい。

「あのとき見た人たちが私の夢になったみたいに、私は誰かの夢になりたい」

それが私の夢。

舞台に立って、輝く光のもとで、誰かの心で輝く夢になり

たい。

「……」

私が言い切ると、お母さんは息を呑んだ。そして私の意志の強さを感じ取ったのか、すぐに優しいほほ笑みを見せてくれる。

「……私もね、音楽の道に進みたくて音大に進んだの」

「え……そうだったの？」

いきなり飛び出してきた初耳の情報に、私は目を見開く。

だって、お母さんはずっと事務職のはずなのに……音楽なんて、一言も……。

「でもね、上手くいかなかった」

「……っ」

今までのお母さんの言葉がぜんぶ、腑に落ちた。

……だから、今までお母さんは夢を追うことに反対してきただのか。

失敗を経験したお母さんの言葉は、誰よりも重かった。苦しみが伝わってくるようで、なんだか体が緊張してしまう。

でも、そんな私の様子とは反対に、お母さんはとても穏やかな顔をしていた。

「大変だったから、同じ苦しみを味わって欲しくなくて反対してたけど。そういえばね、私、失敗はしたけど後悔はしてなかったよ」

「……っ、じゃあ……！」

「うん。……応援する」

ずっと反対し続けていたお母さんが、認めてくれた。

それが嬉しくて嬉しくて、私は思わずお母さんに思いっきり抱きついた。

「ありがとう、お母さん……！」

「……頑張ろうね、瑞希」

「頑張れよ、瑞希」

お母さんの言葉に乗じて、今まで黙っていたお父さんも柔らかな声で励ましてくれる。ああ、なんて幸せなんだろう。

みんなに自分の夢を応援してもらえるなんて。

「ありがとう……ほんとに、ありがとう！」

私は何度もお礼を言っ、それから慌ただしくバタバタと二階に駆け上がった。

続いて、私は自分の決断を千紗に聞いて欲しくて、スマホの連絡先を開いた。

——と同時に、私がいま電話をかけようとしていた千紗から、電話がかかる。

『もしもし、千紗？』

『瑞希！ 舞台観たよ、すごかった！』

『本当？ ありがとう』

千紗の声は、以前のようなハリのある元気な声に戻っていた。

……感動してくれたんだ、よかった。

『あのね、瑞希。瑞希の演技見て、私も決心ついたよ。美術の道に進むって！』

『え……ほんと？』

『ほんとのほんと！』

千紗の興奮がスマホ越しにもわかる。どうやら私の演技で決心がついたというのは、誇張のない事実のようだ。

『アリスは空が大好きで、瑞希は舞台が大好きなんだって。いうのがわかってさ。私も、絵が好きだから美術の道に進みたいんだってことを思い出したんだ』

苦しい、辛いと嘆いていた声が明るい。

絵に対する愛が伝わってくる。

そして何より、私の気持ちがちやんと理解してもらえたんだって、嬉しい。

そう思っ、私も早口で千紗に報告した。

『私もね、歌劇の道に進むって決めたよ』

『……！』

千紗の嬉しそうな息遣いが聞こえた。

お互いに悩んで苦しんで、それでも出した答え。同志とまだ夢を追えることに、純粋な喜びと期待が胸に尽きなかった。

『頑張ろうね、千紗』

『うん！頑張ろうね、瑞希！』

「……これでよし」

その夜。私は、進路志望の紙に大きく、私が行きたい歌劇学校の名前を書いた。

迷ったり悩んだりする日々は苦しかったけれど。これからもたくさん苦しい思いをするだろうけど、もう大丈夫だ。

だって思い出したから。私が夢見たきっかけを。歌劇に注ぐ愛を。

どれだけ苦しくても悲しくても、この愛さえあれば頑張れる気がする。

そうだ。私は努力して、いっぱい悩んで答えを出して……
そうして、夢を叶えるために走って走って生きていくのだ。

いつか、私が誰かの夢になる日まで。

ナマリ

青森県立八戸高等学校 三年 石丸綾音

「鉛は柔らかくて成形しやすく、放射線を吸収するというメリットがある一方、身体への蓄積性があるというデメリットがある。」

そう化学の授業で習ったとき、私は「訛り」の漢字を真つ先に思い浮かべた。理由は語呂だけではない。その性質も、どこか似通っているんじゃないかと思ったのだ。

私が二つのナマリに運命を感じた理由の一つはその「やわらかさ」にある。普通に言われるとちよつとイラっとくる言葉も、訛りがあるとなぜか柔らかな印象を与える。∴鉛と一緒だ。

続いて、皆さんは「はんだごて」を知っているだろうか？高温で熱して金属同士をくっつけるアレだ。私は中学校の技術の授業で使ったのだが、金属が溶けるといのが珍しくて印象に残っている。実はアレにも鉛が使われている。これは、訛りで言うところ、都会で同じ訛りの人を見つけると嬉しくなる現象に似てるなと思った。私も実際大会等で都会に行くとき

森出身の大人から、「その訛り懐かしいなあ」とか、「もしかして青森の人？」とか聞かれたりする。バラバラだった人達を同郷意識で繋げる、そんな役割もナマリは果たしていたのだ。

実は私は色々な訛りが大好きで、青森だけでなく関西や九州など色々な地方の方言を動画サイトなんかで聞くことが多い。今まではなんとなく好き、だったのが「鉛」との共通性を見出したことにより、私はこの「柔らかさ」に惹かれていたのだと気づいた。

それから、鉛は気体と結びついて沈殿しやすいらしい。沈殿には色々な色があり、その土地の人々に染み込んだ訛りにそっくりだ。大好きな訛りを、ずっと聞ける地元であつて欲しいなと強く思う。

最後に。その有毒性から鉛は近年使われなくなり、代替品の開発が進んでいる。古代ローマの時代から人々の身近にあった鉛も科学の発展と共に廃れていってしまうようだ。幸い「訛り」に害は全くない。古くから残る訛りが廃れないように。そう願って、私は放送部での活動である小説の朗読で「訛ったセリフ」をたくさん読むようにしていた。訛りは人が何度も何度も繋いでここまで生き続けてきた。何度も充電して使い続けられる「鉛蓄電池」みたいに。今の私に、将来の私に、訛りを繋いでいくために何ができるか、考え続けたい。

私の心の奥底に眠る言葉

青森明の星高等学校 三年 船橋 拓実

「短歌ってよくわからない」

私は常々、そう思っていた。私が最初に短歌を作ったのは、高校一年の四月。何の気なしに文芸部の見学に行った際に、せっかくだからと先輩に言われて短歌を作った。先輩が持つ国語辞典から適当に引いた言葉を題として、その場で即詠をした。その時は二つ題があり、その内の一つが「雲間」という題だった。短歌は国語の授業で教科書を通してでしか読んだことがなく、短歌をろくに詠んだことがない私がすぐに作れる訳がない、と内心で強く思った。雲の間を想像していると、原爆や空爆などの戦火の様子が思い浮かんだ。

雲間から突き刺す閃光

広島の走る少女の食べかけのアイス

原爆投下により日常が非日常に変わる様子を頭の中で想像し、そのワンシーンを切り取って作ったのが、私の短歌作りの最初だ。そこから四か月、盛岡で開催される全国高校生短歌大会（短歌甲子園）に出場することになった。先輩三人と

団体戦に出ることが分かり、足を引つ張りたくない一心で、いろいろな歌人の歌集を読み、短歌を創作した。

老眼の父の見ている古本の

栞代わりにレシートを挟む

大会では全国優勝を果たしたが、何が正解なのかがわからなかった。大会で披露された全国の高校生たちの短歌は、社会性や政治的な背景を表した短歌や固有名詞を出したりほとんど漢字だったりなど、自由な短歌が様々あった。そのような短歌と触れ合う中で、自分の個性とは何なのだろうと思うようになった。短歌がよくわからなくなっていくた。

高校二年になり、作風を変えてみるなど、自分なりに短歌について考えるようになった。今までは自分の気持ちを何かに喩えて表現し、日常の少しドラマチックな瞬間をそのまま短歌に落とし込むような創作をしていた。

帰り道あなたの影を踏みながら

歩くと一つになれる気がした

そこから倭万智に倣って、日常の何気ない場面を歌にして創作してみたが、倭万智の作品のような魅力的なものにはならなかった。自分の中で試行錯誤をしながら短歌と向き合い、考える過程で出会ったのが、穂村弘の著書『はじめての短歌』だった。良い短歌とその改悪例から、優れた短歌とはどういうものなのか論理的に説明されていた。私はそれまで自分の感覚で短歌を創作していたが、論理的かつ自分の感覚

に縛られない自由な短歌を作ろうと思うようになった。

私がこの本の中で、特に好きで影響を受けた短歌が二つある。一つ目がこの本で一番初めに紹介される平岡あみさんの短歌だ。

空き巣でも入ったのかと思うほど

私の部屋はそういう状態

空き巣でも入ったのかと思うほど

私の部屋は散らかっている（改悪例）

最後の「そういう状態」という表現が、短歌の良さそのものを表している。改悪例の「散らかっている」ではダメだ。

「そういう状態」とは、どういう状態なのかを読者の想像に委ねているのに対し、「散らかっている」ではただの事実を情報として読者に差し出している。短歌は読者の想像を掻き立て、記憶や経験を呼び起こすことが大切だ。それからは、事実をそのまま書かないよう意識して、短歌を創作するようになった。

二つ目は、やすたけまりさんの短歌だ。

「煤」「スイス」「スターバックス」「すりガラス」「すぐむ

きになるきみがすぎです」

非常に計算された短歌で、とても面白い。かなり好きな短歌だ。しりとりにしている二人。一人はしりとりで、「す攻め」をするくらい負けず嫌いで「すぐむきになる」人。そんなすぐむきになる所も含めて「すぎです」と愛の告白をしり

とりで伝える、もう一人。そうした構図を思い浮べられることが出来る、自由でロマンチックな短歌だ。

私は「短歌ってよくわからない」と。常々そう思っていた。だが、この本を読んで自分なりの短歌への解答ができた気がする。与謝野晶子や石川啄木などの明治や大正時代の短歌は勿論、現代短歌を読みながら、時代・性別・立場など、何もかも違う人が作った短歌が心に響くのはなぜだろう。答えは一つだけだと思う。短歌は、自由なものだからだ。言葉は有限であり、日常の中で語り尽くされ手垢のついた表現ばかりの中で、自分の心の奥底に眠る言葉の連なりを探し紡ぎ出すことで、自分だけの自由な短歌が生まれる。それはどの時代の歌人も同じなのではないか。時代を超えて、共感よりもっと力強い衝撃・発見として短歌はその存在感を増していくだろう。

来春、私は大学へ進学予定だ。文芸創作を生涯の目標とし、人々の孤独に向き合う作品研究に励むつもりだ。そして短歌をこれからも作り続ける。

「人生」というハイウェイで

カーナビに夢を打ち込む 十八の春

『はじめての短歌』

穂村 弘 著

河出書房新社

◆まずは私事（わたくしごと）から。去年の11月12日、非常勤講師をしていた大館鳳鳴高校定時制の校舎内で倒れた。74歳4カ月だった。

休み時間に生徒と職員室前の廊下で話していて、急に体に力が入らなくなり、その場にくずれ落ちた。午後3時半ごろだったと思う。すぐ、養教の先生に抱えられて職員室に入り、血圧を測った。220ぐらいあった。意識はあり、手足も動いたが、しゃべっていてもろれつが回らなかった。養教の先生の車に乗せられてかかりつけ医に連れて行ってもらい、そこでもろれつが回らなかった。夕方、市立総合病院に回され、MRIやいろいろな検査され、そのまま入院し

た。脳梗塞だった。普段から血圧が高く血圧の薬を飲んでた。ただ、毎日の血圧測定を勧められていながらそれをせず、薬もしよっちゅう飲み忘れていた。8日間入院した。なんとか軽くすみ、ろれつも回復し手足の後遺症も残らず、職場復帰し年度末まで勤務した。

◆『三潮』は今号で49号。全国で唯一の教職員の文芸誌である。執筆者は全国唯一であることの誇りと自覚を持ち、投稿している。私も研鑽を積み、推敲を重ねたい。

◆ところが、年々高齢化のため、退職者の投稿数が減り続けている。通常投稿者で見ると、前々号の47号が51名、前号の48号がついに50名を切って49名、今49号がさらに減って42名である。

◆『三潮』の存続が問題になってもおかしくない状況であるが、事務局

の話では次号の50号は必ず発刊することのこと。51号以降の発刊については、様々な方面から検討して決めていきたいとのことである。我々編集委員会の意見は、もちろん存続・継続発刊したい。

◆各学校や諸団体に配付される『三潮』が教職員などに有効に活用されているのかどうかも疑問、たという声もある。現場に配付されている『三潮』が本場に現職の先生方に読まれるようになれば、もう少し投稿者の増加が期待できると思う。

◆投稿者の増加、配付された『三潮』の有効活用、どちらも特効薬はないのかもしれないが、諦めずに今一度構成などを刷新して、みんなで見えを出して『三潮』を存続させていきたいものだ。

（浅利 正人）

原稿募集要項

三潮 第50号

原稿受付期間 2026年4月1日～8月31日（必着）

発刊予定 2027年1月中旬

部門・規格 ※「タイトル」・「作者名」は含みません

随想（エッセイ）	400字詰 5枚以内
紀行・ルポルタージュ	400字詰20枚以内
自伝・評伝	400字詰20枚以内
文芸評論・書評	400字詰20枚以内
児童文学（童話も含む）	400字詰20枚以内
詩	400字詰 3枚以内
短歌・狂歌	五首以内（題名を付すこと）
俳句・川柳	五句以内（題名を付すこと）
小説（フィクション）	400字詰50枚以内
戯曲・シナリオ	400字詰50枚以内

応募資格 教職員及び退職教職員

応募方法 郵送、FAX、メール

応募上の注意

「文芸誌『三潮』第50号投稿申込書」を記入し、応募原稿を添付すること。

- 各部門の規格枚数を厳守すること。
- 1人1作品とし、オリジナル作品に限る。
- 応募原稿は、手書き又は印字したものとす。（メールの場合は、別途印字したものを郵送すること。）
- 印字した場合は、A4たて書・20字×20行、12ポイント以上とし、可能であればデータ（CD等）も同時に提出すること。
- 送り仮名・新旧仮名づかい・外国語表記等は、特別な意図のない限り統一すること。
- 専門用語及び造語については、注釈を付すこと。
- 文献等を引用した場合は、その旨を明記すること。
- 作品の採否は編集委員会で決定し、原稿等は返却しない。

作品の送り先および問い合わせ先

☎030-0823 青森市橋本一丁目2-25

一般財団法人 青森県教育厚生会 総務課

電話 017-721-1310

FAX 017-723-2267

e-mail soumu@a-kyouiku-kouseikai.or.jp

編集委員

浅利 正人	退職教職員（大館市）
蝦名 敏實	退職教職員（青森市）
小笠原辰実	七戸高等学校
工藤 ふみ	退職教職員（青森市）
工藤 雅司	退職教職員（青森市）
袴田 孝子	浪岡養護学校
日山 浩平	八戸高等学校
船橋 敏昭	退職教職員（青森市）
宮内 香宝	退職教職員（和田市）

（五十音順）

三潮 第49号

令和7年12月22日発行

編集

三潮編集委員

発行人

（一財）青森県教育厚生会

理事長 逢坂 拓

発行所

（一財）青森県教育厚生会

〒030-0823 青森市橋本一丁目2-25

電話 017-721-1310

頒価 1,200円（送料・税込）

文芸誌『三潮』へのご意見・ご感想をお寄せください
googleフォームはこちらから





挑戦と創造は 次のステージへ

金融のプロフェッショナルとして。
地域に最も寄り添う存在として。
お客さまに伴走しつづけるパートナーとして。

私たちは、挑戦する。
経済や環境にまつわる、
ふるさとの課題解決に。

私たちは、創造する。
この土地だけの新しい価値を。

すべては、この地域が
ずっと住みたい、帰ってきたいと思える
魅力ある場所であるために。

これからの「豊かさ」を生み出す
未来創造グループを目指して。
わたしたちの挑戦と創造は、
次のステージへ。



社員の特別インタビューを
こちらからご覧いただけます。



青森みちのく銀行

— ISO14001 環境マネジメントシステム認証取得 —

青森オフセット印刷株式会社

環境に負荷をかけない製品作りで
皆様のコミュニケーションをサポートいたします。



ポスター、パンフレットなどの商業印刷物
から学術書、個人出版など出版印刷物まで、
広い分野の印刷を手掛けています。
情報加工としてインターネット・コンテンツ
制作や各種データの作成、加工、出力をおこ
なっています。

〒030-0802 青森市本町2-11-16
TEL.017-775-1431 FAX.017-775-1435
e-mail comm@a-offset.co.jp
URL <http://www.a-offset.co.jp>

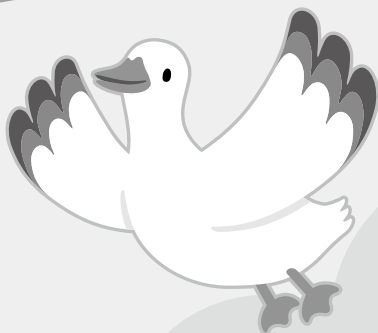


がん保険の枠を超え、 一人ひとりに最適な安心を

保障と相談サポートで

あなたによりそう
がん保険
ミライト

No.1 アフラック
がん保険
契約件数
各社の統合報告書などに基づくアフラック調べ(2024年3月時点)



◎商品の詳細は「パンフレット」「契約概要」などをご確認ください。

〈募集代理店〉〈アフラックは代理店制度を採用しています〉

株式会社RAB企画 TEL 0120-55-7064

〒030-0113 青森県青森市第二間屋町3丁目2-35

FAX 017-739-3598

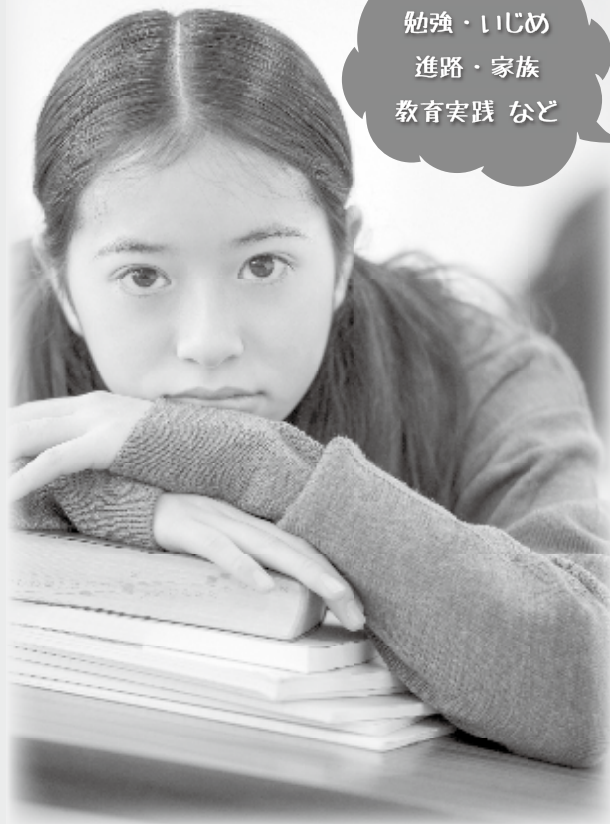
〈引受保険会社〉 「生きる」を創る。

Aflac

アフラック
青森支社

〒030-0802青森県青森市本町1-2-15 ユニバース青森ビル
Tel.017-777-0963 Fax.017-777-0942

AFアツ課-2024-0472-2510005 11月22日



勉強・いじめ
進路・家族
教育実践 など

ひとりで悩まないで
悩みごとをお話してください。
どんなことでも、どなたでも受け付けています。

受付 月・水・金 9:00~16:00 相談無料

☎ ^{ナヤミ}0120-783-087 ^{ヲハナシテ} (悩みを話して)

✉ E-mail: smile@a-kyouiku-kouseikai.or.jp

電話、面談のほか、メールでも受け付けします。



親と子と教師の教育相談室 **スマイルサポート** 青森県教育会館 1F

設置者 一般財団法人 青森県教育厚生会 〒030-0823 青森市橋本一丁目 2-25 TEL 017-721-1310

